トヨタ財団
1990(平成 2)年度年次報告

目次

目次 …… 2
凡例 …… 3
理事・監事 …… 4
評議員 …… 5
経済大国の「ひとつの顔」としての責任を自覚しつつ　飯島宗一 …… 6
新たな展開を目指す市民活動と市民研究への支援　山岡義典 …… 8
国際比較研究助成への動きと研究成果の出版　若山佳子 ……12
Ⅰ．研究助成
Ⅰ-0.研究助成の概要 ……18
Ⅰ-1.第Ⅰ種研究（個人奨励研究） ……21
Ⅰ-2.第Ⅱ種研究（試行・準備研究） ……29
Ⅰ-3.第Ⅲ種研究（総合研究） ……34
Ⅱ．研究コンクール
Ⅱ-0.研究コンクールの概要 ……42
Ⅱ-1.第５回研究コンクール 最優秀賞・優秀賞 ……44
Ⅲ．市民活動助成
Ⅲ-0.市民活動助成の概要 ……50
Ⅲ-1.市民活動助成（第１期） ……52
Ⅲ-2.市民活動助成（第２期） ……53
Ⅳ．国際助成
Ⅳ-0.国際助成の概要 ……60
Ⅳ-1.国際助成対象 ……62
Ⅳ-2.国際助成 インドネシア若手研究者奨励研究助成 ……80
Ⅴ．「隣人をよく知ろう」プログラム
Ⅴ-0.プログラムの概要 ……86
Ⅴ-1.日本向け・翻訳出版促進助成 ……88
Ⅴ-2.東南アジア・南アジア向け・翻訳出版促進助成 ……92
Ⅴ-3.東南アジア・南アジア相互間・翻訳出版促進助成 ……96

VI. その他の助成
VI-0.その他の助成の概要 ……100
VI-1.計画助成 ……101
VI-2.成果発表助成 ……105
VII. 会計報告・事業日誌
VII-0.事業実績の概要 ……108
VII-1.1990（平成2）年度会計報告 ……110
VII-2.1990（平成2）年度事業日誌 ……113

凡例

1．財団法人トヨタ財団は，1974（昭和49）年10月15日，トヨタ自動車工業株式会社及びトヨタ自動車販売株式会社(両社は1982年7月1日合併し，トヨタ自動車株式会社となりました）の出捐に基づき，総理府より設立許可を受けた民間助成財団です。

2．当財団では，1975年度以来毎年度，和文・英文の年次報告書を作成し，広く関係者にお配りしております。

3．この年次報告書は，1991年6月20日の第60回理事会において承認されました「平成元年度事業報告書」に基づき，当財団の1990（平成2）年度（1990年4月1日～1991年3月31日）の事業内容をとりまとめたものです。

4．本報告書中の助成対象一覧は，いずれも助成決定時のものであり，決定以後の変更は割愛しました。ただしこれまでの助成対象について助成金額の変更があったものについては，会計報告欄にそれを記載しました。

5．本報告書中の助成概要は，いずれも助成決定時における計画の概要であり，助成による研究等の成果ではありません。これらの概要は，助成対象者からの提出書類に基づき，財団事務局にて作成したものであり，文責は当財団にあります。

6．当財団では，和・英文の年次報告のほか，年4回「トヨタ財団レポート」を発行しており，これらは希望者に無料でお配りしておりますので，御希望の方は官製ハガキで当財団事務局あて，お申しこみください。

理事・監事

1991(平成3)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

会長	豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役会長
理事長	飯島宗一	名古屋大学・広島大学名誉教授
常務理事	山口日出夫	財団法人 トヨタ財団事務局長
理事	天城 勲	文部省顧問
	大島正光	財団法人 医療情報システム開発センター理事長
	加藤一郎	成城学園学園長，弁護士，東京大学名誉教授
	加藤誠之	トヨタ自動車株式会社顧問
	神尾秀雄	トヨタ自動車株式会社相談役
	草場敏郎	日本銀行政策委員会委員
	冨永誠美	全日本空輸株式会社顧問
	松本 清	トヨタ自動車株式会社相談役
監事	伊藤 哲	公認会計士
	菊池 稔	東京海上火災保険株式会社相談役

評議員

1991(平成3)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

飯島宗一	名古屋大学・広島大学名誉教授，財団法人 トヨタ財団理事長
石井米雄	上智大学教授
岡本道雄	京都大学名誉教授
加藤誠之	トヨタ自動車株式会社顧問，財団法人 トヨタ財団理事
楠 兼敬	トヨタ自動車株式会社相談役
駒井又二	豊田工業大学顧問
小山五郎	株式会社 太陽神戸三井銀行相談役・名誉会長
佐伯喜一	財団法人 世界平和研究所副会長
杉浦敏介	株式会社 日本長期信用銀行取締役相談役・最高顧問
辻 源太郎	トヨタ自動車株式会社相談役
豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役会長，財団法人 トヨタ財団会長
豊田章一郎	トヨタ自動車株式会社取締役社長
永井道雄	財団法人 国際文化会館理事長
縫田曄子	ジャーナリスト
沼田 真	千葉大学名誉教授
林 健太郎	参議院議員，東京大学名誉教授
林 雄二郎	東京情報大学学長
平尾 収	東京大学名誉教授
本明 寛	早稲田大学名誉教授
森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団前副理事長
盛田昭夫	ソニー株式会社取締役会長
渡辺 武	財団法人 損害保険事業総合研究所会長

経済大国の「ひとつの顔」としての責任を自覚しつつ

トヨタ財団　理事長
飯島宗一

トヨタ財団は1990（平成2）年度においても，従来からの方針を継承しつつ積極的な助成活動を行ってきました。

要約するとそれは，「新しい人間社会の探求」を目指す学術研究への助成，市民の環境研究を促進する研究コンクール，市民活動の形成と発展のための市民活動助成，東南アジアの固有文化の保存と振興に関するプロジェクトを支援する国際助成，東南アジアや南アジアの人々との相互理解の促進を目的とした「隣人をよく知ろう」プログラムなどの分野を含んでいます。新しい世紀を眼前にした現在，学術，市民社会，国際的連帯のそれぞれは，日本ひいては人類社会の明日を創っていくうえでの，いずれも大事な要素であると考えられますから，それらの分野でささやかながら寄与を果たし得ることは，財団にとっての喜びであります。

それに加えて，トヨタ財団は助成財団資料センターへの協力を通じて，日本の助成財団全体の発展にも応分の力をさき，また企業フィランソロピーのあり方について，その概念と実践とを深めるための探求に絶えず努めています。それを基礎に財団の活動を自ら厳しく評価し，点検し，今後の新たな展開を構想し実現することも，怠ることのできない責務であると考えております。このたびの年次報告をご覧いただいて，多くの助言，ご叱正を賜ることを財団は衷心から希望いたします。

差し当たって，国際的な助成活動をどのように充実していくかは一つの問題であります。このため，財団のスタッフもできるだけ機会をとらえて実際に海外に足を運び，また財団としても国際的に各国の関係団体との連携を深める努力を重ねております。それは日本の国際的貢献といわれる事柄の視野からも，避けるべからざる責務であると考えられます。市民活動は一見国際

助成とは別のカテゴリーのようにみえますが，実は市民活動の成熟はいまや地球的レベルの課題であり，また環境，福祉，生活の質，人口，資源，教育等々いずれの断面を取り上げてみても，それは本質的に国際的な共通性の認識と連帯を要請するものであります。学術研究はもとより国際的性格のものであり，以上の意味では，国際社会のなかでの「日本の」，「トヨタ財団の」役割についての自覚をいっそう深め，かつ具体化させなくてはなりますまい。それは決して容易な道ではないと思いますが，力を尽くしてまいるべき課題であります。

もちろん，財団の活動の更なる充実・発展のためには，財団の資金力のいっそうの拡充も望まれるところでありますし，またその有効な活用の方法，システムについても検討がいりましょう。公募方式は公正で優れた方法でありますが，あるいは計画的なまとまった助成を加味して，財団の個性を表現する方策も研究の余地がありましょう。いずれにしても，小なりといえどもトヨタ財団は，経済大国日本の「ひとつの顔」としての責任を担っております。誤りなく歩んで行くべく努めたいと思います。

新たな展開を目指す市民活動と市民研究への支援

トヨタ財団　プログラム・ディレクター
山岡義典

●二つの報告会にみる草の根の力

この3月から4月にかけて，トヨタ財団では二つの集会を開催した。一つは「自立と共生をめざして」をテーマとする第28回の報告会，もう一つは"身近な環境をみつめよう"をテーマに実施された第5回研究コンクールの賞の贈呈と報告の会である。

前者の報告会は3月16日，東京都社会福祉総合センターで行われた。午前中はまず，これまでの活動の歩みを取りまとめて出版した六つの市民団体からの発表である。財団の助成によってすでに21の市民団体がその活動記録を出版しているが，それらのなかから，さまざまな問題や課題を内包しつつも，それを乗り越えて活動を続けてきた各分野の団体である。福井県大野市で地下水の保存を訴え長年の観測調査を行ってきた「大野の水を考える会」，埼玉県大宮市で精神障害者の社会復帰活動を進めてきた「社団法人やどかりの里」，東京都世田谷区の住宅地で高齢者への食事サービスを進めている主婦グループ「ふきのとう」，バングラデシュで民衆の生活向上のための活動を展開してきた「シャプラニール――市民による海外協力の会――」，障害をもつ子供たちの自立の家づくりから全国での"わたぼうしコンサート"の展開まで，新鮮な感覚で障害者との共生活動を進めてきた「奈良たんぽぽの会」，富山県の廃村を根拠地に独自の営農活動を進めながら植林地の下草刈りなどの環境保全活動を実践してきた「農業開発技術者協会」。

個性的な活動に身を捧げてきた当事者から聴く8～24年の試行錯誤の歴史は，淡々と語られながらも刺激に満ちたものであった。そのいずれもが，陳腐化するどころかますます先駆者としての熱気を増幅させつつ活動を発展させているように見受けられた。

午後はこれらの事例を参考に「活動を支えるもの，阻むもの」をテーマとするパネル討論が行われ，最後に市民活動助成の選考委員長でもある栗原彬氏（立教大学教授）が，「これからの市民活動はさまざまな人とのやりとりのなかから，自己決定し，活動していくことが大事になってくる」と締めくくって会を閉じた。

もう一つの会，第5回研究コンクールの贈呈式と研究報告会は，4月5日の午後，東京港区の国際文化会館で行われた。小原秀雄選考委員長（女子栄養大学教授）の経過報告に続いて三つの受賞チームから3年近くに及ぶ研究成果の報告が行われた。

最優秀賞は「函館の色彩文化を考える会」。地元でタウン・ウオッチングに興ずる人たちと札幌の建築家たちの見事なチームワークが，明治以来の建物のペンキの色の変遷を明らかにし，都市景観の分析に新しい視点を導入したものだ（詳しくはp.45参照）。優秀賞は山梨県の「都留市ムリネモ協議会」と沖縄県の「魚垣の会」の2件。研究の内容や性格は異なるものの，それぞれに山地と海辺で人間と生物のかかわり合いを問い直そうとしたものである（詳しくはp.46，47参照）。

これら二つの会を通して私たちが確認したものは，日本の社会にも黙々と育ちつつある草の根の力である。そしてそのような力の成長に，私たちの財団がいくらかでも関与できたことに対する喜びである。ここでは，その関与の過程と現状，そしてその課題について整理し，考えてみたい。

●市民活動助成の新展開

市民活動助成は本年度から新たな段階に入った。その基になるプログラムは，研究助成の特定課題「新しい人

間社会の探求を目指した市民活動の記録の作成」として1984年度に開始されたものだ。2年後の1986年度からは活動記録助成の名で独立したプログラムとし，それまでの助成で作成された記録の出版へも助成することにした。この助成を始めた意図を，私はその年度の年次報告で次のように述べている（注1）。

「何よりも個々の活動体験を共有の財産として社会に利用可能なものとすることが重要と考えたからではあるが，同時にこのような基礎的で比較的危険の少ない助成事業を行うことによって，私たち自身も活動の実際をより深く知り，財団としてのかかわり方を訓練し，今後の助成プログラムの具体的な内容について模索したいと考えたからである。」

実際，私たちはこの記録の作成と出版への助成を行いながら一歩一歩，市民活動の世界と接触を深め，そのなかで企業財団として果たすべき役割を考え，助成に当たって考慮すべきことを学んでいったのである。

その結果，1988年度にはその名称も市民活動助成と改め，助成規模もいくらか拡大し，助成内容も活動記録の作成や出版以外に，市民活動全体の基盤整備や市民団体相互の交流事業も対象に含めることにした。しかしこれらの基盤整備や交流事業については，試行的ということで一般公募はせず，それまでに開拓した人脈をたどりながら，ふさわしい助成対象を発掘していくという形を取ってきた。このようにして少しずつ慎重に，プログラムを発展・拡大させてきたのである。

このような6年間の体験を背景に，本年度からはこの基盤整備や交流事業を公募の中心とした助成に踏み切った。予算も3,000万円へと拡大し，公募もこれまでの年1回から現実的な要請に従って年2回とした。助成の内容としては活動記録の作成や出版も含んではいるが，その比重は以前よりは低い。そのプログラムの内容や助成結果は，p.50以下に示すとおりであるが，結論だけを要約すると，助成対象は基盤整備や交流事業が11件，記録の作成が5件，記録の出版が3件となっている。

こうして，記録の作成から始まった市民活動への助成はしだいにその範囲を拡大し，助成の重点をシフトしてきた。しかし急速な拡大や分野のシフトは慎重にしている。日本の社会での市民意識の高揚，市民活動の発展の着実な推移をみつめつつ，その伸びる力にふさわしい対応こそが大切だと考えている。冒頭で紹介した第28回の報告会は，これまでの出版の成果を公表し確認するのが主な目的ではあったが，今後のそのふさわしい対応を考えるためのものでもあったわけである。

（注1）山岡義典：市民活動の体験を共有の財産に「トヨタ財団1986（昭和61）年度年次報告」p.19（1987）.

●これまで5回の研究コンクールの評価から

“身近な環境をみつめよう”をテーマとする研究コンクールは，財団設立5周年記念事業として1984年度にスタートした。以後隔年に実施して5回まで行ってきたが，その経緯は昨年度の年次報告のなかで触れた（注2）。そのなかで1988年度から2年間にわたって行ってきた評価作業についても触れた。1988年度には環境研究という観点から島津康男氏に，1989年度には生活研究という立場から原ひろ子氏に，各回のコンクール参加チームへのアンケートやインタビューを含む評価調査をお願いし，これまでの実績の意義や問題点についてまとめていただいた。

この調査の結果を待って再検討するため，1989年秋に予定していた第6回の公募は保留とし，2年間延期してきた。この間，これまでの選考委員経験者に集まっていただいて評価調査の経過内容を基にした懇談会も何度か開催した。こうして1990年4月には，両氏による評価作業の結果を1冊の報告書にまとめて印刷し，関係者や参加研究チームに配布した（注3）。調査の詳しい内容はこの報告書に譲るとして，両報告ともこの種の市民による研究活動の意義や重要性を認め，いくつかの改善点を指摘した。

1990年度はこれらの総括評価を受けて事務局でその後の方針を検討した。これまでの5回をもって研究コンクールを終了とすべきか，それとも再開して継続すべきか。継続するとすればいままでどおりでよいのか，改訂すべきか。改訂するとしたらどの点をどのように改めるのか，等々の議論を重ね，結局，両報告の趣旨を生かし

てプログラムの内容をいくつか改めることにし，1991年度の事業計画に再開を組み込んだのである。主な改訂点は，名称をこれまでの研究コンクールから市民研究コンクールとするほか，予備研究，本研究の期間を若干長くしたこと，フォローアップ助成はプログラムに組み込まず必要に応じて計画助成で考慮するようにしたこと，などである。

これまで5回の研究コンクールを通じ，「市民の研究」というもののイメージはしだいに明瞭になりつつある。単なるアマチュアの研究というものを越えて，市民としての主体性を発想の根底にすえた研究活動が，しだいに盛り上がってきつつあるように思う。現在，この秋の公募開始を目指して具体的な内容を固めつつあるが，このような動向に十分に対応できるプログラムにしていきたいと考えている。

（注2）山岡義典：企業フィランソロピーの新たな流れの中で；研究助成部門のこの5年－「トヨタ財団1989（平成元）年度年次報告」p.13（1990）.

（注3）トヨタ財団：「トヨタ財団研究コンクール"身近な環境をみつめよう"第1回から第5回までの総括評価プロジェクト　報告書」（1990．4）.

●市民に開かれた企業財団

ここ数年，「良き企業市民（グッド・コーポレイト・シチズン）」の概念が日本中の企業にもてはやされている。アメリカに進出した企業を通じて日本に導入されたこの概念は，よき市民が社会に尽くすように，よき企業も市民と同じく社会に尽くすべきだ，という考えに基づいている。企業と市民のパートナーシップがその前提になるこの考え自体はたいへん素晴らしいが，しかし日本の企業社会で語られるとき，なんともいえない白々しさを感じざるを得ない。それは現実の市民生活とあまりにかけ離れた世界，ほとんど市民を拒否した世界でのお題目のように聞こえるからである。卑近な例でいえば，まずほとんどの企業は普通の市民が協力を求めてアプローチできる窓口をもっていない。たとえば主婦たちのグループが寄付の相談に行きたくても簡単には行き先がない。確かに日本の市民社会の未成熟，市民意識の未発達ということはある。長い間，企業が市民と接する場面といえば，抗議か何かの場面に限られた。だから企業にとっては企業活動に直接関係のない普通の人々＝市民はなんとなく怖い存在，近づかれたくない存在なのかもしれない。そういうことはあるにしても，企業は果たしてどれだけ本気で市民のパートナーになろうというつもりなのか，そしてそのための努力をしているのか。そのことを考えると，やはり「企業市民」の大合唱は白々しく聞こえてならないのである。

日本の社会で企業が直接市民と接しパートナーシップを組むことの難しさは，ある意味でよく分かる。それができるようになるには，もう少し時間がかかるのかもしれない。そこで企業と市民の仲介役として重要になってくるのが，企業の設立した財団＝企業財団である。企業が市民としての役割を果たす媒介，それが企業財団ではないかと私は思う。

前節までに，私はトヨタ財団で進めてきた市民の活動や研究に対する二つの助成活動について，その経緯と現状を述べてきた（注4）。それは企業財団がいかに市民との関係を築いてきたかの実験経過でもある。個々の市民活動そのものを直接助成するまでには至っていないという点では，大変臆病な助成活動かもしれない。またあまりにも慎重にすぎる展開を示していると指摘されるかもしれない。助成規模もまだまだ小さすぎるようにも思える。しかしこの臆病さや慎重さ，漸進性こそが大切なのである。日本の社会にもいま，草の根レベルからゆっくりと市民社会が育ちつつあると私は思うし，そのような芽からさまざまな助成要求が生まれつつあることを実感するが，そのような芽を企業財団の助成の嵐が吹き飛ばしてしまう可能性すら私たちは危惧すべきなのである。そのようなことにならないよう，そのような動向に適切な対応ができるよう，市民の活動や研究にかかわる財団のスタッフには，新しい兆しに対するシャープな感受性をもち続けることが要求される。

この場合，二つの視点が重要である。一般に時代の動向を読む視点には，二つの立場がある。比喩的にいえば微分的な視点と積分的な視点である。たとえば人口増減についていえば，その増減率でみるのが前者，トータル

の人口ストックの変化でみるのが後者である。微分的な視点は最新の動きから近未来の変化を鋭敏に読むには適している。マスコミ報道による情報は基本的にはこれにあたる。ここでは何が変わろうとしているか，その変化の部分＝「何か新しいもの」だけが強調される。これに対して積分的な視点はこれまでの変化の累積の全体像を重視する。変化の方向を敏感に読むには適さないが，社会全体の抱える問題や課題を構造的に把握するには適している。微分的な視点に立つと世の中は大きく変化しているが，積分的な視点からみるとその変化は大したものにはみえないかもしれない。私がここで強調しておきたいことは，私たち財団のスタッフが時代の動きをみるとき，この両方の視点をもつことが重要だ，ということである。とかく新しい部分にだけ目が行きがちな視点を，これまでの膨大な蓄積に対する部分的な追加にすぎないという覚めた視点で見直す態度といってもよい。とりわけ，インフォーマルでナイーブな世界である市民の活動や研究に関与するとき，この態度が重要になってくる。

このようなスタンスと自戒の気持ちをもちながら，企業財団を市民社会に向かって開いていく努力を，私たちは今後とも続けていきたいと思う。

（注４）「市民」の定義については厳密にはいろいろな論議がある。これまでは特に触れてこなかったが，私は「市民」を，行政の立場にも企業の立場にも従属せず，独立した社会の一員としての意識をもって行動している人々と理解している。

国際比較研究助成への動きと研究成果の出版

トヨタ財団　国際助成部門　チーフ・プログラム・オフィサー
若山佳子

●国際助成研究報告会

国際助成の15年間にわたる成果に関する報告を目的として，1990年11月にタイのバンコクで研究報告会が開催された。同時にこの研究報告会では助成対象者相互の交流を図り，助成プログラムの評価を行うこともねらいであった。(注1)

(注1) 国際助成研究報告会の詳細については「トヨタ財団レポート」No.55を参照されたい。

国際助成のテーマとしている「固有文化の保存と振興」の内容をさらに細かく分けた七つのセッションで報告が行われた。それらのセッションは，①古文書，②歴史，③伝統文化，④伝統建築・芸術，⑤言語・辞書，⑥百科事典，⑦近代化と伝統，であった。その後一般討論のセッションでは，今後の展望や国際比較研究の可能性などについて活発な意見交換がなされ，またトヨタ財団への提言もなされた。

七つのセッションで発表された研究成果は，いわゆる学会等での報告内容などと比較すると非常に多様であったが，その多様性こそが東南アジアの現実であることに気づかされる討論がなされた。それらの多様な報告と一般討論のセッションでのコメントのなかから今後のプログラム展開にとって示唆的であるものをまとめると以下の9点となる。

1）トヨタ財団が心理的な束縛なしに東南アジアの研究者のフォーラムを提供していることは評価できる。東南アジアの研究者による学問 (indigenous scholarship) が育っていくには，このような雰囲気が必要である。indigenous scholarship のイニシアチブは東南アジアの学者自身によって握られるべきで，トヨタ財団の役割はその触媒になることである。

2）アジア研究の会議で多くの場合中心になるのは欧米人である。東南アジアの研究者の多くが欧米で教育を受けてきたため，欧米の学者が学問と知識の普及の面で大きな影響力をもっている。しかしこの報告会では，アジア人同士が直接話し合うことができた。

3）東南アジアの学者は植民地時代から残存している「境界」を越えなくてはならない。越えなくてはならないのは空間の境界だけではなく，頭のなかの概念的な境界である。

4）比較研究への動きが不足している。東南アジア地域を，一つのテーマをもって全体としてみるアプローチが必要である。比較研究の視点は新しい理論的枠組みを生む。政治的境界を越える可能性をもつのは地域研究者である。一つの国に固有と思われていることでも，比較すれば共通点がみえてくるかもしれない。東南アジアの大学で東南アジア研究を教えている所は少ない。東南アジア研究のためのカリキュラムや東南アジア地域内の東南アジア研究学術雑誌が必要である。また，国境を越えて動き回れる若い世代が生まれることを促進することも大切である。

5）しかし，一国をベースとする研究の続行もやはり重要である。自国の文化の研究をしたうえで，それを隣国へ広げていくことも考えなくてはならない。自国の文化についての基礎研究はこれからも重要であり，それは比較研究と断絶するものではない。

6）トヨタ財団の国際助成で行われている研究は多様であるだけに，今後はなんらかの方向性が必要であろう。一つの国での研究が，他の国での同様な研究と対比されることが必要である。多様な助成プロジェクトのなかに，ある種のパターンがみえてくることが必要と思われる。

次回にこのような会合が行われる際には，クロス・カルチュラルな重要性のあるテーマについての長期の見通しがほしい。

7）東南アジアの各地に研究成果を保存し，公開するセンターをつくっていく必要がある。同時に，旧宗主国に行かなくても，古文書等が使えるように，国立古文書館や地方の研究センターと連携して，古文書の写しを保管するプロジェクトを促進することは急務である。

8）研究成果に対してより批判的に対応していく必要がある。研究成果を普及することは大事なことである。また，研究成果から得られた情報の交流を，東南アジア地域で国を越えて行うことは重要である。研究成果は，現在バラバラに散らばっているが，それらを持ち寄って共有の知識としていくことが重要である。

9）研究プロジェクトの対象となった人々（例えば，農民とかインフォーマント）も，研究から利益を得られるようにすることが重要である。彼らに役立つものにするためには参加型のアクション・リサーチが必要である。

◉国際比較研究へのアプローチ

上記のコメントはいずれも今後の助成活動を考えるうえで非常に示唆的であるが，特に国際比較研究を促進していくことは国際助成の今後の課題である。これまでにも国際比較研究が国際助成の対象となっている例はある。東南アジアのタイ族の研究や東南アジアのイスラムの研究等である。今後はこのような研究をさらに促進していく必要がある。

ところで，国際比較研究を行う際に大きく分けて二つのアプローチがあることが上記のコメントから読み取れる。第1のアプローチは国境などの「境界」を越えた東南アジア全体にかかわるテーマで行われるものである。第2のアプローチは，テーマは各国固有の問題であるが，東南アジア各国で共有し得る問題であり，比較を行うことによって新しい視点が得られるというものである。

国際助成のなかで最近の助成対象となっているプロジェクトのなかにはこれらの二つのアプローチが具体的になされているものか，そのアプローチの種と成り得るものがみられる。1990年度の助成対象のなかからそれらを具体的に例示してみたい。

第1のアプローチをしているプロジェクトとしては以下の3件がある。

「国際会議：シルクロード沿いの港町」(インドネシア)は，海のシルクロードにかかわるものである。海のシルクロードは，4世紀以降大陸部で戦乱が続き，陸のルートの安全が損なわれたとき，それに代わるものとして隆盛をきわめた。東南アジア地域はアジアの南西部と極東の航路の交差点として重要な役割を果たした。海のシルクロードについては国際比較研究による総合研究は行われたことはない。そこでこの国際会議ではさまざまな専門分野の研究者を各国から招いて，海のシルクロードに関する新しい研究のアプローチ，情報源，研究方法の模索を行い，国際比較研究の環境づくりを目的として行われる。

「アジアの宮廷音楽の共通要素の探求」(フィリピン)はアジアの宮廷音楽のなかでも，特にジャワのガムラン，タイの宮廷音楽(ピーパード)，日本の雅楽を分析することを通して，東アジアと東南アジアの具体的なつながりを示すことを目的としている。音楽的なつながりを補うために，歴史的，民族学的，文化的なつながりを示し，音楽要素の源泉を探求する。最終的にはアジアの音楽の共通点が中国の宮廷音楽からだけでなく，東アジアと東南アジアの民族音楽からも派生していることを理解することを可能にしようというものである。

「東南アジアと中国南部の後期青銅器時代に関する国際会議」(タイ)は，東南アジア(特にヴェトナムとタイ)と中国南部における考古学研究に関するものである。この地域の考古学的研究は，青銅器時代についての新しい知識を生み出し，青銅器文化の広がりの地域的および年代的な類似点と相違点のパターンをみることを可能にした。また考古学に関連する専門分野でも研究が行われている。しかしこれらのデータの蓄積にもかかわらず，青銅器時代全体についての理解はあまり進んでいない。この会議では，現地での発見やデータをより広い地域的な視野から検討し，専門分野を越えてコミュニケーションを図るために行われる。

これらのプロジェクトは対象とする地域が東南アジア

を越えて東アジアにも及ぶテーマのものもみられる。また国際比較研究の予備段階としての国際会議も含まれている。

次に国際比較研究の第2のアプローチをしているプロジェクト，もしくはそのアプローチの種と成り得るプロジェクトとしては，以下の3件がある。

「ジャワの村落盗賊：1850年－1942年」（インドネシア）はオランダ植民地下のジャワではびこった盗賊団の活動を単なる犯罪行為としてではなく，植民地支配に対する民衆の抵抗運動の一表現形態としてとらえる研究である。オランダ植民地下のジャワでは，プランテーションの周辺に盗賊団がはびこり，植民地政府もこれを十分に取り締まることができず，ある種の解放区の様相を呈していたといわれる。盗賊団は，プランテーションの官吏，伝統的首長，富裕農民，華人などから略奪を繰り返した。このような植民地支配への反応はフィリピンなどの他の国でも別の形でみられるものであり，比較研究の新しい視点を含有している。

「ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習」（フィリピン）は森林の環境保全にかかわる研究である。フィリピンでは木材切り出しによる森林伐採が問題となっているが，同時に山岳少数民族による焼畑農業も環境破壊の要因であると信じられている。しかし人類学者のなかには，その土地土着の民族で焼畑を行う人々は，その土地の条件に適応した，環境を破壊しない焼畑の技術をつくり上げてきたと主張する者もいる。この研究では，ミンダナオで焼畑を行うさまざまなグループの土着の環境保護の方法を明らかにすることを目的としている。このような状況はフィリピン以外の東南アジア諸国にもみられることで，比較研究に発展すれば，その成果はさらに有益なものとなろう。

「固有の知識体系の活力と再生への展望」（タイ）ではタイの文化と開発の研究にとって欠けていた要素である固有の知識体系を取り上げる。固有の知識体系に関する研究はタイ文化の活動を提示するばかりでなく，開発の実用面にも役立つ成果をもたらす。しかしタイが近代化を進めている現在，固有の知識体系の役割は，特に政策レベルで重要視されていない。固有の知識を失ってしまうことは，タイ固有の技術と新しい技術のギャップを深めることである。この研究では固有の知識体系への関心を高め，その再生の可能性を探ることを目的としている。この問題は発展途上国共通の課題であり，比較研究のテーマとしてすぐ実施され得るものである。

以上，3件の例からも明らかなように，国際比較研究への第2のアプローチは，実際にはその実施においてかなりの困難が予想される。それはプロジェクト実施の方法論的な側面，特に体制の異なる国々の間での比較研究プロジェクトの場合のロジスティクス面の問題は大きい。また理論的枠組の面でも克服すべき点は多いと思われる。しかし，だからこそ，この第2のアプローチが成功したときの成果は重要である。

●研究成果の発表と出版

国際助成研究報告会で指摘されたもう一つの重要課題は研究成果の普及という点である。研究成果はもちろん国際会議での発表ということがまず考えられるが，それよりも効果が大きいのは研究成果が出版されることである。トヨタ財団の国際助成によって行われた研究プロジェクトの成果も本の形で出版されることが，近年多くなってきている。

しかし，第三世界においての出版には多くの困難が伴う。1990年度の計画助成で「アジア・アフリカの出版活動に関するワークショップ」への助成を行ったが，研究成果の普及と関連する点も多いので，ここにそのワークショップで指摘された点の一部を紹介したい。(注2)

(注2)「アジア・アフリカの出版活動の促進に関するワークショップ」の詳細については「トヨタ財団レポート」No.56を参照されたい。

1）本の内容と値段：第三世界が直面する課題に関する本を現地の言語で出版し，安価で提供することが重要である。

2）本の流通の改善：第三世界では国内の本の流通のシステムが確立しておらず，出版促進のネックの一つとなっている。またアジアやアフリカの地域内の流通も問題である。

3）出版社の協力の促進：アジア，アフリカの出版社

のための情報ネットワーク・データベースが必要である。

4）出版関係者の養成：これまで行われているトレーニング・コースは政府出版局等のトップ・レベルの管理職を対象とするものが多かったが，今後は中間管理職を対象とするもの，また小規模の現地の商業出版社のスタッフのためのトレーニングも必要である。

5）図書館への援助：出版された本がより多くの図書館で購入されるよう，図書館への援助が望まれる。

以上は第三世界における出版の全般的な問題であるが，このなかで学術的な研究成果の普及と最も関連が深いのは，本の流通の改善という点である。助成を受けて行われた研究成果は多くの場合，出版助成も受けたうえで，大学出版会や質の高い本を良心的に出版する商業出版社から出版される。しかしこの場合，出版助成があるから，これらの出版社も出版できるのであって，出版助成がなければ，ほとんど不可能に近い。しかし出版されたからといって，本が普及するということには直接つながらないことが問題である。出版部数は1,000部から多くても2,000部どまりである。出版記念会が行われることが習慣になっているので，そこで個人の読者は本を購入することが多い。この機会を逃すと本を手に入れることは非常に難しくなる。本の流通の制度が確立していないため，首都でも限られた書店でしか学術書を手にすることはできず，地方では著者に直接送ってもらうしか方法がないことが多い。その間著者は大量の本を保管する場所がなく，自宅の書斎や寝室を本に占拠されて過ごすという事態になる。大学などの図書館も予算の限界から，すべての学術書を購入することは難しい。

国内でこのような状況であるから，近隣諸国で出版された研究成果の本を入手することは非常に難しい。さらに研究成果が書かれている言語の問題がある。最近まで研究成果は英語で書かれることの多かったフィリピンやマレーシアでさえも，indigenous scholarship の重要性に鑑みて，タガログ語やマレーシア語で研究成果を書く人々も出始めている。このような現状のなかで，東南アジアの研究者がお互いの研究成果にアクセスすることはかなり努力のいることである。“研究成果から得られた情報の交流を，東南アジア地域で国を越えて行うことは重要である”というコメントが国際助成研究報告会でなされているが，この点は今後の課題である。

●情報交流の促進

以上国際比較研究への動きと研究成果の出版という一見関係の少ないとも思われる点について述べてきたが，これらの2点は実は深く関連している。どのようなアプローチをするにせよ国際比較研究を行うためには，各国でどのような研究が行われ，どのような成果が出されているのかについての情報が共有されていることが基本である。このような情報の流れは研究成果がどんどん出版され，一国内はもちろん，海外にまで普及されることが必要となる。現在，研究者の間には国際比較研究を行いたいという気運は高まっているが，それを実行するための条件はまだまだこれからのようである。第三世界諸国間の情報の流れを促進することに財団がどのような役割を果たすことができるのかを考えていきたい。

Ⅰ．研究助成

Ⅰ－0．研究助成の概要

研究助成は，本年度も4月1日から5月31日にかけて一般公募した。基本テーマは過去6年と同じく「新しい人間社会の探求」であり，重点課題は一昨年来の「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」を引き継いでいる。研究種別も従来どおり第Ⅰ種研究(個人奨励研究)，第Ⅱ種研究(試行・準備研究)，第Ⅲ種研究(総合研究)の3種で，その内容は表Ⅰ-1のとおりである。第Ⅱ種研究の助成金の上限を300万円から400万円に上げた点以外は，従来と変わりない。なお，表中の「選考の重点」の項にある選考基準①～⑤は，それぞれ次の内容を示す。

① 発想の独創性
② 社会に対する先見性
③ 研究実施の適時性
④ 民間助成の必要性
⑤ 計画の実現性

なお，この研究助成プログラムは日本の研究者を主な対象としたものであるが，申請書が日本語で書かれており，その内容がなんらかの点で日本と関係していれば，申請者の国籍や居住地を問わず受け付けることとしている。

本年度の応募数は表Ⅰ-2に示すとおり742件で，前年度の771件より約30件減少した。

選考は研究助成選考委員会（委員長：飯島宗一，ほか9名）において7月から9月にかけて行った。ただし第Ⅰ種研究については，委員長と6名の専門委員による専門委員会において1次選考を行った。選考の結果，合計57件，2億250万円分の申請が選出され，10月開催の第57回理事会で承認されて助成対象に決定した。選考の経過や結果については，「トヨタ財団レポート」No.54に選考委員長が執筆しているとおりである。ただしこのうち第Ⅰ種研究1件がのちに申請者の都合で助成を辞退したため，12月開催の第58回理事会でこの助成取消しを承認し，最終的に56件，2億70万円が本年度の研究助成対象となった。その内訳は表Ⅰ-2に記載のとおりである。

表Ⅰ-1　研究種別と助成の概要

研究種別	第Ⅰ種研究（個人奨励研究）	第Ⅱ種研究（試行・準備研究）	第Ⅲ種研究（総合研究）
研究の性格	若手研究者による萌芽的な個人研究 （個人研究に限る）	学際的・国際的・職際的な研究グループによる試行・準備研究 （共同研究に限る）	第Ⅱ種研究からの展開による総合研究 （共同研究に限る）
1件当たり助成額	概ね 50～200 万円／件	概ね 100～400 万円／件	概ね 200～2,000 万円／件
助成予定総額	約 4,500 万円 （約 25～30 件）	約 5,500 万円 （約 15～20 件）	約 1 億円 （約 10～15 件）
助成期間	1990 年 11 月 1 日より 1 年間	1990 年 11 月 1 日より 1 年間	1990 年 11 月 1 日より 1 年間または 2 年間
選考の重点	選考基準①③項を特に重視	選考基準①②④項を特に重視	選考基準①～⑤のすべての項目を総合して

表Ⅰ-2　研究助成の申請・助成結果集計

（金額は万円単位）

		年度	全体 申請	全体 助成	第Ⅰ種研究 申請	第Ⅰ種研究 助成	第Ⅱ種研究 申請	第Ⅱ種研究 助成	第Ⅲ種研究 申請	第Ⅲ種研究 助成
申請・助成件数		**1990**	**742**	**56**	**337**	**24**	**358**	**18**	**47**	**14**
		1989	771	62	346	26	358	22	67	14
申請・助成金額		**1990**	**228,729**	**20,070**	**59,756**	**4,270**	**116,309**	**5,780**	**52,664**	**10,020**
		1989	240,930	20,100	60,790	4,440	102,534	5,590	77,606	10,070
1件当たり平均申請・助成金額		**1990**	**308**	**358**	**177**	**178**	**325**	**321**	**1,121**	**716**
		1989	312	324	176	171	286	254	1,158	719
海外および外国人からの申請*	F/F	**1990**	**38**	**7**	**12**	**0**	**18**	**1**	**8**	**6**
		1989	57	9	14	1	28	4	15	4
	F/J	**1990**	**38**	**3**	**29**	**3**	**6**	**0**	**3**	**0**
		1989	35	8	25	5	8	2	2	1
	J/F	**1990**	**50**	**7**	**39**	**5**	**7**	**0**	**4**	**2**
		1989	61	8	50	5	8	2	3	1
	計	**1990**	**126**	**17**	**80**	**8**	**31**	**1**	**15**	**8**
		1989	153	25	89	11	44	8	20	6
代表者平均年齢		**1990**	**41.3**	**44.7**	**32.5**	**32.6**	**48.1**	**54.6**	**52.7**	**52.5**
		1989	41.9	43.4	33.5	32.4	48.1	51.3	52.1	51.4

＊ F/F は海外在住の外国人，F/J は日本在住の外国人，J/F は海外在住の日本人を示す。

本年度の助成結果の特徴を述べると，次のようになる。

① 助成金額は昨年度とほぼ同額であるが，第II種研究の助成限度額を400万円に増やしたこともあって助成件数は6件減少し，1件当たり平均助成額はやや大きくなった。そのため，申請数は昨年度よりやや減少しているにもかかわらず，採択率は若干低くなっている。

② 重点課題については，どの種別についても「多文化社会への対応」に関するものが多く「高度技術社会への対応」に関するものは少ない。学問分野では自然科学よりも人文・社会科学が多い。ただし第III種研究については相半ばする。もっとも自然科学分野のものでも，研究助成の趣旨から社会科学的な性格や内容を伴うものがほとんどである。

③ 第I種研究の内容は，社会一般の問題解決というよりも，研究者個人の独特の視点から特定の課題を見極めようとするものが多くなっている。外国籍の研究者は3名（中国2名，ブラジル1名）で，昨年度の7名より大幅に減少している。日本の研究者の場合は，外国留学中の研究や海外に行って実施するものが多い。国内で行う研究については，障害をもつ研究者が自らの問題として障害者の社会参加を進めるための研究など，特別の性格をもつものが主になっている。

④ 第II種研究では，海外をフィールドにその文化や社会の変化の過程を明らかにしようとする研究が多く，そのほとんどは国際共同研究である。代表者が外国籍のものは1件のみで，昨年度の6件と比べて極端に少ないが，特別の理由は見いだしにくい。たまたまの結果とみてよいだろう。

⑤ 第III種研究でも，半数は海外をフィールドにするもので，12件が国際共同研究である。研究内容としては，自然環境や人間に対する人的作用の影響を明らかにするものなどが比較的多い。外国籍の研究者は6名(中国2，韓国，インドネシア，イスラエル，アメリカ各1)で昨年度より1名増えている。

本年度の研究報告会は次の1件であった（第28回の報告会は市民活動助成に関するもの)。

第27回研究報告会「アラスカ発　いのちへの問いかけ－変わりゆくカリブーとエスキモーの生活－」報告者：星野道夫
(1990年5月15日，於：東京千駄ヶ谷・日本青年館)

Ⅰ-1. 第Ⅰ種研究（個人奨励研究）

助成対象一覧表

助成番号下の（継2）は継続2回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の（　）は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
1	90-Ⅰ-003*	アサンテ族における国家形成と多民族支配過程に関する民族学的研究——王都クマシ・ゾンゴ（Kumasi Zongo）の権力的・象徴的空間構造—— 阿久津 昌三　信州大学教育学部　助教授　36歳	1,800,000
2	90-Ⅰ-022	ソ連の農業生産に及ぼす気象要素のインパクト度合いとその予測法確立のための一研究 ——地球環境問題解明に関連して—— 森 広道　気象庁大阪管区気象台技術部予報課　主任　31歳	1,600,000
3	90-Ⅰ-051 （継2）	熱帯アジア山地植生－人間系の研究：マレイシア，サバ州における熱帯山地林の現状分析と保護管理 北山 兼弘　ハワイ大学大学院植物学科　院生　32歳	2,000,000
4	90-Ⅰ-058	東南アジアにおける日本人コミュニティーの研究 ——ジャカルタに見る日本人の生き方—— 白石 さや　コーネル大学モダン・インドネシアプロジェクト　研究員　39歳	1,500,000
5	90-Ⅰ-063	エスニック・コミュニティから見たオーストラリアの多元文化主義に関する研究 ——アジア系移民の政治参加と中国系コミュニティの活動調査を中心に—— 増田 あゆみ　神戸大学大学院法学研究科　院生　26歳	1,800,000
6	90-Ⅰ-080 （中国）	東西文化の衝突と青少年の犯罪心理への影響に関する比較研究——80年代の中国と50年代の日本の青少年犯罪のピークを中心に—— 劉　亜　東京医科歯科大学難治疾患研究所　専攻生　32歳	1,500,000
7	90-Ⅰ-109	ラテン・アメリカにおける文化遺産と歴史観の様態と変容に関する研究 関 雄二　東京大学総合研究資料館　助手　34歳	1,700,000
8	90-Ⅰ-111	西チベットの仏教遺跡と仏教美術の総合調査 田中 公明　㈶東方研究会　専任研究員　35歳	1,800,000
9	90-Ⅰ-141	伝承組織と地域の社会・経済構造との相互規定関係に関する比較研究 ——南島諸島・東海道地方・東北を例に—— 山本 宏子　調布学園女子短期大学　非常勤講師　36歳	1,700,000
10	90-Ⅰ-146 （ブラジル）	ブラジルにおける日本宗教に関する研究 ——アイデンティティと社会・文化的変化を巡って—— ホナン・アルベス・ペレイラ　東京大学大学院総合文化研究科　院生　28歳	1,800,000

＊ 90-Ⅰ-003は申請者の都合により助成辞退のため，助成を取り消した。

	助成番号	研究題目 代表研究者　　所属	助成金額 （円）
11	90-Ⅰ-150	興行師リズレーによって行なわれた1860年代末の日本軽業海外公演が欧米演劇に与えた影響とその意義に関する研究 三原 文　関西学院大学　非常勤講師　34歳	1,800,000
12	90-Ⅰ-158	土地利用改変による水循環変化に関する研究――奈良盆地における人間活動と水環境との関係について―― 谷口 真人　奈良教育大学教育学部　助手　31歳	1,800,000
13	90-Ⅰ-176	在宅の痴呆性老人とその家族の相互作用の経時的変化に関する研究――痴呆性老人に対する家族の効果的な関わりの技術の開発をめざして―― 太田 喜久子　聖路加看護大学大学院　院生　37歳	1,800,000
14	90-Ⅰ-179	占領期日本の社会保障の形成過程に関する研究 菅沼 隆　東京大学社会科学研究所　助手　30歳	1,900,000
15	90-Ⅰ-184	在日ユダヤ人における民族的アイデンティティの伝達・継承に関する文化人類学的研究 ――家族のネットワークを中心として―― 佐藤 泉　東洋女子短期大学欧米文化学科　専任講師　32歳	1,700,000
16	90-Ⅰ-188 (中国)	経済発展による地域社会の変容に関する日本と中国の比較実証研究 ――農村地域を中心として―― 章　政　東京農業大学大学院　院生　28歳	1,700,000
17	90-Ⅰ-205	サンパウロのファベーラ〔貧民街〕におけるエイズ意識・行動・知識調査 小貫 大輔　東京大学大学院教育学研究科　院生　29歳	2,000,000
18	90-Ⅰ-228	分離運動に先行するフィリピン・ムスリムの政治参加運動に関する研究 ――イスラーム団体の興隆とその役割を中心に―― 川島 緑　東京大学大学院総合文化研究科　院生　38歳	1,500,000
19	90-Ⅰ-234	スウェーデンの移民政策の成果と問題点に関する調査研究 ――異文化間の摩擦に対する社会心理学的アプローチ―― 児玉 克哉　三重大学人文学部　専任講師　31歳	1,800,000
20	90-Ⅰ-241	視覚障害者の職場に於ける支援システムに関する研究 ――英米の制度・事例を中心として―― 指田 忠司　平和学院衛生福祉専門学校　講師　37歳	2,000,000
21	90-Ⅰ-273	「任那」問題を通してみた日朝「非」友好再生の構造分析 ――乖離する日朝歴史学界の接近をめざして―― 田中 俊明　堺女子短期大学　助教授　38歳	1,800,000
22	90-Ⅰ-279	高度技術社会の進展と外傷性重度四肢麻痺者の生産活動参加過程に関する日米比較研究およびハイテクの活用による新しい可能性に関する研究 清家 一雄　重度四肢まひ者の就労問題研究会　代表者　33歳	2,000,000

	助成番号	研究題目 代表研究者　　所属	助成金額 （円）
23	90-Ⅰ-305	日米企業従業員の職業性ストレスと健康に関する研究――2つの文化における Karasek モデルの検討を中心として―― 川上 憲人　テキサス大学公衆衛生学部　客員研究員　33歳	1,800,000
24	90-Ⅰ-311	スリランカの混血民族集団，ダッチ・バーガーズのエスニシティーの変遷に関する研究――植民地支配から民族国家の時代への移行に伴う適応ストラテジーとの関連において 藤沼 瑞枝　ワシントン大学シアトル校大学院人類学部　院生　30歳	1,800,000
25	90-Ⅰ-334	ヒンドゥー寺院建築技術の伝統と継承に関する研究――インド国オリッサ州の石大工家元に伝わる伝統技術の実態調査―― 伊藤 達也　西ベンガル州立カルカッタ大学大学院　院生　28歳	1,900,000
		小　　計（第Ⅰ種研究）　　24　件（辞退1件を除いた値）	**42,700,000**

研究概要（第Ⅰ種研究）

1．アサンテ族における国家形成と多民族支配過程に関する民族学的研究　（阿久津 昌三）

（申請者の都合により助成辞退のため省略）

2．ソ連の農業生産に及ぼす気象要素のインパクト度合いとその予測法確立のための一研究　（森 広道）

現在，ソ連における重要課題の一つとして食糧問題が挙げられる。一方，ユーラシア大陸の気候は，その後の日本の気候に大きな影響を及ぼしている。

当研究は，ソ連の農業生産に関する予測法について，気象要素のインパクト度合いやその他の要因から確立することを主たるねらいとするとともに，ソ連の気象と日本の気象との関係を農業気象の側面から探ることも目的としている。これが，広い意味でのソ連社会の理解につながると同時に，今後の世界的な地球環境問題および国際情勢の考察の面で役立つことを期待する。

3．熱帯アジア山地植生－人間系の研究：マレイシア，サバ州における熱帯山地林の現状分析と保護管理　（北山 兼弘）

マレーシアのサバ州周辺には熱帯アジアでも数少ない山地原生林が残されている。しかし，最近の幹線路整備と近代農法導入をきっかけとする耕地の急上昇や，低地林資源枯渇に伴う伐採地上昇により，それら山地林は急激な人為改変を受けている。

当研究は，前年度に引き続き，生態学的手法により生態系の高度変化を調べ，原生的山地林と環境の特徴を明らかにする。これらの特徴点を指標に州内の山地林の分布と人為改変度を調べ，湿潤熱帯アジアの代表ともいえるサバ州内山地林保護のための提言を行う。

4．東南アジアにおける日本人コミュニティーの研究——ジャカルタに見る日本人の生き方　（白石 さや）

今日，東南アジアにおける日本の経済的プレゼンスは，貿易・投資・援助のいずれにおいてもきわめて大きく，特に２国間援助の面ではインドネシアは最大規模の相手国である。こうした情況に伴い，インドネシアを含む東南アジア諸国における日本人居住者数も大幅に増大しつつある。

当研究は，ジャカルタにおける日本人コミュニティーを対象に，①コミュニティーの実情，②そこでの生活実態，③現地の人々との関係などにつき，参与観察を中心とした調査を行うこととしている。

5．エスニック・コミュニティから見たオーストラリアの多元文化主義に関する研究　（増田 あゆみ）

オーストラリアは，移民・民族政策の柱として，同化，統合主義を経て，1970年代初頭からは多元文化主義を採っているが，これはホスト社会に大きな負担を余儀なくし，したがって不満もまた大きい。

当研究は，多民族国家のオーストラリアにおいて，少数移民の立場から政府の移民・民族政策について考察することを目的としている。エスニック・コミュニティの活動，およびこれに対するホスト社会側の態度に関する調査を通してエスニック・コミュニティのホスト社会における位置づけも明らかにすることとしている。

6．東西文化の衝突と青少年の犯罪心理への影響に関する比較研究　（劉 亜）

戦後，日本はアメリカ流資本主義体制の導入とともに，いちじるしい経済成長を遂げたが，ほぼ併行して急激な青少年犯罪の増加を経験した。一方中国では，80年代に入ると改革開放政策を推進し，西洋文化の導入に注力したが，同様に青少年犯罪も第１のピークを迎えた。

当研究は，この同文化圏にある両国における現象の根底に西洋文化と自国東洋文化との衝突があるとの推察に基づき，日中両国の外来文化に対する対応の分析を通じ，青少年の非行と犯罪心理の様相の移り変わりおよび今後の予防策を究明しようとするものである。

7．ラテン・アメリカにおける文化遺産と歴史観の様態と変容に関する研究　(関 雄二)

ラテン・アメリカには，マヤ，インカをはじめとするさまざまな文明が開化し，大規模な建築が数多く残されている。その多くは現在の住民の生活空間と重なり，そこでは盗掘や不法占拠などの深刻な問題が生じている。

当研究では，こうした問題に対する国と住民それぞれの姿勢，教育現場における意味づけ，歴史資料を用いた遺跡観の変遷に焦点を当て，ラテン・アメリカにおける歴史観の形成と変容を概観し，遺跡と人間の共存に関する展望を探ることとなっている。

8．西チベットの仏教遺跡と仏教美術の総合調査　(田中 公明)

西チベット地方は，吐蕃王国解体後の仏教復興の拠点となった地域で，グゲの王城趾とされるツァパラン遺跡には，いまなお15～16世紀の仏教壁画が遺されている。しかし，当該地域は人跡まれな秘境にあり，戦前にイタリアのチベット学者・トゥチによる厖大な調査以来，度重なる動乱等もあり，西側の研究者による調査は皆無といってよい。

当研究では，グゲ遺跡を中心に，トディン寺，およびカイラス・マナサロワール地方の調査も併せて実施する予定である。

9．伝承組織と地域の社会・経済構造との相互規定関係に関する比較研究　(山本 宏子)

民俗芸能は地域社会の精神的な統合機能を果たすだけでなく，日常的な経済活動の面でも重要な機能を果たしてきた。しかし今日では，これらの民俗芸能が培われてきた時代と社会・経済的構造が大きく変化している。

当研究では，民俗芸能の内在的発展の基盤がどこにあるのかを考察することを目的に，南島諸島，東海道地方，東北の伝承組織と社会・経済的構造，特に共同体のストックとのかかわりに関する調査を行うこととしている。

10．ブラジルにおける日本宗教に関する研究――アイデンティティと社会・文化的変化を巡って　(ホナン・アルベス・ペレイラ)

近年急速に変動する世界のなかで，日本の国際的な役割は大きく様変わりしつつある。日本の国際的な影響という点ではブラジルも例外ではない。移民の歴史に始まり，日本製品や企業の進出，それらに伴う日本宗教の浸透などが挙げられる。

当研究は，ブラジルにおける日本宗教に関する調査を通して，ブラジル日系人社会とその宗教生活，日系ブラジル人のアイデンティティ問題，および日本文化と宗教に対するブラジル人の関心などを明らかにすることを目的としている。

11．興行師リズレーによって行なわれた1860年代末の日本軽業海外公演が欧米演劇に与えた影響とその意義に関する研究　(三原 文)

1866年末から同69年にかけて日本軽業見世物が欧米6か国を巡業しているが，これは演劇史上初めての日本と西洋との出会いであり，その後の欧米演劇や世俗的日本観の形成に及ぼした影響も少なくないと考えられる。

当研究は，この興行の実現に寄与したアメリカ人興行師リズレーの足跡をたどることによって，巡業の意義を考証しようとするものである。日本および海外にみられる大衆見世物を比較検討し，同時に広い意味での演劇というものが人々および社会とどのように関わり合っているかについて，一つの見解を提示することとしている。

12．土地利用改変による水循環変化に関する研究――奈良盆地における人間活動と水環境との関係について　(谷口 真人)

土地利用の改変は，地表面での蒸発散量や地下水涵養量などを変え，地表面下の水循環を大きく変化させるばかりでなく，これに伴う物質循環をも変化させる。地球上の水・物質循環を考えた場合，地下水の流動はきわめて遅いことから，森林伐採など植生改変の影響が現れてくるには時間を要するが，その影響評価は重要である。

当研究は，急速に宅地化が進む奈良盆地を対象とし，土地利用の変化に伴う地下の水循環・物質循環の変化を明らかにし，人間活動と水環境との関係を，閉じた循環システムのなかで体系的にとらえようとするものである。

13. 在宅の痴呆性老人とその家族の相互作用の経時的変化に関する研究　（太田 喜久子）

わが国の老年人口は増大し，高齢化の速度は急速であり，痴呆性老人の出現率は年齢が増すほど高くなる。在宅の痴呆性老人の介護は主に家族が担い，家族が受けるストレスは強い。一方，家族の態度が老人の痴呆状態へ与える影響も大きいといわれている。

当研究は，痴呆性老人と家族の互いのストレスを緩和し，より快適で豊かな日常生活を送れるように援助していくために，老人と家族の相互作用の実態をとらえ，コミュニケーションのズレを最小限にする方略を探究していくものである。

14. 占領期日本の社会保障の形成過程に関する研究　（菅沼 隆）

日本を含む先進資本主義諸国においては現在，国家責任および生存権の理解とその方法をめぐって対立と混乱が生じている。

当研究は，国家責任・生存権といった理念，およびその具体化としての社会保障制度について，わが国でどのように理解され，展開してきたのかという点について，その生成過程にさかのぼって明らかにしようとするものである。すなわち，占領期において，いかなる背景の下に国家責任・生存権理念が形成され，制度として実態化してきたのかを歴史的・実証的に究明することとしている。

15. 在日ユダヤ人における民族的アイデンティティの伝達・継承に関する文化人類学的研究　（佐藤 泉）

ユダヤ人の来日は神戸，横浜の開港と前後して始まり，人数は少ないながら，各時期，日本という異質な社会においてその民族的アイデンティティを維持してきた。

当研究は，日本における宗教的マイノリティである在日ユダヤ人の民族的アイデンティティの伝達・継承について「家族史」という通時的方法と「ネットワーク分析」という共時的方法を用いて分析するところに特徴がある。そのため，長崎，神戸，横浜墓地の墓碑銘や英字新聞の記事といった第２次的資料とともに，アメリカ，イスラエルへの帰国者も含めた聞き取り調査を予定している。

16. 経済発展による地域社会の変容に関する日本と中国の比較実証研究：農村地域を中心として　（章 政）

近年，中国農村における経済改革の本格化に伴って，地域社会にさまざまな新たな問題（地域組織システムの弱体化，村落における社会・経済機能の低下および地域の環境保全と文化振興など）が発生している。一方，現代の日本社会において，特に一部の農村地域にはこれと類似する問題も現れている。

当研究は，健康・調和・文化的な地域環境の創造を目指して，経済発展の視点から，こうした地域変容問題の形成要因および変動パターンを実証的に研究することを目的としている。

17. サンパウロのファベーラ〔貧民街〕におけるエイズ意識・行動・知識調査　（小貫 大輔）

世界有数のエイズ都市サンパウロでは，特に貧困層（都市人口の 3～4 割を占める）における被害の拡大が懸念される。しかしこれまで，特にこの層を対象とした予防プログラムが実行されたことはなく，彼らの性行動，エイズ知識についての研究もない。

当研究は，サンパウロの二つのファベーラ〔貧民街〕における 13～19 歳の青少年男女を対象に，彼らの性行動の実態，エイズに関する知識と意識について調査し，キャンペーン企画のうえで参考とすることを目的としている。

18. 分離運動に先行するフィリピン・ムスリムの政治参加運動に関する研究　（川島 緑）

東南アジアは世界でも有数の民族的多様性をもつが，なかでも南部フィリピンのムスリムは 1960 年代末以来，分離独立運動を展開してきたことで有名である。分離運動に先立つ 1950～60 年代，彼らの間でイスラーム意識が高まり，各種イスラーム団体が組織され，差別撤廃や権利擁護を求める声が上がった。

当研究は，これらの運動において重要な役割を果たしたイスラーム団体の実態やイデオロギーを明らかにし，これらの組織や運動がのちの分離運動や自治要求運動にどのように結び付いていったかを解明しようとする。

19. スウェーデンの移民政策の成果と問題点に関する調査研究　(児玉 克哉)

スウェーデンはもともと均質な民族国家であったが，第2次世界大戦後に多数の移民を受け入れ，彼らの文化的アイデンティティに敬意を払う政策を取ってきた国である。多文化社会の建設という点からみて最先進国であることは疑いがない。にもかかわらず，陰での文化摩擦は存在し，移民の不満も驚くほど大きい。

当研究は，スウェーデンの先進的な移民政策について，現実的展開における問題点や限界，および政府の政策だけでは解決できにくい異文化間摩擦の本質を，現地調査により考察することとしている。

20. 視覚障害者の職場に於ける支援システムに関する研究——英米の制度・事例を中心として (指田 忠司)

近年，視覚障害者の大学進学も進み，その専門性を活かした職業の開拓と雇用機会の拡大が急務とされている。しかし，これを阻む最大の要因として，職場における文書処理の問題がある。

当研究は，この問題を解決するための「職場における支援システム」に関し，コンピュータの利用と人的援助の提供という二つの観点から，主として面接調査によって収集される英米の先進的な制度・事例について分析を行い，問題解決に向けて基礎資料を提供しようとするものである。

21. 「任那」問題を通してみた日朝「非」友好再生の構造分析——乖離する日朝歴史学界の接近をめざして　(田中 俊明)

日本には多数の在日朝鮮人がおり，両者の友好は急務であるといえるが，両者それぞれにはなお排他感情が底流している。そうした排他感情が，歴史事実の認識に対しても影響を与え，また逆にそのような異なった認識が新たな排他感情を再生しているものと考えられる。

当研究は，特に両学界において認識がまったく乖離する顕著な例として，「任那」問題を取り上げ，異なった認識がどのように形成されたかを追究するものである。そしてそれが，どのように新たな排他感情を再生しているかを考察していくこととしている。

22. 高度技術社会の進展と外傷性重度四肢麻痺者の生産活動参加過程に関する日米比較研究およびハイテクの活用による新しい可能性に関する研究　(清家 一雄)

ハイテクの導入では日本もアメリカと同様であるが，専門職の重度四肢麻痺者は少ない。アメリカでは重度四肢麻痺者が知的生産の過程に参加している例は少なくないが，背景には，ハイテクを利用したさまざまな支援システムと並び，障害アメリカ人法にみるような障害者差別を認めないという社会的合意も大きな力となっている。

当研究では，研究者自身が障害をもつ立場であり，障害者の視角から，研究者本人も含む日米の四肢麻痺者の生産活動の実態調査を通じて社会背景などの比較を試みるとともに，ハイテクの活用可能性も検討する。

23. 日米企業従業員の職業性ストレスと健康に関する研究　(川上 憲人)

高度技術化社会の到来に伴い，職業性ストレスは公衆衛生学上重要な健康リスクとなりつつある。しかし，わが国では職業性ストレスのモデルおよび測定法が確立されていないため，その対策が立ち後れている。

当研究は，わが国における職業性ストレスの健康影響を比較文化的側面から検討することを目的とする。①職業性ストレスに関する Karasek モデルのわが国における有用性を検証し，その測定法を確立する。②同モデルに技術革新および職業外の因子を加えた日米共通の（あるいは日米独自の）職業性ストレスのモデルを検討する。

24. スリランカの混血民族集団，ダッチ・バーガーズのエスニシティーの変遷に関する研究　(藤沼 瑞枝)

スリランカのダッチ・バーガーズとは，ヨーロッパ植民者男性と現地人女性との間の混血子孫から成る少数民族グループで，植民地時代には中産エリート層を形成していたが，独立後は西欧的要素の特権的意味が失われ，言語政策の変化により社会・経済的地位が揺らいでいる。

当研究は，このダッチ・バーガーズの複数世代への面接調査によって個人史の収集を図り，植民地支配から民族国家主義の時代に至る社会変化のなかでどのような適応ストラテジーが選択され，それに伴い混血民族のエスニシティーがどのように再定義されてきたかを考察する。

25. ヒンドゥー寺院建築技術の伝統と継承に関する研究

（伊藤 達也）

インド国オリッサ州プリ地区には，インド建築史上「オリッサ様式」と呼ばれる装飾華麗なヒンドゥー教寺院が多数建造されている。そして，古代よりこれらの寺院を建設し続けてきた石大工が，現在でも名門石工頭の統率の下にこの地で仕事をし，生活を営んでいる。

当研究は，従来観照的立場から研究されがちであったインド寺院建築研究を，寺院を建設する職人組織，彼らのもつ石彫・石積建築の技術，伝統技術の継承システムを調査することによって，寺院を構想し，実際に建造に携わってきた人々に迫って再考察するものである。

Ⅰ-2. 第Ⅱ種研究（試行・準備研究）

助成対象一覧

助成番号上の＊印は国際共同研究を示す。
助成番号下の（継2）は継続2回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の（　）は代表研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
26	90-Ⅱ-014*	先端基礎科学分野における国際融合――大望遠鏡ハワイ設置計画をめぐる文化・制度上の諸課題―― 小平 桂一　海外設置問題研究会　代表　53歳　ほか7名	2,800,000
27	90-Ⅱ-016*	東西ドイツの再統合とそのEC統合および東欧変革に対するインパクト ――一元的社会経済体制の転換と中・東欧の民族問題―― 住谷 一彦　日欧文化比較研究会　代表　65歳　ほか12名	4,000,000
28	90-Ⅱ-042* (中国)	満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究 ――とくに民俗学と歴史学の領域において―― 愛新覺羅顯琦　満族文化研究会　代表　72歳　ほか12名	3,500,000
29	90-Ⅱ-054*	満洲族の言語と文化に関する国際共同研究――満日漢辞典の編纂を目標として―― 河内 良弘　満族言語研究会　代表　62歳　ほか5名	3,000,000
30	90-Ⅱ-076*	環太平洋諸民族における民族文化と健康に関する国際共同研究 ――食文化の変容と口腔の健康を手がかりとして―― 井上 直彦　台湾の民族文化と健康研究会　代表　58歳　ほか13名	3,300,000
31	90-Ⅱ-105	海外における日本文化の受容に関する実証的研究――タイとその周辺地域の事例―― 村嶋 英治　アジア経済研究所　研究主任　39歳　ほか10名	3,500,000
32	90-Ⅱ-122	ヤシ科植物の多様な生産物に見る日本とアジア・太平洋 ――その生産・流通・消費の現場から―― 鶴見 良行　ヤシ研究会　代表　64歳　ほか11名	3,500,000
33	90-Ⅱ-131*	日本とネパール国の薬物およびアルコール乱用に関する研究 ――特に若年層における乱用の疫学的調査―― 加藤 伸勝　日本・ネパール薬物乱用調査研究会　代表　68歳　ほか8名	3,000,000
34	90-Ⅱ-161	都市体験を活用したまちづくり主体の育成と都市づくり方策に関する研究――街遊び，探検隊活動，まちづくりイベントを活用した新しい都市計画論に向けて―― 吉川 仁　街遊び研究会　代表　43歳　ほか11名	1,500,000
35	90-Ⅱ-178*	焼畑から常畑への移行過程における耕地生態学的研究――モンスーン熱帯環境に調和した耕地持続型農法の開発を目指して―― 服部 共生　熱帯畑作農業研究会　代表　63歳　ほか4名	3,500,000

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
36	90-II-193*	ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会の対応——送出国ブラジルと受入国日本での共同研究をとおして—— 渡辺 雅子　日系出稼ぎ労働者研究会　代表　39歳　ほか6名	3,500,000
37	90-II-196	子どもの権利の国際的展開とわが国社会の対応——子どもの権利条約とその具体化に関する職際的・総合的研究—— 石川 稔　児童<法と政策>研究会　代表　51歳　ほか10名	3,600,000
38	90-II-212*	インドネシア・タイにおける精神遅滞者への地域生活援助に関する実践的研究 岩崎 正子　アジア発達障害研究会　代表　45歳　ほか20名	3,500,000
39	90-II-235*	第二次大戦中の日印関係およびその影響——南アジアの国民国家形成と日本—— 長崎 暢子　日・印関係研究会　代表　52歳　ほか7名	2,800,000
40	90-II-264*	日本における性別役割分担の史的研究——男性主導社会内での女性文化のあり方—— 脇田 晴子　女性文化とジェンダー研究会　代表　56歳　ほか18名	3,800,000
41	90-II-316*	熱帯林業の健康リスクに関する実証的研究——機械化に伴なう生活と健康の変容—— 二塚 信　熱帯労働衛生研究会　代表　50歳　ほか10名	3,000,000
42	90-II-320*	ロンタラ調査に基づく南スラウェシの伝承医薬の研究 山本 出　ロンタラ伝承医薬研究会　代表　62歳　ほか11名	2,700,000
43	90-II-360* (継2)	南太平洋島嶼国の自立化と非核化の展望に関する予備的研究（II）——非核化をめぐる民衆の内発的なトランスナショナル・ネットワークの動態分析を中心にして—— 佐藤 幸男　アジア・太平洋マイクロ・ステート研究会　代表　42歳　ほか10名	3,300,000
		小　計（第II種研究）　18　件	**57,800,000**

研究概要（第II種研究）

26. 先端基礎科学分野における国際融合——大望遠鏡ハワイ設置計画をめぐる文化・制度上の諸課題　（小平 桂一）

アメリカ・ハワイ州の高山に口径８mの新技術望遠鏡を８年がかりで建設して宇宙の涯に挑み，21世紀の宇宙像を開くための国際的な観測事業を行う計画が，日本の国立天文台を中心に進められている。大型の先端科学装置を外国の領土内に設置して，永年にわたって国際公共財にも近い形で運用する先例がわが国にはなく，その準備に当たって質的に新しい問題に直面している。

当研究は，この大望遠鏡計画を例に取り，この種の計画を遂行するうえで長期的に解決すべき制度上・文化上の諸課題を抽出・整理し，本格的な調査研究の基礎を作る。

27. 東西ドイツの再統合とそのEC統合および東欧変革に対するインパクト　（住谷 一彦）

一連の東欧変革のなかにあって，旧来の政治・社会運営体制の維持に固執していた東ドイツは，ベルリンの壁開放から１年と経たないうちに西ドイツに吸収されてしまった。その統一ドイツは，いまや大国としてECおよび東欧諸国のあり方を左右する存在である。

当研究は，EC統合および東欧変革という大枠のなかで東西ドイツ統一がはらんでいる可能性と困難性について，統一プロセスを含めて総合的に実証分析を行う。そこでの研究の力点は，体制転換と民族問題の絡み合いにおかれる。

28. 満族文化の基礎的資料に関する緊急調査研究——とくに民俗学と歴史学の領域において　（愛新覺羅顯琦）

中国社会の近代化の進展と相まって，今日，満族の固有の文化は急速に衰微しつつある。したがって満族の伝統的文化の究明は緊急の学問的課題である。それは単に中国研究者の関心事にとどまらず，日本の研究者の関心事でもある。

当研究は，日中の国際共同研究として第１に，満族聚居村落の民俗調査に従事するとともに清朝宮廷の儀礼習俗を復原し，第２に満族史上重要な歴史的問題に関して解明を試み，総じて満族文化の全体像を明らかにしようとするものである。

29. 満洲族の言語と文化に関する国際共同研究——満日漢辞典の編纂を目標として　（河内 良弘）

近年，中国各地でおびただしい数量の満文檔案（古文書）が発見されているが，これを読解するための完全な辞書は今日に至るまで日中両国ともに編纂されていない。このことは清朝の歴史研究上の障害ともなっている。

当研究は中国黒竜江省満語研究所をはじめとする中日の満語・満族文化研究者の共同により，満日漢辞典の編纂を目指すものである。本年度はこれまで内外で出版された満洲語辞典の語彙をすべてカード化し，満・日・漢の三語から検索可能な語彙カードを作成し，長期にわたる編纂作業の基礎資料とする。

30. 環太平洋諸民族における民族文化と健康に関する国際共同研究　（井上 直彦）

文明の流入による環境変化が，ヒトにさまざまな不適応現象を引き起こしているが，その例として，食文化の発展に伴う口腔の健康の破壊を挙げることができる。これは負のストレスに対する適応が，宿主の健康を損なうという進化学的な矛盾を提起するものでもある。

当研究は，口腔の健康に焦点を絞り，民族文化が民族の健康の保全のためにどのような役割を果たし，それが新しい文化の流入によってどう修飾されたかを明らかにするとともに，健康にかかわる不適応現象を可能な限り回避するための方策についても検討するものである。

31. 海外における日本文化の受容に関する実証的研究——タイとその周辺地域の事例　（村嶋 英治）

最近，“経済大国”日本の突出に対して，“文化国家”日本として世界に貢献することの重要性を指摘する声が上がっている。しかし「日本文化」とは何か，また日本文化は，いままで海外でどのように受容されてきたかは，必ずしも明らかにされてはいない。

当研究は，従来の静態的・固定的観点からとらえられがちな「日本文化」について，現実に「日本文化」が海外でどのように受け入れられ機能しているかを個人の生活，企業の経営および国の政治・経済レベルにおいて分析しようとするものである。

32. ヤシ科植物の多様な生産物に見る日本とアジア・太平洋
——その生産・流通・消費の現場から　(鶴見 良行)

食料・建材等としてアジア・太平洋住民にとってかけがえのないヤシ科の植物は，同時にいくつかの商品（パーム油，活性炭，籐家具など）の形で，世界経済，更には日本人の生活と，思いのほか深くかかわっている。

当研究は，多くのヤシ科植物から，ココヤシ，サゴヤシ，アブラヤシ，サトウヤシ，籐の5種に的を絞り，地域のエコロジーと経済，ジェンダー，地域交易，世界市場，日本人の生活，イメージ，といったさまざまなレベルでのヤシをみることによって，その生産・流通・消費の歴史と現状を立体的に明らかにしようとする。

33. 日本とネパール国の薬物およびアルコール乱用に関する研究
——特に若年層における乱用の疫学的調査　(加藤 伸勝)

近時，世界的に薬物乱用が拡大しつつあるが，幸い現段階ではわが国はそれほど深刻な事態に至っていない。しかし，黄金の三角地帯から，インド・ネパールを経て，大麻およびヘロインなどが中国へ至り，やがて日本への密輸の兆しが現れ始めている。

当研究は，ネパール国の薬物乱用防止協会との連繋の下に，乱用薬物の中継基地化しつつあるネパールの薬物乱用の実態，流通の機構を明らかにするため，まず，日本から数名の調査員をネパールに派遣し，乱用者に面接し，直接的に疫学的資料を収集する。

34. 都市体験を活用したまちづくり主体の育成と都市づくり方策に関する研究　(吉川 仁)

従来の都市計画や地区の再開発などでは，地方公共団体の担当者や都市計画の専門家などの仕事が中心になっていたのに対し，最近では地域住民が積極的に参画するまちづくりや住環境整備などの動きが目立ってきている。

当研究は，地域住民による環境発見型のイベントについて，多くの具体的な事例を検討することによって，身近な住環境整備等に積極的に参加するまちづくり主体を育成する手法，およびその手法を活用した都市計画の方法論を開発することを目的とし，研究者，コンサルタント，行政担当者による職際的チームで研究を行う。

35. 焼畑から常畑への移行過程における耕地生態学的研究　(服部 共生)

熱帯地域において，いまもなお焼畑農業が広範囲に行われている。しかも，近年の人口圧の増大による土地の制約は，焼畑システムの基本である休閑による生産力の自然回復を不可能にした。さらに森林を切り拓いて造成した農地は，現在の慣行農法では長期間維持することが困難であるために放棄せざるを得ない状況にある。

当研究は資力の乏しい開発途上国の農民が，その環境に即して耕地の生産力を維持し得る，低投入型の耕地持続型農法を確立するための生態学的な基礎調査を行い，熱帯での常畑農法の開発に資することを目指す。

36. ブラジルからの日系出稼ぎ労働者の実態と日本社会の対応　(渡辺 雅子)

ブラジルからの日系出稼ぎ労働者は，すでに5万人を超えるが，日本での労働力不足，入管法の改正，ブラジル経済の悪化により，今後さらに増加すると思われる。

当研究は，日系出稼ぎ労働者の実態について，労働や生活上の問題，情報の流れと職業移動，習慣，文化の相違によるコミュニケーション・ギャップ等に関する日本での調査と，ブラジルにおけるマスコミによる情報操作，帰国者の再適応に関する追跡調査を実施することによって，日本とブラジルの双方に出稼ぎが与える影響と問題点について考察することを目的としている。

37. 子どもの権利の国際的展開とわが国社会の対応　(石川 稔)

国連は1989年11月子どもの権利条約を採択した。1960年代にアメリカで始まった子どもの権利運動は，条約という形で国際的に展開することになった。わが国も本年9月に子どもの権利条約に署名した。現在，批准に向けて各方面から運動が行われている。

当研究は，子どもの権利条約を立法史的に研究し，各条項のもつ意味を客観的に確定する作業を行うとともに，このような作業によって得られた子どもの権利条約の精神・理念と各種の子どもの権利をどのような形でわが国の社会に定着させていくべきかを研究する。

38. インドネシア・タイにおける精神遅滞者への地域生活援助に関する実践的研究　（岩崎 正子）

近年，社会福祉の分野においても，日本と他のアジアの国々との間に国際交流がもたれるようになってきたが，まだ十分に機能する段階には至っていない。

当研究は，インドネシア・タイにおける精神遅滞者の，全年齢層にわたるサービス体系に関する実態を調査し，精神遅滞者のそれぞれの国の文化，経済状況にあったサービスのあり方，および日本からの援助の仕方を明らかにすることを目的としている。これらは，開発途上国への援助と同時に，日本を含めた開発国への社会福祉に対する反省，見直しをもたらすものである。

39. 第二次大戦中の日印関係およびその影響——南アジアの国民国家形成と日本　（長崎 暢子）

第２次大戦中，インド独立運動の一部の指導者が日本やドイツと協力し，いわゆるインド国民軍を組織した。この歴史的な経験は現在のインドにおける日本観にも大きな影響を及ぼしているが，しかしその歴史についての研究は日本では後れている。

当研究は，当時の国民軍関係者，とりわけその主担当機関であった藤原・光機関に関係した生存者へのインタビューから証言記録をまとめるほか，散逸資料を収集し，これに基づき実証的，客観的な研究を目指すものである。

40. 日本における性別役割分担の史的研究——男性主導社会内での女性文化のあり方　（脇田 晴子）

日本史上，古代律令制以後は男性主導社会といえるが，一方で，平安女流文学や「女房詞」の存在，宮廷の公式記録が「御湯殿の上の日記」という女官の書いたものであるなど，女性の役割の重要さも明らかになってきた。

当研究は，男性主導の各時代のなかで性別役割分担－男性・女性のかかわりのあり方を，母性役割・娼婦業はもちろん，血穢や禁忌まで含む文化の特質の究明を目的にしている。日本・外国の歴史学・民俗学・宗教・社会人類学などの日本学研究者との国際研究であり，文献史料，民俗資料，遺物，聞き取り調査などの総合を目指す。

41. 熱帯林業の健康リスクに関する実証的研究——機械化に伴なう生活と健康の変容　（二塚 信）

熱帯林の大量伐採に対して，生態系の保全や自然保護の視点からの研究は少なくないが，そこで働く林業労働者の生活と健康に焦点を当てた研究は皆無に近く，その実態は明らかにされていない。

当研究は，第１に熱帯林業従事者の健康状態を家族形態，居住環境，食生活，保健医療サービス等日常生活の諸側面と関連づけて解明する，第２に林業従事者の労働態様と作業に起因する健康障害（振動障害等）を把握する，第３に林業従事者のための受容可能なプライマリーヘルスケア推進の基礎資料を提示することを目指す。

42. ロンタラ調査に基づく南スラウェシの伝承医薬の研究　（山本 出）

ロンタラとはヤシの葉に刻まれた古文書で，インドネシア南スラウェシ社会の文化遺産であるが，長く秘匿されてきた一方，美術・骨董品として海外に流出するなど現在では散逸の危機に瀕している。

当研究は，このロンタラに記載された伝承医薬・医療法について，まずこれを発掘・記録し，記載内容の翻訳などを行うとともに，近代科学的観点からの検討を加えることを目的とする。日本とインドネシア研究者の共同で，薬学，化学，植物学，言語学，文化人類学など学際的な体制で取り組む。

43. 南太平洋島嶼国の自立化と非核化の展望に関する予備的研究（II）　（佐藤 幸男）

軍事クーデター（フィジー），大統領暗殺（ベラウ），反植民地主義・非核運動の指導者の殺害（カナキー）といった衝撃的な事件が相次いでいるにもかかわらず，南太平洋島嶼地域における非核化に向けての内発的な動きは後退する兆候をまったくみせていない。昨年度の予備的研究（I）では，そうした背景を考えるうえで，非核意識および非核運動ネットワークのもつトランスナショナルな性格が重要であることが明らかにされた。本年度は，このトランスナショナル性の内実を明確にする作業に重点をおき，それが今後どのような展開を示すかを展望する。

Ⅰ-3. 第Ⅲ種研究（総合研究）

助成番号上の＊印は国際共同研究を示す。
助成番号下の（継2），（継3）はそれぞれ継続2，3回目を示す。
助成番号下の（　）は代表研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。
助成金額下の（　）は助成期間を示す。無記入は1年間。

助成対象一覧

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 （円）
44	90-Ⅲ-001* （継3）	ボゴール博物館と連帯して，インドネシアの自然史研究を推進する計画：土壌生物によるウォレス線とウェーバー線の再検討 吉井 良三　ボゴール博物館と連帯する会　代表　76歳　ほか5名	3,500,000
45	90-Ⅲ-006* （継2） （インドネシア）	スマトラ沿岸低湿地の生態系と土地利用の変化――地域の生態系と住民社会の現状に根ざした新しい地域発展の在り方を目指して―― スピアンディ・サビハム　ボゴール農科大学農学部　教官　41歳　ほか14名	6,000,000 （2年）
46	90-Ⅲ-007* （継3） （中国）	中国の乾燥地における砂漠化防止に関する実証的研究――毛烏素沙漠におけるモデル牧農場建設に向けて―― 姚 洪林　内蒙古沙漠開発研究会　代表　47歳　ほか15名	4,500,000
47	90-Ⅲ-011 （継2）	上総掘りの学際的研究――等身大の国際技術協力の実践をめざして―― 諸岡 青人　上総掘り研究会　代表　70歳　ほか12名	7,500,000 （2年）
48	90-Ⅲ-013* （継3）	長崎原爆残留放射能（Pu-239＋240，Cs-137）をトレーサーとして利用した長寿命有害物質と自然界との相互作用に関する調査研究――局地汚染と地球規模汚染―― 工藤 章　プルトニウム環境汚染調査研究会　代表　51歳　ほか5名	17,000,000 （2年）
49	90-Ⅲ-015* （継3） （イスラエル）	日本文化における「外なる他者および内なる他者」像の形成と現状 ヤコブ・ラズ　漂泊と定着研究会　代表　46歳　ほか7名	7,400,000
50	90-Ⅲ-016* （継2）	ベトナムの環境における化学物質の挙動と人体の影響に関する国際共同研究 原田 正純　ベトナム枯葉剤被害日越共同研究委員会　代表　56歳　ほか8名	7,700,000
51	90-Ⅲ-018* （継2） （中国）	中国における水棲哺乳類の棲息環境汚染に関する生態学的，環境化学的研究 ――ヨウスコウカワイルカの保護を目指して―― 周 開亜　南京師範大学　教授　58歳　ほか6名	10,000,000 （2年）
52	90-Ⅲ-019* （継2） （アメリカ）	近代日本における「経世済民」思想・運動の展開――ハワイ日系社会および韓国の事例との比較をつうじて―― テツオ・ナジタ　シカゴ大学歴史学部　教授　54歳　ほか1名	4,500,000
53	90-Ⅲ-020* （継2）	中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ 江畑 敬介　中国帰国者適応過程研究会　代表　50歳　ほか20名	10,000,000 （2年）

	助成番号	研究題目 代表研究者　所属	助成金額 (円)
54	90-III-025* (継 3)	アジアに於ける近代建築に関する基礎研究――現存遺産調査③―― 中国・台湾・韓国・マカオ・香港 藤森 照信　アジア近代建築史研究会　代表　46歳　ほか36名	9,700,000
55	90-III-026* (継 3) (韓国)	韓国における失語症患者言語機能の診断・評価・治療法の開発研究――韓国版失語症鑑別診断検査（試案Ｉ）の標準化および日本語の失語症状との比較―― 朴 恵淑　延世大学校医科大学付属病院　室長　44歳　ほか4名	1,400,000
56	90-III-030 (継 2)	下北半島出身者の職業的社会化過程についての追跡調査研究 ――成人期発達研究の総合化をめざして―― 細江 達郎　下北地域産業教育調査研究会　代表　47歳　ほか6名	5,000,000 (2年)
57	90-III-037* (継 3)	占領下における各種情報メディアの書誌調整とその総合的実証研究 ――特にプランゲ文庫（米国）を中心として―― 奥泉 栄三郎　占領時代の「日本学」研究会　代表　49歳　ほか9名	6,000,000 (2年)
		小　計（第III種研究）　14　件	**100,200,000**
		研究助成合計　56　件（辞退1件を除いた値）	**200,700,000**

研究概要（第III種研究）

44. ボゴール博物館と連帯して，インドネシアの自然史研究を推進する計画　（吉井 良三）

ボゴール博物館は，オランダ時代からの歴史をもつインドネシア自然史研究の中心であったが，現在の研究活動は必ずしも活発でない。研究の方法的基礎の伝承が跡絶え，文献や資財も不足しているからである。代表者らは1986, 87年度の助成によって3か年にわたり，この博物館の研究員と共同して土壌昆虫を主題とする研究を行い，多数の標本を採取，研究基盤の確立に努めてきた。

当研究は，その最終段階に当たるもので，東洋系のバリ・ロンボクと，豪州系であることが判明したハルヘラ・アンボンとの中間の島を調査して，どの辺りに土壌昆虫の相の不連続線があるかを確定するのが目標である。特に今年度は，南オーストラリア博物館とも共同し，同館が所蔵するニューギニアの未調査標本も検討することにしており，土壌昆虫におけるウェーバー・ラインの意味が明らかになるものと思われる。

45. スマトラ沿岸低湿地の生態系と土地利用の変化　（スピアンディ・サビハム）

インドネシアのスマトラ島沿岸低湿地は，かつてすべて熱帯雨林に覆われていた。しかし政府の農地開発と移住政策によって大きく変化しつつあり，さまざまな環境的，社会的問題を発生させている。

当研究は，このような農業開発が土地の生態系にどのような変化をもたらし，またそれが現地住民の伝統的な生産・生活様式にどのような影響を及ぼしているかを，インドネシアと日本の研究者が協力して明らかにし，生活と環境の調和した開発のあり方を検討するものである。昨年度の助成では，スマトラ島の三つの地域で予備調査を行い，自然環境と社会経済状況について基礎的データを蓄積してきた。今回の2年間の助成では，それらの成果を踏まえ，同地域を対象に土地利用の変化とそれに伴う住民の生活体系の変遷過程について総合的な実態調査を行い，土地の生態系と住民社会のもつ可能性をベースとした地域発展のあり方を模索する。

46. 中国の乾燥地における砂漠化防止に関する実証的研究——毛烏素沙漠におけるモデル牧農場建設に向けて　（姚 洪林）

中国のオルドス高原の南部に分布する毛烏素沙漠（約400万ha）は，古来モンゴル民族の豊かな牧畜草原地帯を形成していたが，1950年以来，主に人為的要因によって砂漠化が急速に進行した。この砂漠は地形もあまり急峻でなく，しかも地下水源に恵まれているため，中国における砂漠緑化と農業開発の可能性の最も高い地域として，評価されている。

研究者らはすでに5年に及ぶ中日共同研究を通じて基礎的なデータを収集し，さまざまな試行実験を進めてきた。当研究は，従来の研究成果を結集してモデル牧農場を建設することを目的とする。同時に，モデル牧農場を一つの基盤にした牧農家→牧農集落→牧農業社会形成の将来像を描き，砂漠化との関連性を考慮した長期的予測を行って，砂漠化に逆行しないような牧農業社会形成のための開発技術の基準化を行うものである。

47. 上総掘りの学際的研究——等身大の国際技術協力の実践をめざして　（諸岡 青人）

上総掘りは，200年以上の伝統をもつわが国特有の井戸掘り技術で，往時は油井掘りや温泉掘りにも活用されていた。しかし戦後は機械掘りの著しい発達によって衰退し，現在ではその技術を継承する者もほとんどいない。しかるに最近，この技術が，①人力のみで井戸が掘れる，②資材が木と竹が主で入手しやすい，③技術の習得が比較的容易，などの理由により，アジア，アフリカの各地でにわかに注目を浴びるようになった。

このため当研究会では，専門の研究者などと海外で上総掘りを実践してきた若者たちが集い，発展途上国に適する掘削法と関連諸技術を学際的に検討することにした。前年度の第II種研究では，月例研究会，合宿研究会を重ね，従来の実践体験を調整・評価するとともに，用具の試作や内外での試掘などを行ってきた。今後は途上国での適正化を目指して改良工夫した各技法の実験を進め，伝統技術の新しい使用法を確立していく。

48. 長崎原爆残留放射能をトレーサーとして利用した長寿命有害物質と自然界との相互作用に関する調査研究　（工藤 章）

1945年8月9日午前11時02分に爆発した長崎原爆では，これまで地球上には存在しなかった人造元素（プルトニウム）10～15kgが使用され，このうちわずか1.2kgが核分裂し，残りは地球上に放出された。プルトニウムは猛毒でその半減期は24000年ときわめて長い。バックグラウンド値ゼロの地球環境への放出は，局地汚染と地球規模汚染に関するモデル的なトレーサー実験の開始と考えることができよう。この成果は，他の有害物質の地球規模汚染のメカニズムの解明にも役立つはずである。

研究者らは昨年度までの2年間の研究で，長崎市周辺の局地汚染について，その範囲，濃度および全降下量に関するデータを入手した。今後2年の研究では，カナダ領デボン島の氷層を利用した北極氷河およびカナダ，フランスの大樹の年輪からプルトニウムを検出し，環境中での挙動を明らかにしていくなど，主として地球規模汚染の面から長崎プルトニウムを追跡する。

49. 日本文化における「外なる他者および内なる他者」像の形成と現状　（ヤコブ・ラズ）

「他者」認識は「自己」認識と裏腹の関係にある。日本社会の「内」を遍歴する「他者」は，日本人の「自己」意識を枠づけ，日本の文化と社会を定義づけている重要な要素であろう。

日本文化の内面に潜む「自己」像を洞察する当研究は，1987, 89年度に行った漂泊者と定着社会のかかわりに関する研究を発展・完成させるものである。具体的には，資・史料の探索・収集によって異人・他者論，その西洋との比較，近世民俗文化のなかの異人イメージについて検討するほか，愛知，三重，和歌山などに残る祭りや民俗芸能，旅芸人としての大神楽集団，関東地方の草競馬集団などのフィールド調査によってその実態を明らかにする。「内なる異人」「外なる異人」の考え方をはじめ，文化人類学や演劇学，歴史図像学といった立場からの学際的視点など，国際化に伴うさまざまな文化的課題の解決に示唆を与えるところが大きいと期待される。

50. ベトナムの環境における化学物質の挙動と人体の影響に関する国際共同研究　（原田 正純）

代表研究者らは1988年以来，ホーチミン市のツーズー病院およびドンタップ省ドン・ビン・キョー村で，流産・死産・先天異常の発生率に関する調査および環境中におけるダイオキシンや類似物質の分析を行ってきた。その結果，流産・死産は枯葉剤が大量に散布されたときに増加したがその後はやや減少したこと，先天異常と胞状奇胎は現在なお発生の増加がみられることを明らかにした。また2-4-7-8ダイオキシンは，メコンデルタ地帯では検出されていないが2～3の母乳からは検出された。

当研究は，以上の研究をさらに一歩進めるために，タイニン省の環境調査および住民検診を行おうとするものである。すでに同省のタイニン村を対象に予備調査を行っており，この地区には環境内にダイオキシンが残留していることも明らかになっている。これまでのデータと併せ，枯葉剤散布による人体影響について貴重な環境疫学的実証データが得られるであろう。

51. 中国における水棲哺乳類の棲息環境汚染に関する生態学的，環境化学的研究　（周 開亜）

中国の長江（揚子江）にはヨウスコウカワイルカとスナメリとが棲息するが，その棲息環境は流域の経済開発等による河川の汚染により年々悪化してきており，両種ともに棲息数が激減してきた。とりわけヨウスコウカワイルカは棲息数が300頭を切り，絶滅の危機におかれていて，種の維持管理が国際的な課題となっている。

当研究は，長江のイルカ類の保護対策の基礎的研究の一環として，長江および黄海と日本近海のスナメリについて，体内における有毒金属および人工有機化合物質の蓄積の分析・比較を行い，長江における水棲哺乳類の生態系の問題点を明らかにするものである。河川，汽水域，外洋という異なる棲息環境に分布する同一種類の水棲哺乳類の環境化学的分析の比較によって，その保護対策につながる興味あるデータが得られるものと予想される。昨年度の予備研究によって日中間の緊密な学術交流が深まりつつあり，いっそうの研究促進が期待される。

52. 近代日本における「経世済民」思想・運動の展開
(テツオ・ナジタ)

「経世済民」は江戸時代中期に生まれた実践倫理で，「講」という組織原理と結び付いて報徳運動に展開し，さらには戦後の協同組合運動にも結び付くなど，日本の社会経済活動に大きな影響を与えてきた。しかし報徳運動が戦前・戦中の極端な報国主義と結び付いたため，研究者には無視または誤解され，長く注目されないできた。

代表研究者らは，1988年度の助成で日本各地にその痕跡を訪ね，その精神が今日まで脈々と息づいていることを確認した。今回はさらに文献資料を収集・分析するとともに愛知，福岡，新潟などで信用組合や信用金庫の現地調査を行い，併せて比較の視点から韓国の「契」やハワイ日系社会の「講」の実態も調査する。これまで「上から」の近代化といわれてきた日本社会にも，民間の「下から」の思想と運動が存在したことを明らかにするであろう。経済活動に新たな倫理基盤が求められている現在，国際的視野からのこのような研究の意義は大きい。

53. 中国帰国者の適応過程に関するプロスペクティブ・スタディ
(江畑 敬介)

近年，わが国の国際化は著しい。それに伴い，多様な文化を担った人々のわが国への移住も盛んになりつつある。いわゆる中国帰国者の場合も「大量帰国」時代を迎えているが，帰国者たちは日本語にも日本文化にも馴染みが少ない異文化への移住者として，適応上のさまざまな困難に遭遇している。

2年前にスタートした当研究は，中国帰国者の日本社会への適応障害の減少とその予防策を明らかにするため，順次帰国する約250世帯(1,000名)を対象に，帰国直後から3年間にわたる適応過程を追跡調査するものである。併せて帰国しない中国在留者とその家族の適応状況も調査し，それと比較することによって適応要因を包括的にとらえようとする。多文化社会における適応と福祉のあり方を方向づけるモデル研究の一つとしても考えられており，中国帰国者のみならず他の諸外国からの移住者の社会への適応にも寄与することが期待される。

54. アジアに於ける近代建築に関する基礎研究——現存遺産調査③
(藤森 照信)

東アジア各国（中国・台湾・韓国・香港・マカオ）の経済的発展は世界的にみても目覚ましく，それに伴って各地域の都市開発もすさまじい。ただその発展は，かつて日本がそうであったと同様，効率を重んじ，未来にのみ眼を向けがちであって，都市の歴史を払拭して縦横無尽に未来都市の姿を描いているのが現状である。

当研究は，そのような都市開発に対する建築史からの物言いとしての性格をもつ。日本の近代建築史研究で効果を上げた手法をそれぞれの現地に適用し，それぞれの地域の研究者が中心になって東アジア各地の都市の近代建築を遺産リストとしてまとめ，文献等の調査も併せて現状認識の基礎的な資料を作成するものである。すでに2年度にわたる助成研究で中国の諸都市についての報告書がまとまっているが，本年度はさらに，中国（ハルビン，青島，煙台，武漢，南京，広州），韓国(ソウル，中部地方)，台湾（北部）を調査する。

55. 韓国における失語症患者言語機能の診断・評価・治療法の開発研究
(朴 恵淑)

韓国で高い死亡率をみせている脳卒中の後遺症の治療中，最も後れているのは失語症の回復である。代表研究者らは，この対策の第一歩として，日本の検査法を参考に韓国版の失語症鑑別診断検査法の開発を目指し，これまでの研究ですでにその試案Ⅰを作成し，健常者と一部の患者を対象にその有効性を検討してきた。

当研究では，韓国の失語症患者の最低100例を対象に試案Ⅰを適用し，失語症のタイプ分けにかかわる検査項目の検出のための因子分析を行うことにより，本試案の鑑別の精度をより高める計画である。そのうえで信頼度，妥当性の検討を経て，標準化を完了し，韓国における検査法を確立する。また日本における失語症のデータとの比較，特に日本の失語症患者の漢字・カナへの対応の相違と，韓国の患者の漢字・ハングルへの対応の相違を比較し，詳細な分析を行う。

56. 下北半島出身者の職業的社会化過程についての追跡調査研究　（細江 達郎）

職業的社会化過程を中核とした生涯発達に関する社会心理学的な追跡調査として，1963年，当研究者等は青森県下北半島4市町村10中学の在学生の調査を開始し，以後，集中的な調査を各発達段階で実施してきた。

当研究は，これまでの成果を踏まえ，対象者が成人中期という発達段階に達した現在，集中的な調査を再開し，成人期の発達研究としての集約を目指すものである。調査対象者は908名であるが，今回の調査では，特に対象者全体の社会化過程を単に集合的にとらえるのみでなく，その職業生活が具体的に展開されている地域社会を特定し，その社会文化構造の歴史的変動過程と個々人の社会化過程を詳細に対応させてとらえることを重視する。そのため，過去の社会化水路に分化と多様性をもち，かつ対象地域社会の社会文化構造に明確な輪郭性を確保できる地域（脇野沢地域を選定）を集約的に調査の対象とし，他の地域の結果と対応させて一般化を図る予定である。

57. 占領下における各種情報メディアの書誌調整とその総合的実証研究　（奥泉 栄三郎）

連合軍による日本占領時代は，日本自体を内外から学び，同時にアメリカを学ぶ最良の時代であって，両国の文化・政治・経済交流の基点でもある。メリーランド大学には，GHQの検閲活動のために集められた当時の日本の文献が多数集められている。代表研究者らは，これまで2年にわたる第II種研究助成で，その教育関係雑誌の書誌調査を行い，解題を付して発表してきた。

当研究は，基本的には在米の日英両語の文化的・学術的情報や資料を整理・体系化し，これによって今後の各主題研究を触発させることを目標としたもので，具体的には，これまでの調査経験を踏まえ，占領軍の検閲資料，情報収集活動原資料，没収図書資料，関西地区主要総合記事索引，広義の文化・教育資料，主題別雑誌目録について書誌的調査を行い，解題を執筆するとともに，数種の事例研究をまとめるものである。

II．研究コンクール

II-0. 研究コンクールの概要

研究コンクールは“身近な環境をみつめよう”のテーマの下に，1979年度以来1年おきに公募を行ってきた。コンクールのねらいは，それぞれの地域で生活する住民と専門の研究者とが一体となって行われる，地域の生活に密着した長期的な研究活動を促進することにある。

今年度は，第5回コンクールの最優秀賞・優秀賞の決定が行われたが，これまで以下のような段階によって進められてきた。

＜項目＞	＜第5回＞
●研究計画の公募	1987年11月～88年1月
●予備研究助成対象の決定	1988年3月
●予備研究実施	1988年4月～同年9月
●本研究助成対象の決定	1988年10月
●本研究実施	1988年11月～90年10月
●最優秀賞・優秀賞の決定	1991年3月
●フォローアップ助成対象の決定	(1991年10月)

本研究助成対象6件の2年間にわたる本研究が終了し，1990年11月29日に最終報告会が開催された。その後，選考委員会を経て1991年3月の理事会においてこれら6件のなかから最優秀賞1件，優秀賞2件が決定された。1991年4月5日には，東京においてこれら受賞チームの報告会を兼ねた贈呈式が行われた。

第5回コンクールの選考委員会の構成は次のとおりである。

委員長：小原秀雄，委員：赤瀬川原平，有馬真喜子，岡部昭彦，小川信子
鈴木継美，高野公男，播磨靖夫，日高敏隆，本間義人

なお，1988年度以来，過去5回のコンクールについての総括評価プロジェクトを実施してきたが，その3年目として，1988年度の島津康男教授による調査報告と1989年度の原ひろ子教授による調査報告とを踏まえた総合的な

検討を行った。その結果，この間公募を休止していた第6回コンクールをあらたに「市民研究コンクール」として1991年度の10月から再開することに決定した。

II-1. 第5回研究コンクール最優秀賞・優秀賞

授賞対象一覧

最優秀賞

	コード番号	研究題目 団体名（代表者・氏名）	対象 都道府県 人数
1	5C-090	港町・函館における色彩文化の研究——下見板のペンキ色彩の復原的考察を通して—— 函館の色彩文化を考える会　(村岡 武司)	北海道 25

優秀賞

2	5C-048	エンカウンタースペース・プロジェクトを中心としたフィールド・ミュージアムの実現をめざして 都留市ムリネモ協議会　(今泉 吉晴)	山梨 19
3	5C-075	サンゴ礁文化圏の自然生活誌——八重山・白保部落のイノーと暮らし—— 魚垣の会　(島村 修)	沖縄 28
		計　　2 件	
		合　計　　3 件	

（注）受賞各チームには賞状，賞牌，および賞金として，最優秀賞；100万円，優秀賞；50万円を贈呈した。

選考経過

賞の選考に際しては，まず本研究助成対象として2年間にわたる研究を実施してきた6チームの研究成果についての最終報告会が1990年11月29日に行われた。その後，12月7日に選考委員会が開かれ，各委員はそれぞれ報告会での発表内容と各チームから提出された報告書や資料を閲読したうえでの評価に基づき各賞候補の推薦を行った。いくつかの論議があって意見は大きく分かれたが，最終的には過半数の推薦を得て「函館」が最優秀賞，「ムリネモ」と「魚垣」が優秀賞としてそれぞれ理事会に推薦されることになった。

そして1991年3月19日の第59回理事会において最終的に決定された。

なお，これら3件のなかから再度の検討を経て，1991年10月には研究奨励基金あるいはフォローアップ助成金の対象が選出される予定である。

研究概要（第５回研究コンクール最優秀賞）

１．港町・函館における色彩文化の研究――下見板のペンキ色彩の復原的考察を通して

（函館の色彩文化を考える会）

この研究の目的は，港町・函館の町並みの基調をなす洋風木材建築の下見板のペンキ色彩の復元的考察を通して，町並み色彩の形成の変遷を明らかにし，色彩が市民生活のなかでどのような意味をもっていたのかを探る。さらに研究成果に基づく実際の建物へのペイント実験などの実践的な取組みを通じて，今後の函館の町並みづくりのなかで，色彩がどのような役割を果たし得るのか，その可能性を探るものである。

研究の背景には，研究対象区域の西部地区において，経済の停滞，居住環境の悪化，人口の減少・老齢化などに伴う住民の環境維持能力の低下という内的に不安定な要素を抱え，一方，最近の観光ブームによる市外の大資本の流入という外部圧力にさらされ，住民の力の及ばないところで環境変貌が急速に起こりつつあるという状況があった。

研究の内容と結論は下の三つの柱から成る。

① 洋風木造建築の外壁下見板などに塗装された層をなすペンキ色彩の，「こすり出し」(サンドペーパーで層を削り，研ぎ出す方法）によるサンプル採集を行った結果「時層色環」(さまざまに彩られた，見事な美しさを誇る同心円状のペンキ層で，あたかも樹木の年輪のように各層が示すそれぞれの時代，環境，個人の様相を意味するものと定義)を発見した。この85棟の建物の「時層色環」をベースに，その化学分析，塗装業者・建物所有者へのヒアリング，文献調査に基づく傍証を関連づけて，色の時代特定ができる方法を編み出した。さらにはコンピュータ・グラフィック・シミュレーションによる町並み色彩の再現，現状の町並み色彩や他都市との比較を加えて，町並み色彩の変遷を総合的に分析，考察した。

結果は，過去から現在までおおむね豊かな町並み色彩が形成されていたことが明らかになった。歴史上四度にわたる大きな変化があり，町並みにも流行色のあることが実証された。変化の背景には，社会・経済情勢，ペンキ材料とその供給，戦争などの時代状況，建物自体の改造などさまざまの要因が絡んでいることが推定された。

とりわけ重要な点は，人々が自分たちの住む環境を美しく豊かなものにしたいという意志と情熱をペンキ色彩に込めた，という色彩と住民の有機的な関係がうかがえたことである。

② 研究対象区域で起こっている環境変貌の動向，社会問題について整理，分析し，それに対してこの研究がどのように位置づけられるのかを考察した。1988年の予備研究開始まもなく，「函館市西部地区歴史的景観条例」が施行され，いわゆる町並み保存が行政レベルで動き始めた。しかし，これに反するかのように，わずか２年半の研究期間においても，歴史的建造物の解体・消失，条例施行前の高層マンションの駆け込み建設ラッシュ，といった現象が次々に現れ，景観破壊，コミュニティの分断などの社会問題が起こった。こういう社会状況のなかで，町並み色彩研究は，失われつつあった自分たちの町に対する愛着と誇りを回復するためのものとして，外からの開発の波に流されないよう自分たちの町に対する認識を深める防具として，さらに変貌する町並みや建物をもう一度魅力的な環境としてつくり上げていくための武器として，市民的認知を得てきつつある。これは，研究会が行ったペイント実験後まもなく，所有者が傷みの激しかった屋根にトタンのペンキの塗り替えと１階の下屋庇の改築を主体的に行ったことに象徴されている。

③ この町並み色彩研究は，一人函館にとどまることなく，日本のなかでは開港場という同じ境遇にある神戸と長崎，さらに海外では下見板建築ペンキ色彩のルーツをたどってアメリカとソビエトへ比較研究の旅に出かけた。特にアメリカでは，類似した研究に取り組んでいる技術者や，ペインターと呼ばれるカラー・アーチストなどとの研究のネットワークが生まれた。

なお，賞の選考に際しては，これまでの活動の経過が，発見の感動，知的冒険の楽しみ，さらにそれを皆が共有する喜びとを伴ったまさに研究本来の姿を市民の立場で実現したものと高く評価された。

研究概要（第５回研究コンクール優秀賞）

２．エンカウンタースペース・プロジェクトを中心としたフィールド・ミュージアムの実現をめざして

（都留市ムリネモ協議会）

都留市フィールド・ミュージアム構想は，身近な自然のなかに動物との出会いの場，すなわちエンカウンター・スペースを開発，設置しようというものであった。それによって，里山としての利用価値を失い，放棄された自然との間に新たな交流の型を見いだそうというのが当初の目的である。

東京圏の膨張の影響をまともに被る人口３万あまりの都留市は，中央高速道路の貫通，ゴルフ場開発，リニア・モーターカーの実験線建設，あるいは宅地化，東京直通通勤電車の運転開始，カラオケ・ボックス，パチンコ店ブームなど，急激な変化に見舞われており，古くからの村道は自動車に占拠されて東京のアーケード街ほどの自由な外出空間すら消失している。都留市の中心部を離れた山間の小さな集落の住民が，東京の神代植物園や新宿御苑に「気持ちのいい自然」を求めて出かけるという状況が背景にある。

① 研究においては，エンカウンター・スペースとしてApodemus Box, Urotrichus Box, ムササビの塔，リスの橋，水小屋（ホタルのすむ湧水），チョウの公園，カワネズミ観察サイン・ポスト，そしてムササビ共生ハビタット・ネットワークなどの装置や施設，あるいは観察ポイントを考案，設置，開発してきた。これらは現在，公開活動を開始し，「森の教室」，「うら山観察会」，「ワイルドライフ・アート展」，「ムリネモ・シンポジウム」など実験的な企画を幾種類か展開している。

② エンカウンター・スペースの考えを，地元である都留市以外にも，山梨県をはじめとする他の自治体，自然保護団体などに提案し，その一部が実現されるなど一定の前進を果たしてきた。

③ 最終的には市内のさまざまな観察ステーションを結ぶことによる市内全域のフィールド・ミュージアム化を目ざすものであるが，その根底をなす理念は環境問題の根本的な解決に向けた「共に生きる世界」を実現しようとするものである。

ここでいうフィールド・ミュージアムとは，自然を稀少価値とかレコードといった分断する観点からではなく，小さな目立たぬ変化の意味や生き物の日常的な努力，そして相互のつながりといったような観点を重視しながら，身近な自然に探索的な目を向けようという主張を表している。そうした場合，身近な自然は巨大博物館，動物園施設の提示する整理された情報とは別のカテゴリーに属する魅力的・根源的な体験をもたらすものとなる。

ムリネモ協議会は，当初の計画では「ムササビと森を守る会」，「イヌワシ研究会」，「宝鉱山の歴史と自然を研究する会」などの都留市内の自然系団体を統合する「強力な統一的」自然環境団体として自身を想定していたが，最終的にはそれぞれの団体と個人のネットワーキングに落ち着いている。すなわち，ムリネモ協議会は構成団体と個人の自発，自立，個性を最大限に尊重するゆるやかな連合であるが，それは地域の固有の価値にかかわるフィールド・ミュージアムの担い手として，もっともふさわしい形と考えられるに至った。

なお，賞の選考に際しては，エンカウンター・スペースという，動物の生態観察に新しい道を開く一連の装置の開発実績と，フィールド・ミュージアム実現に向けての意欲が高く評価された。

3．サンゴ礁文化圏の自然生活誌――八重山・白保部落のイノーと暮らし

(魚垣の会)

白保部落は石垣島の南東に位置し，東の海に面して南北に細長い集落である。沖のリーフに白波が立ち，その内側のイノー（礁池）には北半球最古最大のアオサンゴが群生し，部落の人々はその海を「魚湧く海」と表現する。その白保の海を埋め立てて空港をつくろうという計画が持ち上がったのが1979年。白保部落はすぐに反対を表明し，以来10余年間も白紙撤回を求めて地先の海の埋め立てを阻止してきた。

部落を分断され，人権を踏みにじられ，不当な逮捕にあいながらも10余年間も闘い続けてきたその力はどこからくるのか，また，まぜ白保だけに「アオサンゴ千年の海」が残ったのか――その問いを発し，白保部落と海に学ぼうというのがこの研究活動の目的である。

「白保自然生態系」の豊かな海の秘密とそこにかかわる部落の人々の暮らしにアプローチするために，生態学的研究と民俗社会学的研究の二つの柱を立てて調査を進めてきた。

1．白保自然生態系の豊かさ

① 周辺海域のサンゴが無残な状況にあるなかで白保海域のイノー（礁池）には，アオサンゴ，塊状ハマサンゴ，ウスコモンサンゴやミドリイシ類が海底の熱帯林といわれるほど群生している。その群体が巨大であることは他の海域と比較した場合の白保の特徴といえる。そして，今回の調査で，サンゴはかなりの長期間にわたり産卵していることが分かった。また，スズメダイの仲間を中心に産卵行動が確認できた。

② 研究調査区域で八重山地方に棲息するオカヤドカリ6種のうち5種の棲息分布が確認できた。

③ 6回の定点センサス，5回のラインセンサスなどを通して45種の鳥類を確認することができた。

④ 名蔵川，白水川，宮良川，轟川，など石垣島の河川水9箇所26地点において18項目にわたって水質調査を行ったが，その結果，いちばん清澄な水は荒川，汚染の最も大きな川が宮良川であった。また，降雨直後の石垣島の河川は，赤土による濁りがすさまじい。赤土堆積値には，イノー（礁池）の地形が大きな影響を及ぼす。

2．海と暮らし

① 白保部落の回りには，八重山の先史時代を知るうえで貴重な遺跡や貝塚がある。これらの遺跡の調査から，ずっと昔から人々は海の近くに住み，豊かな海の恵みを得ていたことが分かった。

② 白保集落には，東北のイノーを利用して轟川を中心に南北4㎞に及んで，13箇所の海垣が設けられ「海の畑」として活用されていた。

③ 聞き取り調査を通して，白保の海人のほとんどがもともと白保に住んでいた人ではなく，外部から移り住んだ人たちであること，白保は海と同様，海人を専業にする必要がないほど陸もまた非常に豊かであったということが分かった。

結論として，海の豊かさの秘密は，イノーの地形的な特徴（二重構造，ワタンジの発達），陸上部の地質（石灰岩地帯）・地形的特徴（ドリーネ・鍾乳洞など），轟川の水質とブーイギの存在，フィルターの役目をする砂丘や伏流水と栄養塩類の流入（渡久山），などによるところが大きいことが分かる。白保の海岸部の植生や生物が健全であることが確認されたことは，海の健全さの一つの要因であろうと考えられる。

村人は海のことを熟知し，さらに海の大事さを，季節や天候や，山や川や，つまり自然界というトータルな視点を通してとらえていた。そしてそのようなかかわり方のなかで，地先の海が，ほかのだれのものでもなく，「自分たちの海」「白保部落の海」であるということを認識し得たのではないか。「自分たちの海」であったからこそ，海を守るために（つまり自分を守るために）10年あまりの間一歩も引かずに権力と対峙し続けているのではないかとの考察に至った。

なお，賞の選考に際しては，単に“反対”のための研究ではなく，広く環境問題を考えていく場合の示唆に富む内容に収斂されたことが一定の評価を得た。

Ⅲ．市民活動助成

III−0. 市民活動助成の概要

本助成は，昨年および一昨年度の経験等を踏まえ，本年度より，市民活動の分野における活動全体の発展・向上に役立つことを主な目的に，「活動の交流や促進の契機となるプロジェクト」に対する助成を行うことをその主旨としている。すなわち，従来まで採ってきた①活動記録の作成（公募）とその出版（非公募），および，②活動交流促進プロジェクト（非公募・計画型）の枠をはずし，これらを含む以下の内容に対し，すべて公募により助成を行うこととした。なお，これに伴い，公募機会もこれまでの年1回(4月1日～5月31日）から年2回（第1期＝4月1日～6月20日，第2期＝10月1日～11月30日）に拡大した。

① 活動団体に関するこれまでの活動記録の作成およびその出版
② 多くの活動団体とその内容に関するダイレクトリー等の編纂および出版
③ 多くの活動団体とその内容に関する資料や情報の収集機関およびこれらに準ずる拠点の整理等
④ 多くの活動団体に対する情報の提供（情報紙・誌の発行や海外情報の翻訳・出版など）
⑤ 複数の活動団体相互の連携による集会（セミナー・ワークショップ・シンポジウムなど）の開催および運営等
⑥ 活動全体の活性化に役立つ調査・研究等
⑦ その他，活動全体の発展・向上に寄与することを目的としたプロジェクト

第1期の公募の結果，49件の申請があった。これについては，7月から8月にかけての選考委員会（委員長・栗原彬，ほか4名）での慎重な選考を経て，9月開催の第57回理事会にて10件，1,900万円の助成対象を決定した。助成期間は，11月より1年間である。

また，第2期の公募では，41件の申請があった。これについては，1991年1月から2月にかけての同選考委員会での選考を経て，3月開催の第59回理

事会にて9件，1,340万円の助成対象を決定した。助成期間は，4月より1年間である。

なお，上記の選考に際しての要件および基準は以下のとおりである。

① 「活動記録の出版」に関する選考の要件

・記録作成の作業が完了し，若干の手直し程度で完全原稿ができる状態にあること。

・事実に即した内容であること。

・多数の読者が興味深く読めるよう十分な配慮やくふうがなされていること。

・出版社との間に，出版計画の大筋について事前に同意が得られていること。

② 「上記以外のプロジェクト」に関する選考の基準

1）申請団体の通常の活動について

・活動自体が多くの人々に支えられているか。

・柔軟な発想やアイディアに基づく活動であり，今後の継続性が見込めるか。

・閉鎖的でない広がりのある活動か。

・積極的な社会意識をもった独創的な活動か。

2）プロジェクトの計画内容について

・独創性の感じられる内容か。

・計画の実現性があり，成果が広く波及する可能性を有しているか。

・現時点での計画が，そのグループにとっても他のグループにとっても，今後の展開・発展のうえで重要な契機となるか。

・計画を遂行する際の適切な人材が確保できているか。

なお，これまでの市民活動の記録助成の成果の発表を目的に，本年度は次の報告会を開催した。

第28回報告会「自立と共生をめざして
——“草の根”活動の課題と展望——」
（1991年3月16日，於：東京飯田橋・東京都社会福祉総合センター，内容は本誌p.8および「トヨタ財団レポート」No.56参照）

III-1. 市民活動助成（第１期）

助成対象一覧

（継 2）：継続２年目
（継 3）：継続３年目

	助成番号	テーマ 代表者　所属	助成金額 （円）
1	90-K-006 （継 3）	ミニコミ紙・誌の実態調査及び収集とデータベースの作成 丸山 尚　住民図書館　館長　54 歳　ほか 11 名	2,200,000
2	90-K-008	「土呂久をめぐる運動」に関する記録の作成 上野 登　土呂久・松尾等鉱害の被害者を守る会　会長　64 歳　ほか 17 名	2,000,000
3	90-K-022	「ネットワーキング・フォーラム in 関西――地域で生きる場の再構築を――」の開催 田中 義信　大阪 YMCA　企画室長　47 歳　ほか 14 名	2,000,000
4	90-K-023	「障害者の生活環境改善の活動」に関する記録の出版 太宰 博邦　国際障害者年日本推進協議会　代表　80 歳　ほか 15 名	1,000,000
5	90-K-024	「アジア学院 20 年の歩み」に関する記録の作成 野崎 威三男　学校法人アジア学院　職員　51 歳　ほか 9 名	2,000,000
6	90-K-032	市民活動のコーディネートに関する調査・研究――ボランティア・コーディネーターを中心に―― 筒井 のり子　市民活動のコーディネートに関する研究会　代表　31 歳　ほか 10 名	1,800,000
7	90-K-035 （継 2）	ネットワーカーをつなぐニュースレター『NWer'90』の発行 村上 良雄　ネットワーキング社会研究所　代表幹事　41 歳　ほか 6 名	2,200,000
8	90-K-042	「全国 NGO の集い――1990 年代の地球社会における NGO 間の新しいネットワークを求めて――」の開催 高見 敏弘　「全国 NGO の集い」実行委員会　委員長　64 歳　ほか 10 名	2,000,000
9	90-K-044	在日韓国・朝鮮人等の諸問題に関わる市民活動のミニコミの収集・整理とその分析 佐藤 信行　在日韓国人問題研究所　『RAIK 通信』編集長　42 歳　ほか 9 名	1,800,000
10	90-K-049	「シンポジウム：私達がつくる医療の新しい時代――自律へのネットワークを求めて――」の開催 白井 泰子　自律へのネットワークを考える会　企画委員会代表　46 歳　ほか 14 名	2,000,000
		市民活動助成・第１期計　10 件	**19,000,000**

III-2. 市民活動助成（第２期）

助成対象一覧

（継２）：継続２年目

	助成番号	テーマ 代表者　所属	助成金額 （円）
11	90-K-025	在日外国人の医療問題に関するシンポジウムの開催 小林 米幸　アジア医師連絡協議会　日本副代表　41歳　ほか15名	1,000,000
12	90-K-057 （継２）	“草の根マネージメント”の有り方と開発に関する調査・検討 土屋 真美子　まちづくり情報センター・かながわ　事務局長　34歳　ほか17名	2,000,000
13	90-K-059	主婦の再就職支援システムを考える連続研究会の開催 金谷 千慧子　主婦の再就職センター　代表　50歳　ほか11名	1,500,000
14	90-K-063	「誕生日ありがとう運動」の活動に関する記録の出版 藤本 隆　誕生日ありがとう運動　代表　61歳　ほか20名	1,000,000
15	90-K-065	「清里エコロジーキャンプ」の活動に関する記録の作成 ――日本型環境教育の礎に向けて―― 川嶋 直　財団法人キープ協会教育事業部　課長　37歳　ほか12名	1,800,000
16	90-K-068	「すずめ共同作業所」の活動に関する記録の作成 伊野部 淳吉　社会福祉法人すずめ福祉会　理事長　63歳　ほか12名	1,500,000
17	90-K-078	「美唄消費者協会」の活動に関する記録の出版 伊藤 みえ子　美唄消費者協会　会長　69歳　ほか14名	1,000,000
18	90-K-082	「シャプラニール＝市民による海外協力の会」の活動に関する記録の作成（II） 福澤 郁文　シャプラニール＝市民による海外協力の会　代表　43歳　ほか13名	1,800,000
19	90-K-087	インドシナ難民定住者自立援助プロジェクト ――生活情報紙『こんにちはCYRです』の発行―― いいぎり ゆき　幼い難民を考える会（CYR）　代表理事　54歳　ほか9名	1,800,000
		市民活動助成・第２期計　9　件	**13,400,000**
		市民活動助成　第１期・第２期合計　19　件	**32,400,000**

助成対象概要

1．ミニコミ紙・誌の実態調査及び収集とデータベースの作成　（丸山 尚）

わが国には現在，さまざまな草の根の活動があり，それらに伴う各種のミニコミ紙・誌が発行されている。その実態を把握するとともに，背景としての社会活動の現状を明らかにすることを目的としている。

当プロジェクトでは，昨年および一昨年度の助成により，4,500のミニコミリストを作成し，アンケート調査を実施してきた。また，さらにその数を広げるとともに，収集資料の増大も図っている。本年度はそのしあげとして，5,000種を目標にデータベースをつくるとともに，「ミニコミ総目録」の刊行も目ざしている。

2．「土呂久をめぐる運動」に関する記録の作成　（上野 登）

宮崎県高千穂町の土呂久では，鉱山が猛毒の亜砒酸を製造し始めた1920年以来，農作物や家畜が被害を受け，多くの住民が慢性砒素中毒症にかかって苦しんできた。1971年に社会問題になると，行政や企業に救済や補償を求める運動が展開され，大きな成果を上げてきた。

当プロジェクトは，孤立無援だった山村の被害者と，都市からかけつけた法律家，医師，宗教家，労働組合員など諸分野の人々が協力して進めた運動を記録することで，土呂久公害の経験を各方面に広く伝えることを目的としている。

3．「ネットワーキング・フォーラム in 関西――地域で生きる場の再構築を――」の開催　（田中 義信）

人々の「生きる場」の有り様が問われ出している現在，市民の自発的な問題意識に基づく活動も各地で活発になりつつある。しかし，これらの多様で幅広い分野に及ぶ種々の活動を横に緩やかにつなぎあわせ，今後の社会全体の有り様を考える方向にはいまだ至っていない。

当プロジェクトでは，社会的・文化的な多様性を内包した関西地域を拠点に先駆的な活動を展開している関係者が相互に交流しながら，生きる場の再構築を目ざした有機的な関係性やその方法について検討するためのフォーラムを開催することとしている。

4．「障害者の生活環境改善の活動」に関する記録の出版　（太宰 博邦）

国際障害者年日本推進協議会は，障害者の社会への完全参加と平等を目的に，1980年に結成された団体である。その後，「住居とケア問題小委員会」が協議会内に組織され，国際障害者年以後の生活環境改善に関する調査・研究に取り組んでいる。

当計画では，同委員会により集大成されたわが国における障害者の生活環境改善に関する取組み状況について，一昨年度の助成により作成された記録を出版することとしている。

5．「アジア学院20年の歩み」に関する記録の作成　（野崎 威三男）

アジア学院は1973年に創立以来，アジア・アフリカ・太平洋諸島などの第三世界各地から，農村地域の中堅指導者を迎えてリーダー研修を行ってきている。すでに600人を越える男女卒業生を41か国に送り出しているが，その後の彼らの活躍には目覚ましいものがある。

当プロジェクトは，20周年を控えた同学院のこれまでの経験と学びの蓄積に関する記録を作成しようとするものである。これにより，今後の民間レベルにおける国際協力のあり方に対しての一つの視座が得られることを期待している。

6．市民活動のコーディネートに関する調査・研究――ボランティア・コーディネーターを中心に　（筒井 のり子）

現在，市民活動のさまざまな分野・領域で「協同」の必要性が叫ばれ，“共生社会”の実現に向けての努力がなされている。その際大きな課題となるのは，障害者や高齢者など「なんらかの不利益を被っている人々」と「一般市民」との間の相互理解と連帯の関係づくりである。

当プロジェクトは，この立場の異なる両者の出会いと協同関係づくりを支えるコーディネーターの活動に焦点をあてる。大阪ボランティア協会の25年の活動やその他のボランティア・センターにおけるコーディネート活動の分析を通して，そのあり方を究明する予定である。

7．ネットワーカーをつなぐニュースレター『NWer'90』の発行　（村上 良雄）

現在，さまざまな市民活動が各地で展開されつつあるが，とかく個別的・地域的に限定されがちである。こうしたなか，ネットワーキング社会研究所では，これまで，市民活動のネットワーキングをコンセプトとした各種のフォーラムやシンポジウムなどを開催している。

当プロジェクトでは，昨年度に引き続き，各地のネットワーク組織と連携し，活動を横断的につなぐうえで有効な情報機能としてのニュース・レターを発行することとしている。これが今後の市民による活動の活性化の一助となることを期待している。

8．「全国NGOの集い――1990年代の地球社会におけるNGO間の新しいネットワークを求めて――」の開催（高見 敏弘）

日本には，地球上の人々が直面する諸問題（貧困，飢餓，難民，人権の侵害，環境破壊等）に草の根レベルで取り組むNGO（海外協力を目的とする民間非営利組織）が大小合わせ150団体存在する。各NGOは，それぞれの経験と理念に基づき，発展途上国の人々との協力，国内での情報普及および開発教育活動などを行っている。

当プロジェクトは，これらNGOの関係者間の相互理解を深め，関係強化を図るとともに，各NGOのより効果的な活動の展開を目標に，今後のNGO間のネットワークの方策を検討することを目的としている。

9．在日韓国・朝鮮人等の諸問題に関わる市民活動のミニコミの収集・整理とその分析　（佐藤 信行）

現在，わが国には約70万の韓国・朝鮮人が居住しており，そのほとんどが日本生まれの在日2・3・4世である。1980年代に入り，これらの「在日」の青年たちを中心に外国人登録法改正運動が広がり，これに呼応する日本の市民グループも数多く誕生した。

当プロジェクトは，在日韓国・朝鮮人等の諸問題にかかわる全国各地の市民グループが発行しているミニコミを収集・整理し，それぞれの活動のなかで培われた貴重な体験・思想・総括などを浮き彫りにすることを狙いとしている。

10．「シンポジウム:私達がつくる医療の新しい時代――自律へのネットワークを求めて――」の開催　（白井 泰子）

医療における近年の著しい技術革新とこれに伴う価値観の多様化は，旧来の医療者―患者関係および医療システムの改編を必要としているが，日本ではその方向性がいまだみえない。

当プロジェクトでは，医療と市民，医者と患者関係のあり方などを考える市民・患者グループ等を対象に，アメリカでの取組みの歴史や実情などを学び，日本における活動と経験を交換するためのシンポジウムを開催することとしている。

11．在日外国人の医療問題に関するシンポジウムの開催　（小林 米幸）

現在，日本には100万人以上の外国人が生活または滞在している。こうした外国人人口の急増に対してわが国の受入体制が追いついていけず，さまざまな分野で混乱が生じている。医療の現場もその例外ではなく，病院や診療所においても大きな問題となりつつある。

当プロジェクトでは，この問題に関する理解と解決に向けての契機となることを目的に，外国人，医師，看護婦，ソーシャル・グループ，ボランティア・グループなどがいっしょになって在日外国人の医療問題に関するシンポジウムを開催することとしている。

12．“草の根マネージメント”の有り方と開発に関する調査・検討　（土屋 真美子）

現在，日本の各地ではさまざまな市民活動が行われており，近年ではその影響力も序々にではあるが増大しつつある。しかし，現状を顧みた場合，そのようなグループが自立して活動を維持・継続していくためには種々の「壁」や障害が存在している。

当プロジェクトでは，昨年度助成の成果を踏まえ，活動に外在する制度的な「壁」を乗り越えるために，まず，活動に内在する「壁」を乗り越える「共生・共働に根ざした草の根マネージメント」のあり方と開発を巡る調査と検討を行うこととしている。

13. 主婦の再就職支援システムを考える連続研究会の開催　(金谷 千慧子)

近年，主婦の「子育て後の再就職」はポピュラーなライフ・スタイルになりつつあるが，現実には，長い中断期間後の再就職には多くの困難や問題が伴う。このような状況の下，主婦の再就職センターでは1987年より「主婦の再就職準備講座」を毎年開催してきている。

当プロジェクトでは，主婦の再就職をより円滑にすることを目的に，①再就職を支援するシステムの現状，②今後の有効な支援システムのあり方，③「再就職アドバイザー」の創設，などに関する研究会を連続的に開催することとしている。

14. 「誕生日ありがとう運動」の活動に関する記録の出版　(藤本 隆)

誕生日ありがとう運動は，だれにでも年に一度巡ってくる誕生日に，「知恵遅れの問題をともに考える仲間に」と呼びかけている草の根の全国運動である。

当計画では，一昨年度の助成により完成した25年の運動に関する記録を出版することとしている。

15. 「清里エコロジーキャンプ」の活動に関する記録の作成――日本型環境教育の礎に向けて　(川嶋 直)

清里エコロジーキャンプは1985年に始まり，さまざまな試行錯誤を繰り返しながら，これからの地球と人間とのかかわり合い方に関する具体的な提案を行っていくため，合宿型共同研究（実験）の形式で実施されている。

当プロジェクトでは，この日本型の環境教育キャンプの実験的な試みを広く明らかにし，さまざまなニーズにこたえる環境教育プログラムおよび環境教育キャンプの運営技術を発展させることをねらいとして，これまでのキャンプの活動に関する記録を作成することとしている。

16. 「すずめ共同作業所」の活動に関する記録の作成　(伊野部 淳吉)

たとえ障害が重くても，地域のなかで，地域の一員として働き，生活がしたいという願いにこたえて開所した「すずめ共同作業所」は，すでに15周年を迎えている。この間，地域の人々に支えられながら，その活動は着実に前進してきた。

当プロジェクトは，この15年間の高知県における「すずめ共同作業所」の歩みを記録することにより，同県における障害者の運動の成果や教訓を広く一般に伝えることを目的としている。これによって，少しでも障害者運動の発展に寄与できることを期待している。

17. 「美唄消費者協会」の活動に関する記録の出版　(伊藤 みえ子)

美唄消費者協会は，1970年以来，チクロ，AF-2，過酸化水素などといった食品添加物の追放運動を行ってきている。一方，郷土の食文化を掘り起こし，さらに環境汚染，自然破壊，核，食糧問題を通して国際的な交流も進めている。

当計画では，北海道の小さな町で誕生し，活動を展開している同協会の20年に及ぶ活動について，1987年度の助成により作成された記録の出版を行うこととしている。

18. 「シャプラニール＝市民による海外協力の会」の活動に関する記録の作成（II）　(福澤 郁文)

シャプラニール＝市民による海外協力の会は，「南」の国々の民衆による開発活動を支援することを目的に，1972年の設立以来，バングラデシュを対象に地道な活動を展開している。設立後5年間（1972～77年）の活動記録については，1984，1987年度の助成により「シャプラニールの熱い風」としてすでに刊行されている。

当計画では，その後（1978～1987年）の同会の活動に関する記録を作成することとしている。今後の日本の他のNGOの活動にとっても貴重な参考資料となることを期待している。

19. インドシナ難民定住者自立援助プロジェクト――生活情報紙『こんにちはCYRです』の発行　（いいぎり ゆき）

わが国には現在，約7,000人のインドシナ難民が定住しており，今後もその増加が予想される。しかし，彼らの多くは日本語の問題もあり，生活に必要な情報を十分得られないでいる。こうした状況下，幼い難民を考える会(CYR)では1988年より，情報紙『こんにちはCYRです』を，日本語とともにインドシナ3か国（ヴェトナム，ラオス，カンボジア）語の訳つきで発行している。

当プロジェクトでは，この情報紙をさらに充実することとしている。これにより，定住者の支援のみならず，開発教育にも貢献することを期待している。

Ⅳ．国際助成

IV-0. 国際助成の概要

国際助成の対象地域は当面の間，東南アジア諸国に焦点を絞っており，関心分野は，過去14年間に行った国際助成の経験から，1990年現在，各地域の固有文化(indigenous culture)の保存と振興を目指すプロジェクト等に重点をおいている。

また，助成対象の選考に当たっては，以下の諸点を満たすようなプロジェクトを重視している。

① 東南アジア諸国の人々の発想になり，東南アジア諸国の人々によって行われるプロジェクトである。

② 政府や国際機関のプロジェクトであるよりも，大学や民間（非営利）のプロジェクトである。

③ 具体的な成果が期待でき，社会的なインパクトの大きいプロジェクトである。

国際助成への応募方法を簡単にまとめると次のとおりである。東南アジア諸国の人々が助成を希望する場合は，助成を希望するプロジェクトについて簡単な概要を書いて，当財団の国際助成部門宛てに直接送っていただきたい（当財団の事務所は東京にあるのみで海外にはない)。原則として以下には助成を行わない。基金の拠出，建設費，装置購入，博物館用収集品の購入，図書館用蔵書の購入，機関助成，すでに発足しているプログラムの年間経費，政治活動，宗教活動等。また，プロジェクト・リーダーおよび研究者への給料の助成は原則として行わない。申請は1年中受けつけるが，申請プロジェクトの具体性およびプロジェクトについての情報の多寡によって，審査に要する時間が異なる。通常，審査に要する期間は6か月から1年である。ほとんどの申請プロジェクトについて，審査前および審査中に財団のプログラム・スタッフが申請者を訪問し調査を行う。継続プロジェクトであっても毎年申請が必要である。助成決定は10月の理事会で行われる。

インドネシア若手研究者奨励研究助成は，1987年度より，国際助成の枠内で新たに開始した。その目的はインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者の個人研究を対象として，助成を行うものである。国際助成としては初

めて一般公募形式を取り，インドネシアのほとんどすべての地域から申請が出された。若手研究者奨励研究助成は，試行的に数年間インドネシアで実施する予定である。その他の国々については，この成果をみてから改めて考慮する。

1990年11月16～18日の3日間，バンコクにおいて国際助成研究報告会を開催した（内容については「トヨタ財団レポート」No.55を参照)。

IV–1. 国際助成対象

(継 2)：継続 2 年目
(継 3)：継続 3 年目
(継 4)：継続 4 年目
(継 5)：継続 5 年目
(継 6)：継続 6 年目

助成対象一覧

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 (ドル)
1 (継 2)	モン語史料のコンピュータ入力 ナイ・パン・フラ　ビルマ文化省考古学局碑文部　元部長（ビルマ）	24,900
2 (継 2)	『聖戦物語』：アチェ戦争（1873 年－1912 年）における創作と社会の受けとめ方 イムラン T. A.　ガジャマダ大学文学部インドネシア文学科　講師（インドネシア）	5,200
3 (継 3)	ワリソゴ，ジャワ島最古の歴史文献に描かれたジャワのイスラム教の祖たち ワシット　ワリソゴ国立イスラム高等学院研究センター　所長（インドネシア）	5,000
4 (継 2)	シェク・ムハマド・アルシャド・アルバンジャリの著作『サビラル・ムフタルディン』の翻字 アナリアンシャ　アンタサリ国立イスラム高等学院研究所　所長（インドネシア）	13,200
5 (継 2)	ムシャワラトゥタリビン：南カリマンタンにおける民族覚醒運動時代の地域最大の地方組織 M. ヌール M.　アンタサリ国立イスラム高等学院研究所　研究員（インドネシア）	9,000
6 (継 3)	アチェの慣習法の編纂 ダルウィス A. S.　アチェ慣習法・文化研究所　副所長（インドネシア）	16,500
7 (継 3)	地域の復権と発展における文官エリートと軍人エリートの統合の役割 ――西スマトラのケース，1966 年－1987 年―― サアフルディン B.　国立防衛大学　教官（インドネシア）	2,600
8 (継 2)	サムドラ・パサイの歴史：インドネシアの最初のイスラム王国，1259 年－1525 年 T. イブラヒム A.　ガジャマダ大学文学部　学部長（インドネシア）	1,300
9 (継 2)	言語変化：ランプン，スラウェシ，ティモール，スンバワに移住したバリ人のケース I. G. M. チャジャ　ウダヤナ大学文学部言語学科　講師（インドネシア）	5,500
10 (継 3)	スラカルタのフォルステンランズ・タバコ栽培とブスキのブスキ・タバコ栽培：その地域農業経済と地域社会への影響，1860 年－1960 年 スギヤント P.　ガジャマダ大学歴史学科　講師（インドネシア）	2,200

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
11	中部マルク，セラム島のアルネ族の経済関係 エドアルド M.　パティムラ大学教育学部　講師（インドネシア）	3,000
12	バンジャル古語の発掘，収集および記録 アブドゥル D. H.　ランブン・マンクラット大学教育学部　講師（インドネシア）	5,000
13	ジャワの村落盗賊：1850年－1942年 スハルトノ　ガジャマダ大学文学部歴史学科　講師（インドネシア）	3,500
14	南スラウェシの村落社会の社会・文化変容 イドゥルス A.　ウジュンパンダン教育大学社会科学教育学部　講師（インドネシア）	8,400
15	国際会議：シルクロード沿いの港町 A. B. ラピアン　インドネシア科学院（インドネシア）	9,000
16	スンダ文化百科事典 アイップ R.　作家（インドネシア）	5,000
17	インドネシア若手研究者奨励研究助成の研究成果出版 アスワブ M.　社会経済調査・教育・情報研究所　所長（インドネシア）	16,000
18 （継 3）	標準ラオ語辞書の編纂 トンカム O.　社会科学研究所　副所長（ラオス）	22,000
19 （継 2）	カンボジア語－ラオ語辞書の編纂 マハ・カンパン V.　国立社会科学院　副院長（ラオス）	4,400
20 （継 3）	貝葉文献のインヴェントリー作成 ダラ K.　文化省ヴァナシン雑誌　編集長（ラオス）	35,500
21 （継 2）	タン・フン叙事詩に描かれた伝統と儀礼についての研究 ドゥアンドゥエン V.　文化省ヴァナシン雑誌（ラオス）	4,500
22 （継 2）	シンサイ民話の古典詩から現代散文型への翻訳および研究 ウティン B.　文化省ヴァナシン雑誌　副編集長（ラオス）	9,200

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
23	古代ラオスの碑文研究	
	トンサ S.　文科省博物館考古学局　局長（ラオス）	8,700
24	マレーシア史のモノグラフ：1900年－1941年	
（継2）	クー K. K.　マラヤ大学文学部歴史学科　教授（マレーシア）	4,200
25	マレーシア軍人エリートの台頭	
	ナザン H.　マレーシア国立大学歴史学科　講師（マレーシア）	12,000
26	マレーシアの8家族：民族とマレーシアの開発がもたらした社会・経済的結果	
	アジザー K.　マラヤ大学文化人類学科　準教授（マレーシア）	18,100
27	古典ネワール語辞書編纂	
（継6）	P. B. カンサカール　ネワール語辞書委員会　事務局長（ネパール）	17,000
28	ブキドノン：1946年－1985年	
（継3）	M. M. ラオ　セントラル・ミンダナオ大学　教授（フィリピン）	6,500
29	フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成	
（継4）	R. A. コンセプシオン　国立公文書館　副館長（フィリピン）	19,900
30	バナハウ山の神話と儀礼：宗教伝説の構造と役割を世界観の指標としてとらえる研究	
（継3）	G. M. ペシガン　アテネオ・デ・マニラ大学英語学部　助教授（フィリピン）	4,700
31	フィリピンのイスラム芸術と建築：土着と現代	
（継3）	R. N. カニェーダ　フィリピン大学マニラ校マニラ研究プログラム　研究員（フィリピン）	1,200
32	フィリピン諸語辞書	
（継5）	E. コンスタンティーノ　フィリピン大学社会学科・哲学学部言語学科　教授（フィリピン）	15,500
33	スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査，翻字，翻訳，出版	
（継2）	V. B. リキュアナン　フィリピン歴史文化保存ナショナル・トラスト　副会長（フィリピン）	25,200
34	マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版	
（継4）	M. D. コロネル　ミンダナオ州立大学研究センター　教授（フィリピン）	13,600

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
35 （継 4）	マノボ族の叙事詩『ウラヒーガン』の記録，翻訳，編集，出版 E. G. マキソ　シリマン大学研究センター　コーディネイター（フィリピン）	21,000
36 （継 2）	フィリピンの各言語による文学のピリピノ語への翻訳・出版 E. M. パチェコ　アテネオ・デ・マニラ大学出版会　所長（フィリピン）	21,800
37 （継 3）	マニラ社会史：1765 年－1898 年 M. L. T. カマガイ　フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科　助教授（フィリピン）	2,600
38 （継 2）	スバネン族の民俗伝承：文化変容の研究 J. V. エンリケス　セイヴィヤー大学古文書館　館員（フィリピン）	7,500
39 （継 3）	18 世紀におけるフィリピン聖職者の起源 L. P. R. サンチャゴ　メディカル・シティ病院　精神医学者（フィリピン）	6,400
40	アジアの宮廷音楽の共通要素の探究 J. マセダ　フィリピン大学音楽学部　名誉教授（フィリピン）	5,100
41	フィリピンの国家組織発達の社会・政治および文化的側面：1946 年－1990 年 E. R. サンタ・ロマナ　フィリピン大学アジア研究所　助教授（フィリピン）	11,500
42	ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習 H. K. グロリア　アテネオ・デ・ダバオ大学社会科学部歴史学科　教授（フィリピン）	14,100
43	フィリピン研究のための固有の資料 J. M. フランシスコ　アテネオ・デ・マニラ大学ロヨラ神学校　助教授（フィリピン）	12,100
44	アヌラダプラ都城部の考古学プロジェクト：遺物の整理・研究と報告書の作成 S. セネヴィラトネ　ペラデニア大学考古学科　学科長（スリランカ）	10,000
45 （継 2）	タイの古代織物の研究 チラポン A.　国立博物館保存部　上級保存科学研究員（タイ）	7,100
46 （継 4）	パンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究 ピチット A.　チェンマイ大学人文学部　準教授（タイ）	13,700

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
47 （継 2）	固有の知識体系の活力と再生への展望 チャンタナ B.　チュラロンコン大学社会研究所　研究員（タイ）	17,200
48	タイにおけるホアビン人の研究 スリン P.　シンラパコン大学考古学部　準教授（タイ）	29,200
49	東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷 タダ S.　コーンケン大学建築学部　講師（タイ）	23,800
50	タイ法制史：シャム王国と南部王国の法的システムの比較研究 ピティナイ C.　タマサート大学法学部　助教授（タイ）	18,400
51	現代クメール語との関連における古代・中世クメール語辞書 ウライシー V.　シンラパコン大学考古学部　助教授（タイ）	10,500
52	東南アジアと中国南部の後期青銅器時代に関する国際会議 チェタナ N.　シンラパコン大学文学部　教授（タイ）	9,800
53 （継 3）	ヴェトナム百科事典 P. N. クウォン　ヴェトナム社会科学委員会　委員長（ヴェトナム）	29,100
54 （継 3）	ヴェトナムの漢字およびノム文字による碑文研究 N. Q. ホン　ヴェトナム社会科学委員会漢字・ノム文字研究所　副所長（ヴェトナム）	9,500
55 （継 3）	ヴェトナムのタイーヌン少数民族 B. V. ダン　ヴェトナム社会科学委員会民族学研究所　所長（ヴェトナム）	6,400
56 （継 3）	チャムの歴史と文化 N. C. ビン　ヴェトナム社会科学委員会ホーチミン市社会科学研究所　所長（ヴェトナム）	5,300
57 （継 2）	19 世紀以降の北ヴェトナム・デルタにおける農業生産組織の伝統的要因が現代に及ぼす影響 C. V. ラム　ヴェトナム社会科学委員会経済研究所　副所長（ヴェトナム）	7,000
58 （継 2）	ヴェトナム語の中の中国語を語源とする四千の要素 H. V. ハン　ヴェトナム社会科学委員会言語学研究所　所長（ヴェトナム）	9,100

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
59 （継 2）	ヴェトナムのフオン・ウオック（村の法律）についての文書の保存と記録 N. D. トン　ヴェトナム社会科学委員会社会科学情報研究所　所長（ヴェトナム）	11,500
60 （継 2）	南ヴェトナムのヴェト族の民族文化 N. Q. ヴィン　ヴェトナム社会科学委員会ホーチミン市社会科学研究所　副所長（ヴェトナム）	7,000
61 （継 3）	『ヴェトナム仏教史』の英訳と出版 N. T. トウ　ヴェトナム社会科学委員会哲学研究所　副所長（ヴェトナム）	11,200
62 （継 2）	北ヴェトナムのヴェト族の伝統的祭り N. D. ティン　ヴェトナム社会科学委員会民俗学研究所　副所長（ヴェトナム）	11,600
63 （継 2）	東洋文明とヴェトナムの伝統的家族 N. P. トゥオン　ヴェトナム社会科学委員会社会学研究所　所長（ヴェトナム）	11,400
64	ヴェトナムとタイの社会科学者のセミナー：伝統と現代 P. X. ナム　ヴェトナム社会科学委員会　副委員長（ヴェトナム）	13,400
65	ヴェトナムの仏教寺院 N. D. ディウ　ヴェトナム社会科学委員会社会科学出版局　局長（ヴェトナム）	9,400
66	15 世紀から 18 世紀のヴェトナム封建制度の法律とその慣行 D. T. ウック　ヴェトナム社会科学委員会国家と法研究所　所長（ヴェトナム）	9,300
67	村落コミュニティの心理とヴェトナムの文化生活におけるその遺産 D. ロン　ヴェトナム社会科学委員会社会心理学部　部長（ヴェトナム）	9,800
68	北ヴェトナム・デルタ地域の商業を主たる生業とする村 P. H. レ　ハノイ大学ヴェトナム研究協力センター　教授（ヴェトナム）	4,500
	小　計（国際助成一般）　68 件	**764,800**
1 ｝ 31	インドネシア若手研究者奨励研究助成　別表（p.80～83）の 31 名	67,700
	国際助成合計　99 件	**832,500** **（120,005,808 円）**

助成対象概要（国際助成）

1．モン語史料のコンピュータ入力

（ナイ・パン・フラ）

ビルマやタイなどの大陸東南アジア諸国の歴史発展過程において，インドやスリランカなどの高度な文化を受容してきた先住民族モン族の果たした役割は今日広く認められているが，モン族の歴史・文化の研究は十分に進んでいない。

当研究の第１年度では，日本に保存されている８点のモン語古法典のうち，最も重要な１点を中心にこの英訳を行った。本年度は，この１点のテキストの校訂，モン文字によるコンピュータ入力，全単語の索引づくりなど，歴史，言語学研究のための基礎的作業を行う。

2．『聖戦物語』：アチェ戦争（1873年－1912年）における創作と社会の受けとめ方　（イムラン T. A.）

インドネシアのアチェ地方が，オランダの植民地化に抵抗して戦ったアチェ戦争において，『聖戦物語』という文学がアチェの民衆意識の鼓舞に大きな役割を果たした。当研究は，①アチェにおける文学伝統はどのようなものであり，そのなかで『聖戦物語』がどのように生まれてきたのか，②『聖戦物語』を広めるために果たした宗教教育機関やウラマーの役割を解明する。第１年度には，現地のフィールド調査等により物語や背景となる情報を収集し，本年度はオランダに保存されている物語の記録の分析を行い，報告書の執筆を行う。

3．ワリソゴ，ジャワ島最古の歴史文献に描かれたジャワのイスラム教の祖たち　（ワシット）

ジャワ島に最初にイスラム教を伝えたとされる９人のイスラム聖人（ワリソゴ）は広く民衆に信じられ，信仰の対象になっているが，実在の人物か空想の産物か定かではない。当研究ではジャワ諸王朝の王たちが編纂させた年代記（ババット）を用いて，ワリソゴ伝説を検証し，イスラム教がジャワに定着していく過程を探ろうとする。第1，第２年度にはさまざまな年代記の異本の収集と検討，主要文献の翻字，古ジャワ語からインドネシア語への翻訳を行った。本年度は，これまで収集した資料を基に分析を行い，報告書にして出版する予定である。

4．シェク・ムハマド・アルシャド・アルバンジャリの著作『サビラル・ムフタルディン』の翻字　（アナリアンシャ）

S. M. A. アルバンジャリが，バンジャル王国の王の依頼で書いたキタブ『サビラル・ムフタルディン』は18世紀のバンジャルの社会，文化についての情報が多く含まれており，当時のバンジャル社会を研究するうえで貴重な資料となる。当プロジェクトの目的は，マレー語（アラビア文字）で書かれたこのキタブをローマ字に翻字し，難しい言葉に注釈を付して出版することである。第１年度には，翻字と注釈の作業を進めた。本年度はこのキタブが今日も使われている南タイやマレーシアへの調査を行い，翻字と注釈を完成させて成果を出版する。

5．ムシャワラトゥタリビン：南カリマンタンにおける民族覚醒運動時代の地域最大の地方組織　（M. ヌール M.）

インドネシアの民族運動は，1908年に創立されたブディ・ウトモに始まり，イスラム運動と連動しながらサレカット・イスラムなど多くの運動組織を生み出した。当研究では，これらの動きに呼応し1931年に南カリマンタンで創立されたイスラム組織ムシャワラトゥタリビンに焦点をあて，その設立期の同地域での政治・経済，社会・文化などについて考察する一方，その組織の果たした役割と歴史を明らかにする。第１年度には南カリマンタンでの活動状況の情報収集を行った。本年度は，他の４州での調査および史料の調査と報告書の作成を行う。

6．アチェの慣習法の編纂

（ダルウィス A. S.）

スマトラ島西端のアチェ地方は，西方文明の影響を最も早くから受け，インドネシアがイスラム化してからはイスラム教の学問の府として栄え，現在もイスラム信仰の篤い地方として，他地域と多分に異なる性格を有している。当研究ではアチェ地方全域のさまざまの慣習・慣習法について古老などから聞き取り調査を行い，これらを記録に残すことを目的にしている。第１年度は，通過儀礼を中心に，第２年度は，共同体の協同作業を中心にこれに関連する慣習・慣習法の記録と整理を行った。本年度は，行政と経済活動の慣習・慣習法の記録を行う。

7．地域の復権と発展における文官エリートと軍人エリートの統合の役割　(サアフルディン B.)

西スマトラのミナンカバウ族は，1957年中央政府に反旗を翻し，共和国革命政府を樹立して反乱を起こした。反乱は政府軍によって鎮圧されたが，多くの傷跡を西スマトラ地方の人々に残した。当研究では反乱鎮圧後，中央政府の厳しい監視下にあった西スマトラが，しだいにその傷を修復し，復興を成し遂げていくプロセスを，中心的役割を果たした文官エリートと軍人エリートの統合という観点から分析することを目指す。本年度は，第1，第2年度に収集した関連文献，関係者のインタビューを基に，報告書草稿の作成および補足調査を行う。

8．サムドラ・パサイの歴史：インドネシア最初のイスラム王国，1259年－1525年　(T. イブラヒム A.)

サムドラ・パサイ王国は13世紀半ばに，現在のアチェ州に興り，1524年にアチェ王国に滅ぼされるまで続いた。この王国はインドネシアで初めてのイスラム王国で，貿易港としても栄え，歴史上重要な王国だが史料が少なく多くが未解明のまま残されている。

当研究の第1年度では，残されている碑文，古銭などや古文書の収集に努めた。第2年度も引き続き情報の収集を行う。

9．言語変化：ランプン，スラウェシ，ティモール，スンバワに移住したバリ人のケース　(I. G. M. スチャジャ)

バリ島の人口密度は非常に高く，1950年代より多くのバリ人がスマトラ，スラウェシ，スンバワ島などに移住している。当研究では，政府の移住政策によってバリ島から他地域へ移住した人々に焦点を当てて，彼らの話すバリ語の変化を音声学，語形論，文章論など言語学的観点から調査する。また，移住先社会でのバリ語の果たす役割の変化，他民族の言語との関係についても調査する。第1年度には，スマトラのランプンへ移住したバリ人を対象として研究を行った。本年度は，スラウェシ等の地域へ移住した人々を対象として研究を継続する。

10．スラカルタのフォルステンランズ・タバコ栽培とブスキのブスキ・タバコ栽培　(スギヤント P.)

当研究は，性格を異にするジャワ島の二つのタバコ産業の歴史の比較研究である。スラカルタのフォルステンランズ・タバコ栽培はオランダのタバコ会社により始められ，独立後インドネシア政府の国営会社が経営した。一方，ブスキ・タバコは，オランダ人の個人栽培主により始められ，独立後もインドネシア人の栽培主が栽培してきた。この二つのタバコ産業はまったく異なる盛衰の歴史をもっている。第1年度では，国内での史料調査，インタビュー，第2年度はオランダでの史料調査を行った。本年度は国内での補足調査と報告書の執筆を行う。

11．中部マルク，セラム島のアルネ族の経済関係　(エドアルド M.)

アルネ族は，セラム島西部の山岳地にその大部分が居住する少数民族で，外部との交渉が少なく孤立している。彼らの現在の社会や暮しとの調和を保ちつつ，どのように発展させていくかが課題である。そのために，彼ら固有の経済関係を調査する必要がある。当研究では，アルネ族の歴史，彼らの生業とそれに関連する慣習法，親族関係などの基礎的情報を基に，特にアルネ族の個人間，家族間，親族集団間，および外部との経済関係に焦点を当てて物や労働の交換の形態とそこで市場の果たす役割などを研究，分析する。

12．バンジャル古語の発掘，収集および記録　(アブドゥル D. H.)

南カリマンタンを中心とするバンジャル語は，東南アジア島嶼部のリンガフランカであるムラユ語(マレー語)の一つの大きな方言集団である。

近年，国語インドネシア語の浸透に伴って，バンジャル語の古い語彙が急速に廃れつつあり，バンジャル語原型を保持しているのは，南カリマンタン，中部カリマンタン，リアウ州のバンジャル人移住地など数地域の少数のグループとなってしまっている。そこで当研究ではこれらのグループを対象に，バンジャル語の古い語彙を収集し，記録に残すことを目的としている。

13. ジャワの村落盗賊：1850年－1942年

（スハルトノ）

オランダ植民地下のジャワでは，プランテーションの周辺に盗賊団がはびこり，植民地政府もこれを十分に取締ることができず，ある種の解放区の様相を呈していたといわれる。盗賊団は，プランテーションの官吏，伝統的首長，富裕農民，華人などから略奪を繰り返した。

当研究者はこの盗賊団の活動を単なる犯罪行為としてでなく，植民地支配に対する民衆の抵抗運動の一表現形態としてとらえ，その歴史を研究することを目的としている。方法としては，文献調査のほか，盗賊団の関係者へのインタビューも行う。

14. 南スラウェシの村落社会の社会・文化変容

（イドゥルス A.）

当研究は，南スラウェシの三つの村落社会，すなわち灌漑米作農村，高地畑作農村，漁村において，過去20年間に導入された新しい技術が，その地域の社会構造（土地所有，労働関係，社会組織，職業と人口の移動）や文化（識字率，ライフスタイル，消費パターン，政治参加，儀礼），そして社会問題（犯罪，紛争，貧困）に，どのような変化をもたらしたかを調査することを目的としている。

方法的には，統計的データの収集，フィールド調査，村人のインタビュー，生活史の手法などを用いる。

15. 国際会議：シルクロード沿いの港町

（A. B. ラピアン）

海のシルクロードは，4世紀以降大陸部で戦乱が続き，陸のルートの安全が損われたとき，それに代わるものとして隆盛をきわめた。東南アジア地域は，アジアの南西部と極東の航路の交差点として重要な役割を果たした。

海のシルクロードについては，研究者個々により多くの研究が成されたが，国際共同研究による総合的研究は行われたことはない。そこで当国際会議はさまざまな専門分野の研究者を各国から招き，海のシルクロードに関する新しい研究アプローチ，情報源，研究方法の模索を行い，国際共同研究の環境づくりを目的として行われる。

16. スンダ文化百科事典

（アイップ R.）

西ジャワのスンダ地方で話されているスンダ語は，ジャワ語に次いで約2,500万人によって話されている地方語で，またスンダの歴史は5世紀にさかのぼる。

当プロジェクトは，スンダ語およびスンダ文化に関するスンダ文化百科事典をインドネシア語で編纂するための予備調査である。当百科事典では，スンダ地方の言語，文学，舞台芸術，歴史，宗教，哲学，社会習慣，考古学，経済，政治の分野を網羅したスンダ文化に関する4,000の見出し項目を扱う予定である。

17. インドネシア若手研究者奨励研究助成の研究成果出版

（アスワブ M.）

トヨタ財団では，1987年度からインドネシアの35歳以下の若手研究者を対象に，個人研究への少額助成金を提供する助成プログラムを行ってきた。応募者の数は多く，1987年度273人，1988年度337人の応募があり，それぞれ17名と18名の若手研究者が選ばれ1年間の研究を行った。

当プロジェクトは，彼らのなかで優れた成果を上げたものを，3冊の本としてまとめて出版しようとするものである。

18. 標準ラオ語辞書の編纂

（トンカム O.）

現存のラオ語辞書は小型のもので，諸分野の言葉を網羅していない。また編纂時期も古いので，社会の発展に伴って生まれた新語は含まれていないし，時代の推移に伴って語義が古くなっているものもある。当プロジェクトは，ラオスの社会・技術発展に対応した新語義を網羅した2万5,000語を収録する標準ラオ語辞書の編纂を行うことを目的としている。貝葉文献，新聞などよりデータを収集し，語義の検討後，用語例を付す。第1年度と第2年度に，全体の78％の語彙の作業を終え，本年度は残りの作業と辞書の出版を行う。

19. カンボジア語—ラオ語辞書の編纂

(マハ・カンパン V.)

ラオスとカンボジアは異なった言葉を話しているが，地理的には隣国であり，両国とも仏教徒が大半を占める。現在，両国間に友好条約が結ばれており，双方の多くの学生が相手国に留学し，また学者間の交流も進展してきている。当プロジェクトは，これらの交流を促進し両国の相互理解を深めることを目的として，これまでに編纂されたことのないカンボジア語—ラオ語辞典を3年がかりで編纂しようというものである。第1年度には全体の約半分の語彙について作業を行い，本年度では全体の3分の2まで作業を進める予定である。

20. 貝葉文献のインヴェントリー作成

(ダラ K.)

当プロジェクトは，ラオスのヴィエンチャン州とルアンプラバン州において，寺院などに散在している貝葉文献の所在を明らかにし，僧侶などにそれらの文献を読むトレーニングを施し，コンピュータにデータを入力してそれらの貝葉文献のインヴェントリーづくりを行う。第1，第2年度には，タイから専門家を招いて僧侶へのトレーニングを行ってもらい，その後，貝葉文献の分類作業を行っている。本年度は，引き続き同様の作業を行うほか，コンピュータによるインヴェントリーづくりを完成させる予定である。

21. タン・フン叙事詩に描かれた伝統と儀礼についての研究

(ドゥアンドゥエン V.)

タン・フン叙事詩は，14～16世紀にかけてラン・サーン王国の宮廷詩人によって書かれたラオス文学のなかでも最も長編の作品である。その内容は，10～12世紀にメコン川流域を支配した王の偉業に関したものであり，そのなかに描かれた信仰，文化・伝統は，当時の社会を映すだけでなく，現在のラオス各地にその痕跡が認められる。第1年度には叙事詩に描かれた儀礼の研究を行った。本年度は，高地に住むKmuという叙事詩の英雄の末裔といわれる人々の儀礼を調査し，両者を比較して報告書にまとめて出版する。

22. シンサイ民話の古典詩から現代散文型への翻訳および研究

(ウティン B.)

シンサイ民話は，17世紀に著された古典文学であり，現在1万行に及ぶ叙事詩として残っている。この民話は，当時のラオスの社会にみられた伝統，仏教，道徳などを強く反映しており，ラオスの人々が自国の固有文化，伝統を理解，再認識するために欠くことのできない書物である。しかし，一般の人々は口承の形で伝え聞いてはいるものの，この民話を読める人はパーリ語等を理解できる学者に限られている。第1年度には，シンサイ民話の異本を収集し，専門用語等を研究した。本年度には現代散文型へ翻訳・出版する予定である。

23. 古代ラオスの碑文研究

(トンサ S.)

ラオス最古の碑文は5世紀にさかのぼるが，石や銅に刻まれた大量の碑文が14～19世紀につくられ，それらは全国に分布している。これらの碑文はラオスの歴史研究に重要な情報を提供するが，これまでに組織的研究が行われたことはない。

当研究では，これまでに収集された碑文に関するラオス内外の資料を収集し目録を作成することを第1に行う。その後，まだ択本が取られていない碑文を探して択本，写真を作成して目録に収め，個々の内容の要約を付す。特に重要なものは翻字，翻訳を行う。

24. マレーシア史のモノグラフ：1900年－1941年

(クー K. K.)

当プロジェクトは，1900～1941年の包括的なマラヤ史（マレー半島部）を書くに当たって，以下の六つのテーマについて，モノグラフを書くことを目的としている。①マラヤにおける華人の経済活動　1880－1941年，②マラヤにおけるイスラム　1900－1941年，③マラヤのインド人組織　1892－1936年，④スランゴール：海上貿易から工業化へ，⑤クアラルンプール(1880－1941年)とイポー（1902－1941年），⑥マラヤの経済史　1880－1941年，である。第1年度には，上記①と⑤を行った。本年度は引き続き，②と④について作業を行う。

25. マレーシア軍人エリートの台頭

(ナザン H.)

マレーシア国軍は，イギリス軍を範としてきたが，植民地時代およびイギリスで訓練を受けた世代が退役し，また1960年代のマレーシア社会全体の変化に伴い，軍隊におけるマレー人の比率が90％に達し，イスラム教の価値観が根づくなど，軍の伝統や価値観に変化の生ずる要因がみられるようになってきた。

当研究では，マレーシア国軍とその伝統の形成過程を歴史的にとらえる一方，マレーシア社会の社会的文化的変化が，国軍エリートの意識や価値観の変化にどのような影響を与えているかを探る。

26. マレーシアの8家族：民族とマレーシアの開発がもたらした社会・経済的結果 (アジザー K.)

当研究は，マレー系，中国系，インド系，および先住民という四つの民族から成る複合民族国家マレーシアの社会の全体像を，ある共通の視角からとらえることを目的としている。当研究では，都市部と農村部に住む4民族，合計で8の家族の世代史を再構成することにより，従来ほとんど試みられていない民族を超えたマレーシア社会の全体像に迫ることを目指す。

研究に当たっては，マレー系，中国系，インド系のマレーシア人研究者と日本人研究者が共同で文化人類学的調査を行う。

27. 古典ネワール語辞書編纂

(P. B. カンサカール)

ネワール語はチベット・ビルマ語族のなかで，文字をもちしかも古い時代の文書が残っている数少ない言語の一つである。古典ネワール語の編纂を目指す当プロジェクトにはこれまで5年間助成を行ってきた。この助成により，古典ネワール語で書かれた戯曲，物語，宗教・哲学作品，詩，歌謡，歴史文献などから，辞書に収録する語彙の抽出，翻字，翻訳の作業が行われた。辞書の完成には，拾い出した語彙の語形変化のチェック，意味の再検討，英訳などの編集作業が必要となる。編集作業は昨年度から開始され，今年度も継続する。

28. ブキドノン：1946年－1985年

(M. M. ラオ)

ミンダナオ島には非イスラム教徒，非キリスト教徒の民族が多くみられる。これらのグループをフィリピン国家に統合しようという努力はなされているが，近年イスラム教徒の統合のほうに注意が集中してしまっているため，これらのグループには十分な配慮がなされていない。

当研究ではこれらの民族のなかからブキドノンを選び，その歴史を書き，彼らがフィリピン社会にどのように統合されようとしているのかを記述する。また開発プロジェクトが彼らの生活水準の向上に役立ったかどうかを確認する。

29. フィリピン国立公文書館のスペイン語古文書インヴェントリー作成 (R. A. コンセプシオン)

フィリピン国立公文書館には1,000万点以上のスペイン語文書が所蔵されているとされているが，それらの古文書はごく簡単に分類されているだけで，その正確な数は現在に至るまで確認されていない。それらを最大限に活用するための最善の方法は，その内容を正確にリストアップしたインヴェントリーを作成することである。この作業の必要性は明らかであったが，資金とふさわしい人材が不足していたために，長い間手が付けられずにあった。当研究者は国立公文書館内部のスタッフであり，当プロジェクトを行う最適の人材である。

30. バナハウ山の神話と儀礼：宗教伝説の構造と役割を世界観の指標としてとらえる研究 (G. M. ペシガン)

バナハウ山の麓に19世紀末の革命グループの流れをくむ人々が宗教集団となって生活している。これらの人々は神話を信じ，儀礼を行う。民間信仰とキリスト教の混合したものである。

当研究の目的は彼らの世界観を知るために，その神話と儀礼を記述し，その構造と役割を明らかにすることである。バナハウ山の人々の世界観を理解することはフィリピンの民間信仰の代表的精神を理解することになる。方法論的には一つの宗教集団を選び，民族誌的調査を行う。

31. フィリピンのイスラム芸術と建築：土着と現代

(R. N. カニェーダ)

ミンダナオとスルーにはフィリピン土着のイスラム建築がみられるが，当研究はその地理的分布を調べ，民俗学的特徴を明らかにすることを目的としている。これらの建築物はフィリピンのオリジナルな要素とヒンドゥー，マレー，中国，中東の影響が混在する建築的・美術的特色を有する。当研究は1989年度に第3年度の助成が決定したが，代表者のA. T. ティアムソン氏が第3年度開始の前に急死した。そこで共同研究者であるR. N. カニェーダ氏は1年間プロジェクトを停止し，プロジェクト体制を立て直し今回の助成となった。

32. フィリピン諸語辞書

(E. コンスタンティーノ)

当研究者は過去20年間，さまざまなフィリピン言語の辞書を編纂してきた。当プロジェクトでは，研究者のこれまでの蓄積を集大成し，105の言語を対象とするフィリピン諸語辞書を編纂しようとするものである。辞書の見出し語は約2万語で，各見出し語は英語でつくられ，その後にフィリピン諸語での同義語を示す。データ処理にはコンピュータを使い，各年度に約35言語を対象に作業を行っている。

33. スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査，翻字，翻訳，出版

(V. B. リキュアナン)

当プロジェクトの目的はフィリピンがマゼランに発見された1521年からスペイン植民地時代の終わりまでのフィリピンの歴史についての古文書で，セビリアの古文書館に保存されているもののうち，未出版のものについて調査，翻字，英訳を行い，分類して出版することである。3年間で200年分の古文書の調査を行い，100年分の古文書の英訳を出版する。その後は本の売上げを資金として，助成金なしで事業を遂行する。本書が出版されれば，スペイン語を読めなくても，またスペインに文献調査に行く費用がなくても歴史研究が可能となる。

34. マラナオ族の叙事詩『ダランガン』の出版

(M. D. コロネル)

フィリピン，ミンダナオ島のマラナオ族はフィリピン第2のイスラム教徒グループで，スペイン統治時代もキリスト教化されることなく，その伝統を保持してきた。このマラナオ族は叙事詩『ダランガン』を有している。これはマラナオ族がイスラム化される以前から口承で伝えられた叙事詩であるが，イスラムの到来とともに変形アラビア文字キリムで記録された。

当プロジェクトは，キリム文字をローマ字表記に翻字した古典マラナオ語のテキストに英訳をつけた形で出版することを目的としている。

35. マノボ族の叙事詩『ウラヒーガン』の記録，翻訳，編集，出版

(E. G. マキソ)

北コタバト州に住む山岳少数民族，マノボ族のもつ口承の叙事詩，『ウラヒーガン』は最高の神に選ばれたマノボ族の一族がさまざまな困難に直面しながらも，この神への信仰を捨てず，最終的に天国と不死の生を与えられるという物語である。隠喩，頭韻，対句，シンボリズム等の文学的手法が使われるこの伝承文学は古代ギリシャの叙事詩との比較にも値するものである。前年度に引き続き，詠唱される叙事詩を記録し，英訳し，編集し，オリジナルをローマ字表記したテキストと英訳を出版するための作業を行う。

36. フィリピンの各言語による文学のピリピノ語への翻訳・出版

(E. M. パチェコ)

フィリピン人の国家形成とナショナル・アイデンティティの探求の努力にとって自分たちの文化遺産の理解は重要である。その文化遺産の主要素はフィリピンの多様な言語で書かれた文学である。タガログ語を基にするピリピノ語を国語として浸透させていこうという傾向が強まるなかで，他の言語の文学の伝統も保持していくためには十分な配慮が必要とされる。そこで当研究ではフィリピンの八つの主要な民族グループの言語で伝承されているか，書かれた文学をピリピノ語に翻訳し出版しようとするものである。

37. マニラ社会史：1765年－1898年

(M. L. T. カマガイ)

スペイン植民地時代のマニラ社会のダイナミックス，すなわち，各社会階層間の関係，また外国人コミュニティを形成していたスペイン人，イギリス人，中国人，日本人らの外国人グループ間の相互関係について分析した全体的な研究はいまだなされていない。

当研究は各社会階層の人々の生活を記述することによりマニラ社会の特色と多様性を明確にしようとするものである。方法論的には公文書館での文献調査を行っているが，特に当時の雰囲気をとらえるために，文学，聖像画資料等も第1次資料として使う。

38. スバネン族の民俗伝承：文化変容の研究

(J. V. エンリケス)

スバネン族はサンボアンガ半島とミサミス・オクシデンタル州に住む少数民族で，二つのグループに分けられる。第1のグループは平地に住み，近年キリスト教やイスラム教を受け入れている。第2は山岳地帯に住み，彼らの伝統を保持している。

当研究の目的はスバネン族の民族伝承を総合的に収集，保存するとともに，民俗伝承にみられる西欧文化の影響を明らかにし，文化変容を調べることである。スバネン族の民俗伝承についての総合的な研究はいまだなされたことがなく，成果が期待される。

39. 18世紀におけるフィリピン聖職者の起源

(L. P. R. サンチャゴ)

現在のフィリピン社会においてカソリック教会の果たす役割は大きい。国民の多数を占めるカソリック信者は，彼らの日常生活の指針および精神的支えとして，教会の聖職者たちの教えを請う。したがって，現在のフィリピン社会およびそのなかでの聖職者の役割を理解するために，フィリピン人の聖職者の起源を研究することは重要なことである。

当プロジェクトは18世紀のフィリピン人聖職者に関する正しい理解を得るために，聖職者を分類し，それぞれの特徴，社会での役割を文献調査により明らかにする。

40. アジアの宮廷音楽の共通要素の探究

(J. マセダ)

アジアの宮廷音楽は多様にみえるが，共通の要素がある。当研究は以下の目的で行われる。①ジャワのガムラン，タイの宮廷音楽(ピーパード)，日本の雅楽を分析することを通じて，東アジアと東南アジアの宮廷音楽の具体的なつながりを示す。②音楽的なつながりを補うために，歴史的，民族学的，文化的つながりを示す。③音楽の要素の源泉を探究する。最終的にはアジアの音楽の共通点が中国の宮廷音楽からだけでなく，東アジアと東南アジアの民族音楽からも派生していることを理解することを可能にしようというものである。

41. フィリピンの国家組織発達の社会・政治および文化的側面：1946年－1990年　(E. R. サンタ・ロマナ)

当研究は1946年から現在までの，フィリピンにおける国家組織と国家権力の発達，進化，退化の社会・政治的，経済的，文化的側面を分析する。当研究の基本的見地は，フィリピンにおける国家組織と権力の発達は失敗であり，現在の私有化された政治権力を導いたというものである。特に官僚組織を改革し，国と地方レベルの政府の関係を改善し，政党の構造を改革するための政策提言を行う。

42. ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習　(H. K. グロリア)

フィリピンでは木材切出しによる森林伐採が問題となっているが，同時に山岳少数民族による焼畑農業も環境破壊の要因であると信じられている。しかし人類学者は，その土地土着の民族で焼畑を行う人々は，その土地の条件に適応した，環境を破壊しない焼畑の技術をつくり上げてきたと主張している。当研究では，ミンダナオで焼畑を行うさまざまなグループの土着の環境保護の方法を明らかにすることを目的とする。

43. フィリピン研究のための固有の資料

(J. M. フランシスコ)

フィリピンの言語で書かれた文書は古くは16世紀のものが存在するといわれているが，それらの文書は各所に散らばって保存されている。最近これらのフィリピンの言語で書かれた文書を使って，フィリピンの植民地の経験を明らかにし，フィリピン文化の発展の研究を，より細かいニュアンスをもたせて行うということがなされている。しかしこれらのフィリピン固有の文書はフィリピン人研究者の手に入りにくいのが現状である。そこで当研究では，これらの文書をマイクロフィルムで収集し，活字にし，部分的に出版しようとするものである。

44. アヌラダプラ都城部の考古学プロジェクト：遺物の整理・研究と報告書の作成　(S. セネヴィラトネ)

アヌラダプラはスリランカ島北部に位置し，紀元前5世紀から後11世紀まで栄えたスリランカ最初の首都である。アヌラダプラ遺跡の都城部は，8mの壁で囲まれ，東西南北4箇所に門をもつ広さ100haの地域で最古の住居跡があると考えられる。

スリランカ政府考古学局は，1969年から都城部でテストピットを13本掘り，陶器片，ビーズ，コイン，動植物など多量の遺物を発掘してきた。当プロジェクトでは，これまでに発掘された遺物の編年作業などの考古学研究を行い報告書として出版する。

45. タイの古代織物の研究

(チラポン A.)

当研究ではタイの古代織物の素材と織り方の技術を研究対象とする。タイの中部，北部，東北部の考古学発掘現場から発見された1,500の青銅と鉄の器物から，140の古代織物が確認されている。これらの織物は長い間放置され，失われてしまったものもある。当研究者は1978年からこれらの織物のサンプルを収集している。これらはきめが荒く，開放機で織ったものである。使われている繊維は麻，絹，綿，バナナの繊維，アスベストである。繊維の分析は顕微鏡観察と化学試験で行われる。また古代織物と現代の少数民族の原始的織物とを比較する。

46. パンニャサ・ジャータカの北タイ版の研究

(ピチット A.)

ジャータカ物語は，釈迦が悟りを開くまでに輪廻転生を重ねた前世を描いた仏教説話である。仏教が広まるにつれて，各地方の風俗・習慣を取り入れたその地方独特の地方版が生まれた。15～16世紀に北タイの僧が書いたとされるパンニャサ・ジャータカはこのような地方版の一つで，北タイ王国のみでなく周辺の諸王国などにも受け入れられ広く東南アジアの仏教国に定着していった。

当研究は，この発祥地である北タイ版の定本づくりである。これまで多数の貝葉文献異本の翻字，研究を行った。この作業の続行と定本の選定・出版を行う。

47. 固有の知識体系の活力と再生への展望

(チャンタナ B.)

当研究ではタイの文化と開発の研究にとって欠けていた要素である固有の知識体系を取り上げる。固有の知識体系に関する研究はタイ文化の活動を提示するばかりでなく，開発の実用面にも役立つ成果をもたらす。しかしタイが近代化し，NIESの地位を得ようとしているとき，固有の知識体系の役割は特に政策レベルで重要視されていない。タイ社会にとって，固有の知識を失ってしまうことはタイ固有の技術と新しい技術のギャップを深めることである。当研究は固有の知識体系への関心を高め，その再生の可能性を探ることを目的とする。

48. タイにおけるホアビン人の研究

(スリン P.)

タイ西部にみられる石灰岩の洞窟を調査すると，これらの洞窟は狩猟と採集によって生活していたホアビン人の生活の場であったことが明らかになり，中石器時代の人々と分類される。それに対して，低地で農耕を行っていた人々は道具をつくり，新石器時代の人々であると考えられる。当研究では，タイの後期ホアビン人は狩猟，採集の生活から農耕の生活へ移行したかどうか，もしそうだとしたら，ホアビン文化から新石器文化へ移行した理由を，人口増加，食料不足，生態系の変化，技術革新，等の要因から明らかにする。

49. 東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷
(タダ S.)

8世紀から13世紀までのタイの東北部はクメール王国の影響下にあり，東北タイにはいまもクメール遺跡が散在している。当研究ではこれらのクメール遺跡の歴史を明らかにしようとするものである。具体的には，それらの遺跡の起源，発展，放棄，再生，都市の変化の傾向について理解し，遺跡のタイプと体系を明らかにし，クメール文化の保存と振興を図り，東北タイにおけるクメールの歴史と文化的背景の理解を促進する。当研究者はタイ政府の芸術局で遺跡の保存の担当をしており，現在はコンケン大学に出向しており，適材を得ている。

50. タイ法制史：シャム王国と南部王国の法的システムの比較研究 (ピティナイ C.)

タイの法制の歴史を考えるとき，四つの古代の文化の中心地が挙げられる。そこでは，①ランナ王国：北タイの9県で，タイ－ユアン語の文字で貝葉に書かれた資料。②東北タイ（イサン）王国：東北タイの14県で，タイ－ノイ語の文字で貝葉に書かれた資料。③南タイ（タクシン）王国：南タイの14県で，タイ語とクメール語の文字で白または黒ブット（本）に書かれた資料。④シャム王国：タイ中央部の35県で，タイ語およびクメール語の文字でサムッド・コイ（本）に書かれた資料，がみつかる。当研究はこれらの法制の比較を行うものである。

51. 現代クメール語との関連における古代・中世クメール語辞書 (ウライシー V.)

当研究の目的は，6世紀から19世紀のクメール碑文にみられる古代および中世のクメール語の辞書を編纂することである。当辞書には2万語の語彙項目を収める。語彙項目は東北タイで発見された碑文とフランス人の研究者がいままでに出版している資料から採る。表記は，クメール文字，ローマ字で翻字したもの，音声記号，によって行い，タイ語とフランス語または英語で意味を説明する。辞書の冒頭には古代，中世，現代クメール語の音韻学的システムと語形論的システムについての研究成果を含める。

52. 東南アジアと中国南部の後期青銅器時代に関する国際会議 (チェタナ N.)

中国南部と東南アジア（特にヴェトナムとタイ）における考古学的研究は，青銅器時代についての新しい知識を生み出し，青銅器文化の広がりの地域的および年代的な類似点と相違点のパターンをみることを可能にした。また考古学に関連する分野でも研究が行われている。しかしこれらのデータの蓄積にもかかわらず，青銅器時代全体についての理解はあまり進んでいない。今回の会議では，現地での発見やデータをより広い地域的な視野から検討し，専門分野を超えてコミュニケーションを図るためにタイで行われる。

53. ヴェトナム百科事典
(P. N. クウォン)

ヴェトナムでは，科学，文化，芸術等に関する情報が必要であるが，これらの情報はなかなか入手しにくい。そこで百科事典の編纂が急務である。この百科事典はヴェトナム4,000年の歴史の間に生み出された科学的，文化的，芸術的知識を一般の人々に与え，同時に世界の同様の知識も紹介するものである。

ヴェトナム百科事典編纂国家評議会が編纂を組織する。国家評議会は6人の学者により構成され，その下に特別委員30人，24の委員会のメンバー220人，執筆者と助言者300人を動員する。

54. ヴェトナムの漢字およびノム文字による碑文研究
(N. Q. ホン)

日本や韓国のようにヴェトナムにも漢字および漢字を基にしてつくられたヴェトナムのノム文字で書かれた文献が残っている。これらの文献は多様な形で残っているが，当研究では，石，青銅，木に彫り込まれた文献を対象とする。

20世紀初頭から1945年までの間にフランスの学者がヴェトナムの学者の協力を得て，碑文を採集し，整理したが，それ以降は組織的な収集は行われていない。多くの重要な碑文が，特にヴェトナム南部の省で手つかずの状態にあり，それらの碑文の拓本収集は急務である。

55. ヴェトナムのタイーヌン少数民族

(B. V. ダン)

ヴェトナムはアジアにおいて十字路のような位置にあるため，東アジアと東南アジアの文化の研究に重要な役割を果たす。ヴェトナムの54の民族グループはその文化のさまざまな価値を保存してきた。しかしこれらの民族グループは現在急速な変化を遂げており，詳細で組織的な民族学的研究が急務である。

当研究では共通の歴史的起源をもち，同じ言語グループに属し，文化的共通性をもつタイ族とヌン族について研究を行う。人口が多く，北部山岳地域に住むこれらの民族はヴェトナムの歴史に特別の役割を果たしてきた。

56. チャムの歴史と文化

(N. C. ビン)

チャム族のチャンパ王国は永年の中国支配に対抗して2世紀後半に出現した。チャム族はオーストロ・アジア人種に属し，言語的にはマラヨ・ポリネシア系の言語を有する。文字は古代サンスクリットから派生したもので，碑文が残っている。チャム族の宗教はヒンズー教の変形したものであったが，多くはイスラム教に改宗している。

当研究は歴史上一時隆盛をきわめた王国の流れをくむ人々の歴史を調べ，文化を保存することを目的としている。またチャム族と東南アジアの民族との相似点や関係も明らかにする。

57. 19世紀以降の北ヴェトナム・デルタにおける農業生産組織の伝統的要因が現代に及ぼす影響 (C. V. ラム)

歴史的にはヴェトナムの農業は稲作のみを行う伝統的小規模生産から，より多角的で生産性の高い，生産共同組合や国家経営の農園のような新しい農業生産の形態へと変化した。しかし，これらの上から押し付けられた形態は実際的な問題を解決することができず，失敗に終わっている場合もある。伝統的要因が農業地帯の経済活動や社会活動に及ぼしている影響はいまだに大きい。より高い生産性と生活のレベルの向上を目指して，伝統的要因のプラスの面を保持し，強化しながら農業生産組織に関する有効な政策を策定することが当研究の目的である。

58. ヴェトナム語の中の中国語を語源とする四千の要素

(H. V. ハン)

当研究の目的はヴェトナム語のなかの中国語を語源とする4,000の要素を収集し，体系化することである。ヴェトナム語の単語で経済，政治，法律の分野で使われている単語の6割，および大衆の使う言葉の単語の5割は中国語が語源であるといわれている。

これらヴェトナム語で使われている中国語を語源とする単語およびヴェトナムでつくられた漢字は約4,000の要素から成っている。これらの要素はヴェトナム語では意味を担う最小の言語単位で，特に科学用語で新しい単語をつくる際のモデルとなる。

59. ヴェトナムのフオン・ウオック（村の法律）についての文書の保存と記録 (N. D. トン)

封建時代にヴェトナムの村は封建国家の法律で治められていたと同時に，各村の法律で治められており，これらの法律は国の法律よりも厳しく実施されていた。社会科学情報研究所はこれらの法律の文書を6,000以上保存している。その半分はヴェトナム語で，半分は漢字およびヴェトナムでつくられた漢字で書かれている。

当研究では村の法律の文書で，いまだに収集されずにあるものを収集し，すでに保存されているものと合わせてヴェトナム語の文書はコンピュータに入力し，漢字の文書はマイクロフィルム化する。内容の分析も行う。

60. 南ヴェトナムのヴェト族の民族文化

(N. Q. ヴィン)

南ヴェトナムの3世紀にわたる開発において，北ヴェトナムを出身地とするヴェト族が，北から南へ移住してきた。ヴェト族はヴェトナムの民族グループのなかで最も人口が多い。ヴェト族は南ヴェトナムに彼らの精神的特徴と民俗的伝統をもたらした。これらの文化的特色は南ヴェトナムの環境に適応しながらも，その伝統はいまも生きている。

当研究は南ヴェトナムのヴェト族の民族文化を体系的に記述するだけでなく，彼らの伝統文化が現代生活の発展に与えている重要性を明確にすることも目的とする。

61. 『ヴェトナム仏教史』の英訳と出版

(N. T. トウ)

仏教は，儒教，道教と並んでヴェトナムの主要な哲学的源泉であるが，近隣諸国の仏教と比較すると独自性を有している。ヴェトナム仏教史の研究は過去に相当の蓄積があるものの，度重なる戦火によってその成果の大半は散逸し失われてしまった。当プロジェクトは再統一後の初めての試みとしてヴェトナム仏教史の編纂を行い，『ヴェトナム仏教史』として 1988 年に出版した。

これは研究機関や学者に配布されたが，再版の希望が強く，また海外から英語版を作成してほしいという要望も高い。そこで今回英語版の出版を行う計画である。

62. 北ヴェトナムのヴェト族の伝統的祭り

(N. D. ティン)

ヴェトナムの祭りはヴェトナムが国家として形成された 3000 年前から現在に至るまで，大きな変遷を経ながら行われてきた。祭りは二つの種類に分けられ，第 1 は供物奉納や神の礼拝等の儀礼で，第 2 はゲームや演芸等の娯楽である。当研究の目的は祭りの記述だけではなく，信仰と宗教の世界観，社会構造にみられる価値観についても調査する。

伝統的文化活動の典型である祭りを理解することにより，当研究は伝統と近代化の調和を保つことも目指している。

63. 東洋文明とヴェトナムの伝統的家族

(N. P. トゥオン)

東アジアの国々と同様にヴェトナムの家族制度は儒教の影響を受けている。このことは家と村の関係，親戚関係，家と政府の関係の形成にも影響を及ぼしている。20 世紀初頭から現在まで，ヴェトナムは西洋文明と接触し，ヴェトナムの伝統的家族制度は大きな変化を遂げ，新しいタイプの家が出現した。

当研究の目的は，伝統的家族制度の異なった社会・経済条件のなかでの成立を研究し，儒教の影響に注目しながら，近代化にとって伝統的家族制度の組織が有効である場合と障害になる場合を明らかにすることである。

64. ヴェトナムとタイの社会科学者のセミナー：伝統と現代

(P. X. ナム)

近年の政治情勢の好転により，ヴェトナム－タイ関係は緊張・対立の時代から協力の時代へと変化しつつある。本会議は両国の社会・人文科学者が集まって，①両国の学者の相互理解を促進し，②両国間の全ての分野における協力の学術的基盤づくりを行い，③経済分野のみならず，社会・文化的領域における東南アジア地域の安定と発展に両国が寄与すること，を目的にハノイとホーチミン市で開催される。本会議では，経済的側面を象徴する“現在”と社会・文化的側面を象徴する“伝統”の間の調和の取れたあり方をメインテーマに意見交換と討議を行う。

65. ヴェトナムの仏教寺院

(N. D. ディウ)

紀元ごろヴェトナムに入ってきた仏教は，さまざまな変遷を遂げつつ，現在もヴェトナムの人々の精神的・文化的生活の中心の一つを成している。ヴェトナムに現存する仏教寺院および寺院遺跡に残る，建築，石碑，装飾，文献などはヴェトナムの主要な歴史的文化遺産である。当プロジェクトは，ヴェトナムの仏教寺院について，多くの写真を含む包括的な本を出版しようとする試みである。このため，歴史的，建築的，美術的に重要な寺院の調査を行い，写真を撮影し，文献調査，比較研究を行う。

66. 15 世紀から 18 世紀のヴェトナム封建制度の法律とその慣行

(D. T. ウック)

当研究は 15 世紀から 18 世紀のヴェトナムの封建時代に編まれた主要な法律について，もともとの印刷された形で残されているものと，筆写された形で残されているものとを対象として行われる。そのために，これらの文書を収集，分析，編集，比較，分類し，主要な法律についてできるだけ整った完本を作成する。これらの文書はヴェトナム各地に残されているので，収集する際に各地方で，伝統的慣習や法がどのように行われているかを調査する。また同時に中国語とフランス語で書かれた関連文献をヴェトナム語に翻訳する。

67. 村落コミュニティの心理とヴェトナムの文化生活におけるその遺産　(D. ロン)

ヴェトナムの人口の 90％を占める農民は，長い歴史を通して閉ざされた村のなかで生活してきた。この歴史を通して形成された村落コミュニティの心理は，急速に変化しつつある現代社会のなかで農村が望ましい方向へ発展していくために，良い側面と悪い側面をもっている。当研究では，村落コミュニティの心理形成の背景となった経済・社会的要因を研究し，心理の表現形態としての伝統的慣習を調査，心理の地域変差とその理由を明らかにし，現在の経済的・政治的・文化的・社会的諸要因の影響の下で，心理が変化している点について調査する。

68. 北ヴェトナム・デルタ地域の商業を主たる生業とする村　(P. H. レ)

17世紀からヴェトナムの村は，①農業を中心とする村，②工芸を中心とする村，③商業を中心とする村の 3 種類に分かれてきた。当研究はこのようなヴェトナムの商業に主たる生業とする村の歴史研究であり，以下の点を明らかにすることを目指す。商品経済が農村部に入ってきたとき，村の構造はどのようになっていたか，商業を中心とする村はどのような社会的ネットワークをもっていたか，商業を中心とする村が 17 世紀に出現し，18, 19 世紀を通して植民地支配にもかかわらず発達した理由等である。このために文献調査とフィールド・ワークを行う。

IV-2. 国際助成 インドネシア若手研究者奨励研究助成

インドネシア若手研究者奨励研究助成は，1987年度より開始したプログラムである。その目的は研究資金に乏しいインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者に，研究費を提供しようとするものである。その趣旨に鑑み，対象となる研究は個人研究に限り，比較的小規模の助成金をなるべく多くの若手研究者に提供することとした。

応募件数はインドネシア全国から418件あり，選考の結果選ばれた31件は36歳以下の若手研究者の研究であった。うち10件は修士論文執筆のための研究である。研究テーマとしては経済学，経営学，文化人類学，教育学，文学，歴史学，農業経済学などの分野から数名ずつが選ばれる結果となった。

本年度の特徴は，申請件数が多いことに鑑み助成件数を増やしたこと，また当プログラムとしては初めて継続助成（1件）を行ったことである。また，従来助成対象者の出なかった七つの大学や機関から初めて対象者が出，またポンティアナクから初めて助成対象者が出た。保健所の医師やプサントレン（イスラム塾）の教師など，現場をもつ人も何人か選ばれた。女性の数は6名であった。

助成対象一覧

（継2）：継続2年目

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ルピア）
1	ボゴール郡におけるアブドゥール・カディール・ジャエラニ物語を読む伝統 ムハマッド ハミディ　インドネシア大学文学部　講師　32歳	4,370,000
2	ワヤン劇カルトピヨガの意味論的考察 ハイルル アンワル　インドネシア芸術大学　講師　35歳	3,480,000
3	ララ・ムンドゥット物語――パティ，ブローラ及びその周辺の社会での受容と創作―― T. Y. プラセトヨ ウトモ　ディポヌゴロ大学文学部　講師　31歳	3,730,000
4	中部ジャワ，ジェパラの手工芸者社会における伝統的治療師の役割――スコドノ村のケース―― ムジャヒリン トヒール　インドネシア大学文化人類学大学院　大学院生　36歳	3,000,000
5	マッベレとマットゥヌ・アレ――南スラウェシ，ジョレ村のブギス族の焼畑活動の研究―― パウェンナリ ヒジャン　ハサヌディン大学社会政治学部　講師　30歳	5,850,000
6	小学生の学習達成度に対して，学習援助・指導の与える影響――西カリマンタン，ポンティアナク市の華人とマレー人の親の態度の研究―― アグン ハルトヨ　タンジュンプラ大学教員養成学部　講師　29歳	3,800,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 （ルピア）
7	ブンクル州北ブンクル県エンガノ島のエンガノ族の社会構造への外来者の影響 ヌルシルワン エフェンディ　アンダラス大学文学部　講師　26歳	5,870,000
8	小規模産業開発における女性の役割，及びその農村部の子どもの教育との関連 ――ジョグジャカルタ，カソガンの陶器工芸産業のケーススタディ―― スリ ムラツィ　インドネシア科学院開発分析センター　研究員　33歳	4,550,000
9	再定住プロジェクトにおける社会文化的障害 ――メンタウェイ諸島シブルット郡のケーススタディ―― ジョンリ ロザ　アンダラス大学文学部　講師　27歳	3,900,000
10	乳幼児の予防接種の不接種の発生に関する諸要素 ――プルウォレジョ県ブラバ郡ポスヤンドゥーの研究―― スリストヨワティ　クラテン県保健局　35歳	3,870,000
11	バリの慣習法の村トゥガン・プグリンシガンの Awig-Awig（書かれた慣習法）と環境保護 ――伝統と変化についての研究―― イダ バグス ダルミカ　ヒンドゥダルマ大学　講師　32歳	2,800,000
12	ミナンカバウ族の慣習，ピダト・アダット・パサンバハン――民族言語学的一考察―― メディア サンドゥラ カシ　アンダラス大学文学部　講師　26歳	4,170,000
13	村落行政に関する 1979 年第 5 法の実効をあげるための村長の指導力の役割についての研究 ――アチェ州ピディー県バダル・ドゥア・ダティII郡の二つの村のケース―― イダル バフリ イスマディ　アブルヤタマ大学経済学部　講師　30歳	4,450,000
14	会社登記―旧バニュマス理事官領の産業界の会社登記に対する法意識の研究 サルヨノ ハナディ　ジェンデラル・スディルマン大学法学部　講師　33歳	3,850,000
15	南スラウェシ，ルウ県サバン郡タロボックの移住地における生活水準向上にとってのプサントレン（イスラム塾）・バドゥル・ラフマ ラムラ M.　プサントレン・ダトッ・スライマン　29歳	3,200,000
16	農村部女性労働力の近代化と都市産業セクターへの流入――女性の役割――地位及び家計と農村開発の相関関係に関する東ジャワ，クディリのケーススタディ―― リパナ プンタラサ　26歳	4,660,000
17	ボヨラリ県アンペル郡における“納税”と“寄付”に対する住民の態度の違いとそれに影響を与える要因 シャフリ アルフシン　ムハマディヤ大学ブンクル校　講師　28歳	3,900,000
18	スラバヤ市の不定職者の家計貯蓄のパターンと農村部への送金パターン ――貧困移民の社会経済的モビリティの研究―― セプティ アリアディ　アイルランガ大学社会政治学部　講師　27歳	2,930,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 (ルピア)
19	伝統的バティック商品における民間産業の成功についての研究――スラカルタ，ラウェヤンのバティック産業のケーススタディ―― ユニダ パガストゥティ　トゥナス・プンバグナン大学経済学部　講師　30歳	3,840,000
20	エネルギー節約型かまど利用の時間への影響――農村女性の役割の一研究―― A. ダナルドノ　ダナプラタパ財団　スタッフ　29歳	3,000,000
21	ウィスラン・ハディの演劇――ミナンカバウ族の集団主義の失敗と主観主義の伝統化―― シャフリル　26歳	3,570,000
22	工業都市と非工業都市における不定職者の生活の様相――スマラン市とジョグジャカルタ市の不定職者に関する研究―― イマム サントサ　ジェンデラル・スディルマン大学法学部　講師　29歳	3,820,000
23	バリ社会の社会・経済生活に対するプランテーションの影響，1870年－1945年 ――歴史に関する一研究―― I. P. グデ スウィタ　ウダヤナ大学文学部　講師　34歳	3,400,000
24	東ジャワのマラン及びトゥルガグンとジョグジャカルタのコソガンの土器作りの人々の食器製作技術の発展に対する考え方の比較研究 ブラシウス スプラプタ　マラン教育大学社会科教育学部　講師　31歳	5,100,000
25	19世紀と20世紀初頭のパラヒアガンのブパティ（現地人の下級植民地官僚）の生活様式 ニナ ヘルリナ　パジャジャラン大学文学部　講師　34歳	3,650,000
26	文化現象としてのバリの精神障害――看護婦の認識と行動についての一研究―― A. A. Ngr アノム クンバラ　ウダヤナ大学文学部　講師　33歳	3,830,000
27	センタニ語の伝統的表現方法に見られる教育的諸要素，及びその適用可能性についての分析 バーソロミュウ B. カイナカイム　チェンデラワシ大学　講師　31歳	4,000,000
28	南スラウェシ，ブルクンバ県カジャン郡のアンマトワ・コミュニティの生活環境保全の体系についての研究 アブドゥル カディル アフマッド　インドネシア・イスラム大学　講師　34歳	3,870,000
29	西ロンボック県における伝統的水利組織スバックの変化と新しい水利農民組合への移行に対する農民の態度 アレ フマン サレー　マタラム大学農学部　講師　29歳	3,370,000
30	海上生活，半海上生活，及び陸上生活のパターンがバジョ族の“sama-bagai”（同じ－似ている）というアイデンティティ及び彼らの文化価値体系に与える影響 ムハマッド ヒダヤット　農業研究および情報研究所　研究員　24歳	6,000,000

	研究題目 代表者　所属	助成金額 (ルピア)
31 (継 2)	インドネシア民族事典 ズルヤニ ヒダヤ　文化総局歴史・伝統的価値観局　スタッフ　34 歳	6,000,000
	合　計　31 件	125,830,000 ルピア (67,700 ドル)

Ⅴ．「隣人をよく知ろう」プログラム

V-0. プログラムの概要

「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は1978年度に発足し，日本向けのプログラムは13年目を迎えるに至ったが，1982年度から東南アジア向けのプログラム，また1983年度から東南アジア相互間のプログラムが開始された。1990年度からは，プログラムの対象地域に新たにインド，パキスタン，バングラデシュの南アジアの3か国を加え，従来のインドネシア，ヴェトナム，シンガポール，スリランカ，タイ，ネパール，ビルマ，フィリピン，マレーシア，ラオスと合わせ，東南アジア・南アジアの13か国を対象とすることとした。

日本向けプログラムのねらいは，日本の人々が隣人である東南アジア・南アジア諸国の人々の文化・社会・歴史等についての認識を深めることを推進することである。そのために，東南・南アジア各国の人々が書いた文学作品や文化・社会・歴史などについて日本の一般読者へ紹介することがふさわしいと思われる本を，相手国の人々の意見を反映しつつ選び出し，それらの本の日本語版を制作するときの翻訳費，および出版経費の一部を助成する。この13年間で138件が助成対象となった。各国別の累計は，インドネシア40件，ヴェトナム4件，シンガポール12件，スリランカ2件，タイ36件，ネパール4件，ビルマ18件，フィリピン12件，マレーシア10件である。

東南アジア・南アジア向けプログラムは，この地域の人々の日本に関する正しい理解を促進することを目標に，日本に関する社会科学書，人文科学書，文学作品および日本人によるこの地域の研究の成果を　　国の言語に翻訳・出版する際の助成を行う。従来は，助成対象となる現地の組織は一国一組織を原則とし，翻訳対象書の選定，翻訳者の選定，出版者の選定などをその組織が一括管理するプロジェクト方式を採ってきたが，1990年度からは一国複数の組織が行う翻訳・出版を1冊ごとに助成する個別方式も併せて採用した。1990年度には，インド3件，インドネシア1件，ヴェトナム2件，スリランカ1件，パキスタン1件，バングラデシュ2件，フィリピン1件，マレーシア1件が助成対象となった。

東南アジア・南アジア相互間プログラムは，この地域の人々の間の相互理

解を促進することをねらいとして，それぞれの国の人の手になる社会科学書，人文科学書，文学作品をほかの国の言語に翻訳・出版する際の助成を行う。1990年度にはヴェトナム2件，ネパール1件，マレーシア2件が助成対象になった。

V-1. 日本向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名（原著国名）	出版社名 編集者名	助成金額 （円）
1	ビルマ文学史 大野 徹ほか４名	*Myanma Sapay Thamaing* **U Pe Maung Tin**（ビルマ）	井村文化事業社 伝井 かほる	2,660,000
2	インドネシアの神髄：文化の旅 粕谷 俊樹	*Semangat Indonesia: Suatu Perjalanan Budaya* **Umar Kayam**（インドネシア）	穂高書店 加藤 昭雄	1,180,000
3	忘れられない年月 中野 亜里	*Nhung Nam Thang Khong The Nao Quen* **Vo Nguyen Giap**（ヴェトナム）	穂高書店 加藤 昭雄	840,000
4	ナソ～忘れ形見 野津 治仁	*Naso* **Guruprasad Mainali**（ネパール）	穂高書店 青柳 健	1,340,000
5	やしの森の女戦士――元南ヴェトナム解放軍指令官グエン・ティ・ディンの伝記―― 片山 須美子	*Nu Chien Si Ruang Dua* **Bich Thuan**（ヴェトナム）	穂高書店 青柳 健	1,620,000
6	ルキア／ウトゥイ　孤独な愛の風景――1950年代のインドネシア文学から―― 松野 明久	*Kejatuhan dan Hati* **S.Rukiah**（インドネシア） *Awal dan Mira, Sayang Ada Orang Lain, Di Langit Ada Bintang, Selamat Jalan Anak Kafur, Si Kabayan* **Utuy Tatang Sontani**（インドネシア）	現代企画 太田 昌国	1,960,000
7	蛇 桜田 育夫	*Ngu* **Wimol Sainimnoun**（タイ）	めこん 桑原 晨	1,580,000
8	テレグラム 森山 幹弘	*Telegram* **Putu Wijaya**（インドネシア）	めこん 桑原 学	1,090,000
9	旱魃 柏村 彰夫	*Kering* **Iwan Simatupang**（インドネシア）	めこん 桑原 学	1,320,000
10	レンドラ作品集 村井 吉敬　三宅 良美	*Kisah Perjuangan Suku Naga* ほか４作品 **W.S.Rendra**（インドネシア）	めこん 桑原 晨	1,990,000

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名（原著国名）	出版社名 編集者名	助成金額 （円）
11	曲がりくねった道	曲折的路	井村文化事業社	
	福永 平和　楊 凱栄	李 過（シンガポール）	伝井 かほる	2,020,000
	小　計（日本向け）	11 冊（インドネシア 5 冊，ヴェトナム 2 冊，シンガポール 1 冊，タイ 1 冊，ネパール 1 冊，ビルマ 1 冊）		17,600,000 円

助成対象概要（日本向け・翻訳出版促進助成）

1．ビルマ文学史

本書は，パガン王朝からコンバウン王朝に至るまでの約 800 年の間に書かれたビルマ語の文学作品について，その時代的背景，韻文，散文の形式，作家の経歴，作品のリストおよび梗概，作品を引用しての鑑賞と評価など，多方面からビルマ文学の変遷を，王朝の交替ごとに章を改め，時代別，年代順に解説したビルマ文学史である。碑文，壁画文，貝葉，手書きの折本，刊本と文学作品を著す素材の変遷，文学に関する近接諸国との相関関係やその変遷，また文学の場が僧院から宮廷や田園に広がるなかでの作家の活躍情況，などが論じられている。

2．インドネシアの神髄：文化の旅

インドネシアは，3,000 余の島から成る群島国家であり，300 に及ぶ種族グループと約 250 の言語を有し，各地に独自の歴史的背景をもつさまざまな文化圏が存在する。一方，独立後 40 年を経て，共通の国民文化も育ちつつあるなかで，地方の伝統文化，伝統芸術の動向も興味深い。本書は，作家であると同時に，かつてジャカルタ芸術協会会長を務めたこともあるウマール・カヤムが，インドネシア各地 10 箇所を訪れ，地方の伝統文化の現状をレポートしたものである。地方文化に造詣の深い筆者の記述は，伝統文化の将来に対し示唆に富んでいる。

3．忘れられない年月

本書は，1945年のヴェトナム民主共和国独立から1946年の第1次インドシナ戦争の勃発までの時期を対象に，ホー・チ・ミンにまつわる思い出を中心に，人民軍将軍ボー・グェン・ザップが語り，作家フー・マイが聞き書きするという形式を採った同将軍の回想録である。1945年の「8月革命」を経て，ホー・チ・ミンを首班とする国家が独立を宣言し，その後インドシナに復帰したフランス植民地当局や，同地に進駐した蔣介石軍との交渉のいきさつが，ホー・チ・ミンと彼をとりまく人々を主人公とした物語ふうにまとめられている。

4．ナソ～忘れ形見

本書は，近代ネパール短編小説史の揺籃期に傑出した作家グルプラサッド・マイナリ（1900～71年）の短編11編を集めた短編集である。マイナリは，転勤でネパール各地を回るうち，その目と耳で実際に見聞きした事件を題材に取り入れて，ネパールの農村風景，文化，風俗，習慣をその作品のなかで鮮やかに描き出し，ネパール短編小説界で写実主義を確立させた。夫が新しい妻を迎えることとなる子供のできない夫婦を描いた表題作「ナソ」をはじめ，本短編集は，虐げられたネパール女性の悲哀，女性の目からみた社会を描いている。

5．やしの森の女戦士――元南ヴェトナム解放軍副司令官グエン・ティ・ディンの伝記

本書は，元南ヴェトナム解放軍副司令官，ヴェトナム婦女連合会会長，ヴェトナム国家評議会副議長のグエン・ティ・ディン女史の少女時代から1975年の全土解放までの半生を，ハノイ出身の作家ビック・トアン女史が綴った伝記である。ディン女史は同じ解放活動家であった夫の獄死，一人息子の病死など一人の女性として悲しみを背負いつつ，それを乗り越え1960年のベンチェ蜂起を指導し，解放民族戦線に身を投じる。本書は，信念に支えられた自立した女性の生き様を描き出す一方，女史の半生を通してヴェトナム現代史を提示している。

6．ルキア／ウトゥイ　孤独な愛の風景――1950年代のインドネシア文学から

1950年代にインドネシア共産党系の人民文化協会系の作家として活躍したスンダ地方出身のルキアとウトゥイの作品集である。両作家とも，作品の背景であるインドネシア独立からその直後の時代に対する見方がシニカルであり，個の確立をテーマとしている共通点がある。他方，ルキアは女性で，本書所収の中編小説では，愛をめぐる模索と挫折を流れるように語り，ウトゥイは，斜陽の感覚や徹底した虚無感を，ユーモアやアイロニーを交えて，テンポある戯曲にしている。文体の違いこそあれ，作品から，当時の精神史の重要な一場面が分かる。

7．蛇

本書は，伝統が根強く息づいているタイ中部の貧しい農村を舞台に，農民の生活，迷信，寺とのかかわりなどをリアルに描いた現代小説である。表題の「蛇」は，本書では仏教を象徴している。蛇が大きくなればなるほど，小さな餌では満足できず，やがて人を襲うようになる。すなわち，お寺もだんだん人々に重い負担を要求するようになってしまうことを，著者は主張している。現在もタイの人々の生き方を大きく規制している仏教を正面から取り上げ，仏教のあり方，僧侶の生き方を批判的に描いた本書は，タイ本国で大きな反響を呼んだ。

8．テレグラム

著者プトゥ・ウィジャヤは，インドネシアのシュールレアリズム文学の旗手であり，その作品の特徴は，「インドネシア」という枠を越えた同時代性にある。本作品は，彼の初期の代表作であり，精神と知識をもてあまし存在根拠を失った知識人の苦悩が描かれている。主人公は，大都市ジャカルタに住む一人の雑誌記者で，親族のしがらみや伝統的価値観から自由になって生活している。そんな彼の下へ故郷の大家族から電報が届き，その中身を推測するなかで，自らの生き方や社会のモラルと対決するといった精神的葛藤を空想の世界で繰り広げる。

9．旱魃

著者イワン・シマトゥパンは，それまでのインドネシアのどの文学の流れにも属さず，彗星のように現れて去っていった作家（没 1970 年）で，抽象性・観念性、不条理，ユニークな人物像，新しい文体といった特徴をもつきわめて特異な新しい作家である。本書も，移住民から成るある開拓村を舞台に元ゲリラ闘士で，大学に学びながらも退学し，自発的に開拓村へ赴いた主人公が，村を襲った旱魃を機に経験するさまざまな出来事を，抽象的・観念的に描写した作品であり，これまで日本に紹介されてきたインドネシアの文学作品とは作風を異にする。

10．レンドラ作品集

本書は，現代インドネシアの最も優れた芸術家の一人であるレンドラの戯曲，詩およびエッセイ集である。本書所収 5 編のうち「ナガ族の闘い」は，伝統的生業を基盤にして生活していたナガ村が，銅鉱石が発見されたことにより外国資本が入ってきて，その平和な社会が崩れていく過程を，ジャワ影絵芝居の様式を用いて描いた戯曲である。また，「ボニーへのブルース」や「開発のスケッチ」は，それまでの叙情的な作風から政治意識を強く打ち出し，明白な社会批判が展開される詩編であり，インドネシア青年層の圧倒的支持を得た。

11．曲がりくねった道

目覚ましい経済発展を遂げるシンガポール社会のなかで，その恩恵に欲すことのできない一般大衆の生活に目を向けた華文小説である。貧しい店員の長男である主人公の金発は，親の期待を一身に背負い，有名学校に入学したが，金持ちの子供にいじめられる毎日であった。両親がギャンブルに一攫千金の夢を託して失敗し，学校を続けられなくなった金発は，叔母夫婦の経営する喫茶店に丁稚奉公に出る。先輩店員の阿喜も金儲けを夢見ていたが，詐欺師の友人に騙されて刑務所行きとなる。シンガポールの「もう一つの現実」が描かれている。

V–2. 東南アジア・南アジア向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

(継 3)：継続 3 年目
(継 4)：継続 4 年目
(継 6)：継続 6 年目

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 (ドル)
1	*The Sun Also Sets: Lessons in 'Look East'* の翻訳と出版 ルスリ B. O.　社会分析研究所　所長（マレーシア）	11,000
2 (継 3)	フィリピン向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト F. S. ホセ　ソリダリティ財団　専務理事（フィリピン）	53,500
3 (継 4)	インドネシア向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト M. サストラプラテジャ　カルティ・サラナ財団　副理事長（インドネシア）	10,500
4 (継 6)	日本の産業，経済，経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版 V. D. ルオック　ヴェトナム社会科学委員会世界経済研究所　所長（ヴェトナム）	36,000
5 (継 4)	日本の伝説，民話，文化史，社会科学の本のヴェトナム語への翻訳と出版 N. D. ディウ　ヴェトナム社会科学委員会社会科学出版局　局長（ヴェトナム）	23,500
6	*The Sound of Waves*（『潮騒』）の翻訳と出版 F. ラッビ　アフメット記念財団　専務理事（バングラデシュ）	4,500
7 (継 4)	『地獄門』，『袈裟と盛遠』，『袈裟と夫』の翻訳と出版 D. A. ラジャカルナ　日本文学翻訳委員会（スリランカ）	5,800
8	*The River Ki*（『紀ノ川』）の翻訳と出版 R. シャー　マシャル財団　事務局長（パキスタン）	5,200
9	近代日本短編小説の選集の翻訳と出版 B. チョウドリ　文学翻訳クラブ　会長（バングラデシュ）	6,700
10	『砂漠の恐竜』の翻訳と出版 R. P. ダミジャ　ナンダルタ協会　会長代理（インド）	24,700

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 （ドル）
11	『破戒』の翻訳と出版	
	B. N. タンドン　ギャーンピット財団　専務理事（インド）	7,000
12	日本の5冊の絵本の翻訳と出版	
	M. ダヤル　ナショナル・ブック・トラスト　編集者（インド）	23,600
	小　計（東南アジア・南アジア向け）　12　件	**212,000 ドル （30,554,519 円）**

助成対象概要(東南アジア・南アジア向け・翻訳出版促進助成)

1．*The Sun Also Sets: Lessons in 'Look East'* の翻訳と出版　(ルスリ B. O.)

1980年代のはじめ，マレーシア政府は'Look East' 政策を打ち出し，日本・韓国・台湾等に学び，国の急速な工業化を押し進める諸政策を採った。本書は，日本，韓国，台湾の学者によるそれぞれの国の経済発展や工業化と，それに伴う諸問題を扱った論文集である。マレーシア国民一般には，これら近隣の工業国の実状や，それぞれにさまざまな問題を抱えていることが，十分には理解されていない。本書の，翻訳はこうした経済発展についての一面的認識を改善することを目的としている。

2．フィリピン向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト　(F. S. ホセ)

当プロジェクトは日本に関する社会科学書，人文科学書，文学作品をタガログ語，セブアノ語，イロカノ語に翻訳して出版する。フィリピンの人々の日本に対する正しい理解を促進することをねらいとしている。フィリピンは急速な近代化のプロセスにあり，近代化の前提条件を知るうえで，日本の経験から得られる視点は役立つ。

ソリダリティ財団はすでにフィリピンで東南アジア相互間の翻訳・出版を行い，翻訳・出版作業のための基盤ができている。第1，第2年度には21冊の本を翻訳・出版，第3年度にはさらに5冊の本の翻訳・出版を行う。

3．インドネシア向け『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト　(M. サストラプラテジャ)

当プロジェクトでは日本に関する社会科学書，人文科学書，文学作品をインドネシア語に翻訳して出版する。過去3年間の助成により，これまでに11冊の本がすでに翻訳され出版されているが，翻訳の原稿が完成しているにもかかわらず，出版社の都合で出版できずにいる本が7冊ある。そこで，これらの7冊のうち5冊を，助成対象者の所属する財団自らが出版することを企画している。当助成は，そのための印刷費の助成である。

4．日本の産業，経済，経営に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版　(V. D. ルオック)

当プロジェクトは日本の産業，経済，経営に関する本をヴェトナム語に翻訳・出版し，日本のこの分野に関してヴェトナムの研究者および関心のある人々の正しい理解促進を目的としている。

第1年度には3冊，第2年度には1冊，第3年度には2冊，第4年度には2冊，第5年度には2冊の本の翻訳，出版を行った。本年度はさらに，1冊2巻の翻訳，出版を行う。ヴェトナムでは，経済改革，開放政策が進められ諸外国への関心が高まっており，また経済改革の一つのモデルとして日本への関心も高い。

5．日本の伝説，民話，文化史，社会科学の本のヴェトナム語への翻訳と出版　(N. D. ディウ)

当プロジェクトでは，日本の伝説，民話，文化史，社会科学の本をヴェトナム語に翻訳・出版し，ヴェトナムの人々の日本に対する幅広い理解を促進することを目的としている。

第1年度，第2年度，第3年度にはそれぞれ2冊ずつの本の翻訳・出版を行った。本年度も引き続き2冊の本の翻訳，出版を予定している。ヴェトナムでは日本の経済発展についての関心が高いが，その背景となる日本の歴史や文化について伝えようとするものである。

6．*The Sound of Waves*（『潮騒』）の翻訳と出版　(F. ラッビ)

バングラデシュでは，これまで日本の文学作品が翻訳されて出版された例はほとんどない。そこで，バングラデシュのアフメット記念財団では日本の代表的文学作品を翻訳・出版することを計画している。

『潮騒』は，伊勢湾の入り口に浮かぶ初島を舞台に，青年と網元の娘の恋愛を描いた三島由紀夫の代表作の一つである。バングラデシュの人々にとって，この作品に描かれた素朴な恋愛は共感を呼ぶものであり，初めての日本文学の翻訳作品として適当であると判断された。

7．『地獄門』，『袈裟と盛遠』，『袈裟と夫』の翻訳と出版

(D. A. ラジャカルナ)

当助成対象者にはすでに3年間の助成が行われ，3冊の日本の本がシンハラ語に翻訳され，出版されている。助成対象者は，スリランカで日本映画の人気が高いことから，映画の代表作の原作を翻訳すれば，スリランカの人々になじみをもって受け入れられると考え，すでに黒沢明の『羅生門』のシナリオとその原作となった同名の芥川竜之介の短編を合わせて翻訳・出版している。今回は，衣笠貞二監督の映画『地獄門』のシナリオと，その原作の芥川竜之介の短編『袈裟と盛遠』，および菊池寛の『袈裟と夫』を合わせて翻訳・出版を計画している。

8．*The River Ki*（『紀ノ川』）の翻訳と出版

(R. シャー)

パキスタンでは，日本の文学作品が紹介された例はいくつかあるが，日本への関心が高い割にはあまり翻訳されていない。マシャル財団では重点領域の一つとして女性問題を考えており，日本の代表的女性作家の女性の生き方をテーマにした作品ということで『紀ノ川』が選ばれた。作品は，江戸末期から戦前までの紀州のある旧家の3代の女性たちの生き方を綴った有吉佐和子の代表作の一つである。日本の女性の生き方を女性の目で描いた作品であると同時に，日本の近代化が地方レベルでどのように進んできたかを知るうえでも好個の作品である。

9．近代日本短編小説の選集の翻訳と出版

(B. チョウドリ)

本短編集は，森鷗外，永井荷風，志賀直哉，谷崎潤一郎，川端康成など日本の代表的作家15名の20編の短編小説集であり，10数冊の英訳された既存の短編集から，本対象者のグループがバングラデシュの読者のために選んだものである。

既述のように，バングラデシュではこれまであまり日本文学作品が翻訳されたことがなく，そのため本助成対象者のグループでは短編小説の選集から始めるのがよいと考えこの翻訳を企画した。

10．『砂漠の恐竜』の翻訳と出版

(R. P. ダミジャ)

本書は，第5回野間絵本コンクールで金賞となった作品で，田島伸二作，Kang Woo-Hyon（韓国）絵，による絵本である。この絵本は，人間が互いに争うことの愚かしさを訴えた作品で，ターバンを巻いた人々が現れるなどインドの子供たちにも分かりやすい絵柄となっている。

当プログラムとしては従来にない，絵本の翻訳・出版である。インドに限らず発展途上国全般で絵本を翻訳・出版したいというニーズは高い。

11．『破戒』の翻訳と出版

(B. N. タンドン)

インドにおいても，これまで日本の文学作品が紹介された例は多くない。

『破戒』は，島崎藤村の代表作であると同時に，明治文学の代表作の一つともいえよう。被差別部落出身の青年が，決してそのことを他人に話してはいけないという父の教えを守りながらも，次第に差別と闘うことに目覚め，ついに父の戒律を破るという作品である。

インドもまた，カースト差別という根強い社会問題を抱えており，その意味でこの作品はインドの人々に強く訴えるところがあるという理由で，本作品が選ばれた。

12．日本の5冊の絵本の翻訳と出版

(M. ダヤル)

既述のように他の発展途上国と同様，インドでも子供のための本はそのニーズに対して十分な供給が行えないでいる。そこで，ナショナル・ブック・トラストでは日本の優れた絵本の翻訳・出版を行う。

選ばれた5冊の絵本は，日本の絵本作家数名が推薦した約50冊のなかからインドの子供たちに適切であり，かつ比較的本の製作が容易であるという基準で選ばれた。いずれも日本の代表的作家の手になる作品である。これらの絵本は，インドの13の公用語で出版される。

V-3. 東南アジア・南アジア相互間・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

(継 2)：継続 2 年目
(継 3)：継続 3 年目

	プロジェクト題名 代表者　所属	助成金額 (ドル)
1	*Islam's Intellectual Treasury* の翻訳と出版	
	アフマット S. C.　Ikraq 所長（マレーシア）	6,800
2	東南アジアの社会・経済発展に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版	
(継 3)	N. M. ハン　ヴェトナム社会科学委員会アジア太平洋研究所　所長（ヴェトナム）	27,000
3	東南アジアの歴史，文学，伝統に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版	
(継 3)	P. D. ズオン　ヴェトナム社会科学委員会東南アジア研究所　所長（ヴェトナム）	15,000
4	東南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト（マレーシア）	
(継 2)	ザリラ S.　学術振興財団　事務局長（マレーシア）	39,000
5	南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト（ネパール）	
(継 2)	K. M. シャクヤ　文学財団　理事長（ネパール）	10,900
	小　計（東南アジア・南アジア相互間）　5 件	**98,700 ドル (14,228,991 円)**
	「隣人をよく知ろう」プログラム合計　28 件	**(62,383,510 円)**

助成対象概要（東南アジア・南アジア相互間・翻訳出版促進助成）

1．*Islam's Intellectual Treasury* の翻訳と出版
（アフマット S. C.）

本書は，インドネシア人のイスラム研究者が，10数名の過去の著名なイスラム学者のさまざまな分野に関する著作をまとめ，インドネシアで出版した本である。本書の特徴は，長いイスラム学の歴史のなかで，その時代時代の進歩的学者の論文を集めている点である。言わば，改革派・近代派の立場から編まれたものである。インドネシア語とマレーシア語は，もともと同じ言語であるが，現在はかなり違った表現や語彙が多く，マレーシアの人々にとって，インドネシア語で書かれた本書は読むのが困難なため，マレーシア語への翻訳を企画している。

2．東南アジアの社会・経済発展に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版　（N. M. ハン）

当プロジェクトの目的は，近隣諸国についての理解を促進するために，東南アジアに関する本をヴェトナム語に翻訳・出版することである。ヴェトナムは現在，アセアン諸国との交流，協力を活発化させようとしているが，情報は非常に限られている。そこで，当プロジェクトはヴェトナムで現在最も緊急の課題であり，関心も高い社会・経済発展に関する本を対象に翻訳・出版を行う。

第1年度，第2年度ではそれぞれ2冊ずつの翻訳・出版を行った。本年度も引き続き，2冊の翻訳・出版を行う予定である。

3．東南アジアの歴史，文学，伝統に関する本のヴェトナム語への翻訳と出版　（P. D. ズオン）

前述のアジア太平洋研究所のプロジェクトは，社会・経済発展の本が対象であるが，当プロジェクトでは東南アジアの歴史，文学，伝統に関する本を対象としてヴェトナム語への翻訳・出版を行うことを目的としている。

ヴェトナムはさまざまな文化的側面において，他の東南アジアの国々と共通するものをもっているが，隣国の歴史，文学，伝統について知るための本はほとんどないのが現状である。第1年度，第2年度にはそれぞれ1冊ずつの本の翻訳・出版を行った。本年度も引き続き，1冊の翻訳・出版を行う予定である。

4．東南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト（マレーシア）　（ザリラ S.）

当プロジェクトは，東南アジア向け『隣人をよく知ろう』プログラムを行って28冊の日本についての本をマレーシア語に翻訳・出版してきたグループが，引き続いて相互間プログラムをマレーシアで行うものである。マレーシアの近隣諸国である東南アジア各国の文学書をマレーシア語に翻訳して出版することを目ざす。

第1年度には，2冊の文学書の翻訳・出版を行った。本年度も引き続き，2冊の文学作品の翻訳・出版を計画している。

5．南アジア相互間『隣人をよく知ろう』翻訳出版共同プロジェクト（ネパール）　（K. M. シャクヤ）

当プロジェクトは，トヨタ財団の助成を受けて36冊の日本についての本をネパール語などに翻訳・出版してきたグループが，引き続いて南アジア諸国の文学書などをネパール語に翻訳して出版しようとするものである。

第1年度の助成により，インド，パキスタン，バングラデシュ，ブータンなどネパールの近隣諸国の文学作品の翻訳が開始された。本年度は，これらの作品の出版費の助成である。

Ⅵ．その他の助成

VI-0. その他の助成の概要

ＩからＶまでに紹介してきた基本的なプログラムのほか，これらに関連し，本年度は計画助成と成果発表助成を行った（東南アジア研究英訳刊行助成は昨年度で終了）。

計画助成は，一昨年度までのフォーラム助成，民間助成活動促進助成，特別研究助成，その他助成を昨年度に統合再編し，財団独自の調査と企画による弾力性のある助成を展開できるようにしたもので，本年度から助成対象を次の項目に整理した。すなわち，①現在および将来の財団のプログラムを展開するうえで重要と考えられるもの，②わが国の民間助成活動を活発化し，その発展を図るうえで重要と考えられるもの，③その他，他財団との共同助成として，あるいは緊急を要するものとして特に助成がふさわしいもの，の3項目である。これらについては一般公募は行わず，財団事務局と関係者の話し合いによって必要な時期に計画書を提出してもらい，企画会議で審査のうえ，年3回の理事会で決定している。ただし，緊急を要するものについては，理事長決済で決定できることとしている。本年度は12件，3,070万円に助成した。

成果発表助成は，当財団の研究助成等によって得られた成果を広く社会に発表することを目的に，報告書の印刷，出版物の刊行，シンポジウム等の開催，国際学会への出席などの経費を助成するもので，財団の助成受領者から随時申請を受け付け，企画会議で審査･決定している。本年度は18件，2,958万円の助成を行った。

なお，企画会議は理事長(12月以降)，常務理事，財団スタッフによる会議で，原則として毎月開催し，上記の審査をはじめ財団活動の主要事項を審議している。

VI-1. 計画助成

助成対象一覧

(継3)：継続3年目
(継4)：継続4年目

	テーマ 代表者　団体名	助成金額 (円)
1	第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する 池端 雪浦　日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム	3,000,000
2	民間公益活動に対する企業支援に関する研究 関 成一　財団法人公益法人協会	1,500,000
3 (継4)	日本企業の立地に伴うケンタッキー州ジョージタウンの生活共同体の変化に関する継続的検討 T. R. フォード　ケンタッキー大学地域開発研究センター	4,200,000
4 (継3)	社会科学協議会（SSRC），全米学会協議会（ACLS）の東南アジア合同委員会への日本研究者の参加 D. L. フェザーマン　米国・社会科学協議会	1,100,000
5	戦後科学技術の社会史に関する総合的研究（第6年度） 中山 茂　科学と社会フォーラム	3,500,000
6	財団法人助成財団資料センターの運営（1990年度） 神田 博　財団法人助成財団資料センター	5,000,000
7	アジア，アフリカ，ラテンアメリカ絵本作家によるシリーズ（全10巻）の刊行 田島 伸二　「太陽と海と大地と風の国の絵本」企画刊行委員会	600,000
8	アジア，アフリカの自立した出版活動の開発に関するセミナー P. C. アルトバック　オボール財団	2,100,000
9	近代日本の産業遺産のデータベース・システムの構築 内田 星美　産業遺産調査研究会	3,000,000
10	財団活動に関する韓国と日本の比較および交流 鄭 求 鉉　韓国・延世大学校商経大学	700,000

	テーマ 代表者　　団体名	助成金額 (円)
11	NGO 活動情報基盤整備事業（第 3 年度）	
	高見 敏弘　　NGO 活動推進センター	3,000,000
12	小冊子「東南アジアを知る 300 冊」の作成	
	金子 量重　　アジア民族造形文化研究所	3,000,000
	計画助成合計　　12　件	**30,700,000**

助成対象概要（計画助成）

1．第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する　（日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム）

第2次世界大戦時のフィリピンにおける日本軍政は，他の東南アジアとは異なり，状況が非常に悪かった。そのため日本軍政の問題はタブー視され，現地の研究者からは敬遠され，日本の研究者もためらってきた。

しかし近年，この時代を客観視する世代も育ってきており，フィリピン側の研究者との協力も可能になってきた。同種の作業としてはすでにインドネシアを対象に着実な成果を上げており，財団としてはそれに続く計画助成である。

2．民間公益活動に対する企業支援に関する研究　（財団法人公益法人協会）

民間の公益活動に関する研究の必要性が痛感されるが，この分野の研究は非常に少ない。この種の活動への社会的関心が高まっている現在，さまざまな研究者が積極的に研究に参加する機会を設ける努力が必要である。

今回の研究は，主として経済学的側面から2年計画で日・米・欧の比較を行い，そのなかから民間公益活動への企業支援の意義や役割を探り，わが国の社会に適した理論を見つけだそうとするものである。専門研究者に財団の関係者が協力して行う研究で，複数の財団による共同助成プロジェクトである。

3．日本企業の立地に伴うケンタッキー州ジョージタウンの生活共同体の変化に関する継続的検討（ケンタッキー大学地域開発研究センター）

アメリカ合衆国ケンタッキー州ジョージタウンとその周辺は，日本の自動車工業の進出によって大きく変化しつつある。その変化の過程，特に住民意識の変化を，地元のケンタッキー大学では継続的に調査しており，1986年度以来，財団もその一部に助成してきた。

今回の助成は，5回目の電話による住民アンケート調査を対象としたものである。一時期不安定になった住民意識は昨年調査でかなりの安定を取り戻したことが明らかになったが，それらの過程も含む5年の調査結果を，総括報告にまとめることも予定されている。

4．社会科学協議会，全米学会協議会の東南アジア合同委員会への日本研究者の参加　（米国・社会科学協議会）

表記の東南アジア合同委員会は世界的に影響力のある委員会で，日本の研究者が参加して世界の東南アジア研究の発展に寄与できることは，たいへん意義が大きい。そのような観点から，財団では同委員会からの要請によってすでに2回，日本の研究者の参加費用を助成してきた。

本年度は，1990年10月と1991年3月にそれぞれポートランド（アメリカ）とアムステルダム（オランダ）で東南アジア合同委員会が開催される。今回の助成はその委員会への参加を支援するものである。

5．戦後科学技術の社会史に関する総合的研究（第6年度）　（科学と社会フォーラム）

日本の現代史は，わが国における科学技術の定着と発展というテーマを抜きにしては語れない。それは政治史，経済史に劣らぬ重要な研究分野であるが，この分野の研究者の数は少なく，研究実績も個々の問題に限定され，体系的な現代科学技術の社会史はいまだ書かれていない。

1986年度に始まるこのプロジェクトは，この領域の研究が今後継続的に発展するための基礎づくりを目ざすもので，まず体系的な戦後科学技術の社会史を執筆・刊行することを目標とする。すでに10チームが執筆段階にあり，1992年から叢書としての発行が予定されている。

6．財団法人助成財団資料センターの運営（1990年度）　（財団法人助成財団資料センター）

助成財団資料センターは，民間助成活動の情報を収集・整備し，助成する側と助成を希望する側の橋渡しをするとともに，財団活動の社会的理解を促進することを目的に1985年11月に設立された。以来，資料の収集をはじめ，季刊情報誌『助成財団』や『助成団体要覧』（隔年）を発行し，活動の幅を広げてきた。

当財団は，設立以来その運営費の一部を助成してきたが，充実期にある現在，さらに継続が必要と判断し，本年度も助成することとした。

7．アジア，アフリカ，ラテンアメリカ絵本作家によるシリーズの刊行　（「太陽と海と大地と風の国の絵本」企画刊行委員会）

アジア，アフリカ，ラテンアメリカの絵本作家に絵本を出版する機会を与え，絵本の向上を図る目的から，ユネスコ・アジア文化センターでは「野間絵本原画コンクール」を実施してきた。そしてその出品作を，「太陽と海と大地と風の国の絵本」シリーズとして刊行することになった。しかし大量販売には向きにくく，費用的に困難が多いため，多数の関係機関の支援が必要である。

今回の助成は，全10巻50セットを買上げ，将来の普及に備えて重要と考えられる関係方面に献本するためのものである。

8．アジア，アフリカの自立した出版活動の開発に関するセミナー　（オボール財団）

先進諸国は，政府の海外援助や民間助成財団，そして世界銀行のような国際組織を通じて，過去40年間，第三世界における出版活動の促進を支援してきた。しかしアジアとアフリカの発展途上国では，さまざまな理由から，出版活動が十分に発達していない。

そこで今回，第三世界における図書開発の理論的な裏づけを深めるために，アジア諸国で図書開発を行ってきたオボール財団が国際セミナーを企画した。同様の活動をしている組織や人々の経験交流の機会として意義深いもので，財団もその費用の一部を負担することとした。

9．近代日本の産業遺産のデータベース・システムの構築　（産業遺産調査研究会）

産業技術の高度化とともに，近代日本の産業発達史を語る産業遺産が急速に散逸・消滅しつつあり，それらに関する基礎調査と保存策が急務となってきた。

今回の企画は，これまで東京，大阪，愛知などでそれぞれの方法で調査を進めてきたメンバーが共同し，それぞれの成果と方法を交換し合うなかから，全国的な統一性のある調査方法を確立し，将来的には日本全国に現存する産業遺産リストを作成，データベース化し，その収集・保存に役立てようとするものである。本年度は特に基礎的な検討を通じ，その具体化方針を確立する。

10．財団活動に関する韓国と日本の比較および交流　（鄭 求 鉉）

韓国は日本と類似の公益法人制度をもち，企業や企業グループの設立による財団も多数存在する。しかしお互いにそれぞれの財団活動の状況については必ずしも十分に理解していない。

今回の助成は，韓国の財団や企業寄附について調査を進めてきた延世大学校の3名の研究者の来日を支援するもので，3名は日本の主な財団や関係機関，関係者を訪問し，韓国との比較の視点から日本の財団活動の実態を把握するとともに，セミナー等の開催によって韓国の実状を報告し，相互理解を深めることとしている。

11．NGO活動情報基盤整備事業（第3年度）　（NGO活動推進センター）

わが国の発展途上国への政府開発援助（ODA）は急速に拡大しているが，民間による援助はその規模も小さく，担い手も少ない。このような状況の改善のためには，内外の関連情報を収集・整備し，多くの者が容易に利用できるようにすることが望まれる。

このような観点から，NGO活動推進センターは2年前に関連情報基盤の整備事業に着手し，資料を収集，その分類や海外文献の抄訳を進めてきた。今回は3年目の助成として，収集資料の索引を作成し，利用システムの確立を図ろうとするものである。

12．小冊子「東南アジアを知る300冊」の作成　（アジア民族造形文化研究所）

東南アジアへの関心が市民レベルでも少しずつ高まりつつあるなか，東南アジアに関する出版物も増え続けている。しかし，それらの本を一括してみられる適切な情報源はまだない。

今回の企画は，過去10年の間に出版された東南アジアを理解するのにふさわしいと思われる300冊の文献を選定し，その主題，内容，出版社，刊行年をテーマ別・国別に掲載した小冊子を作成するもので，1991年9月以降に六つの地域で開催されるブック・フェアにおいて頒布することを目的としている。

VI-2. 成果発表助成

助成対象一覧

	母体となる助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額（円）
1	88-KK-006 89-KK-002	第１回日本ネットワーカーズ会議の開催 朝倉 木綿子	①	1,200,000
2	88-II-053 89-III-018	長崎原爆残留プルトニウムの環境中での挙動に関する研究 ——地球規模汚染のトレーサーとして利用—— 工藤 章	④	550,000
3	84-Ⅰ-004	台湾原住民グヴァラン族の伝統文化とその変容 清水 純	②	1,500,000
4	83-2-II-060 84-III-034	地域における包括的な歯科保健活動の推進に関する研究 新庄 文明	②⑤	1,300,000
5	84-II-044 85-III-001	遺伝子の領域効果にもとづく発ガン機構の研究 直良 博人	④	580,000
6	88-Ⅰ-036	熱帯アジア山地植生—人間系の研究——キナバル山，マレイシア，サバ州の例—— 北山 兼弘	①⑤	1,000,000
7	87-Ⅰ-269	天然記念物ニホンヤマネの保護のための生活条件の研究とそれによる森林保全への応用および自然保護教育への教材化 湊 秋作	④	450,000
8	86-III-011	ASEAN 諸国の開発過程と日本の関わり方に関する研究 山下 彰一	②	1,500,000
9	88-Ⅰ-079	米国日系二世・三世に見られるアイデンティティの形成と変換——強制収容補償運動がアイデンティティに及ぼした影響を中心に—— 竹沢 泰子	④⑤	600,000
10	88-K-005	農村婦人との連携で地域の活性化をめざす都市主婦の活動の記録 福永 隆子	③	400,000

	母体となる助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額(円)
11	85-Ⅰ-250 87-Ⅰ-007	北極油田開発により変貌しようとするカリブーの季節移動とその狩猟生活に関するアラスカ原住民の記録 星野 道夫	②	2,000,000
12	87-Ⅰ-299	人間居住環境創造における企業参加の可能性——英国グランドワーク・システムのわが国への適用可能性に関する研究—— 小山 善彦	①	1,600,000
13	87-Ⅱ-172 89-Ⅲ-015	ラテンアメリカ主要国における対日イメージに関する研究 グスタボ・アンドラーデ	③	3,500,000
14	88-Ⅱ-014	多文化社会への華僑・華人の対応 ——日本・台湾における華僑学校卒業生の動向分析—— 杜 国輝	①	1,200,000
15	88-Ⅲ-006	韓国経済発展に関する歴史的研究——京幾道・忠清道地域の分析を通じて—— 中村 哲	⑤	1,500,000
16	85-Ⅱ-313 87-Ⅲ-003	西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究——漁船と漁具を中心に—— 柴田 恵司（E. フローレス代理）	①⑤	3,500,000
17	84-Ⅱ-047 85-Ⅲ-016	日本語対応『手話辞典』の編纂作成のための総合研究 田上 隆司	②	3,000,000
18	88-Ⅲ-037	アジアにおける近代建築に関する基礎研究——現存遺産調査②—— 中国・台湾・マカオ・香港 藤森 照信	①	4,200,000
		成果発表助成合計　　18 件		**29,580,000**

(注)表中の助成内容欄のマル数字は下記の内訳を示す。
①成果報告書の印刷　②出版物の刊行　③シンポジウム等の集会開催
④国際的学術研究集会への出席　⑤補足調査等の仕上げ業務

Ⅶ. 会計報告・事業日誌

VII–0. 事業実績の概要

今年度の助成事業の内訳は，次ページの表に示すとおりである。研究助成はⅠ，Ⅱ，Ⅲ種計で 56 件 2 億 70 万円，市民活動助成は 19 件 3,240 万円，国際助成は一般助成が 68 件 1 億 1,025 万 1,232 円*，インドネシア若手研究者奨励研究助成が 31 件 975 万 4,576 円*，「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は日本向けが 11 件 1,760 万円，東南アジア・南アジア向けが 12 件 3,055 万 4,519 円*，東南アジア・南アジア相互間が 5 件 1,422 万 8,991 円*，計画助成は 12 件 3,070 万円，成果発表助成は 18 件 2,958 万円，以上合計すると助成件数は 232 件，助成金総額は 4 億 7,576 万 9,318 円である。

その結果これまで 16 年間の助成金累計は件数で 2,664 件，金額で 73 億 358 万 9,670 円となった。なお，以上の金額は理事会決定段階のものであり，その後の変更（一部助成金の返納等）は含んでいない。

今年度の会計状況は p.110 以降の三つの表に示すとおりである。

また今年度の当財団主催事業としては第 27 回・第 28 回報告会（p.20 および p.51 参照），国際助成研究報告会（タイ・バンコク）（p.61 参照）を実施した。

＊金額が円単位まで細かくなっているのは，海外向け助成金については，為替相場による助成金の変動を防止するために，決定額をドルにしたためである。

助成金支出累計表

助成種別		1975～1985年度	1986年度	1987年度	1988年度	1989年度	**1990年度**	累計
研究助成		812 2,816,240	63 197,800	68 200,700	59 200,700	62 201,000	**56** **200,700**	1,120 3,817,140
市民活動助成		22 39,800	16 25,000	16 23,800	16 25,000	18 27,300	**19** **32,400**	107 173,300
研究コンクール助成		118 179,050	9 50,000	18 9,550	10 28,000	1 20,000	— —	156 286,600
国際助成	一般助成	208 751,803	52 99,520	71 122,160	67 113,229.^{411}	72 114,110.^{950}	**68** **110,251.^{232}**	538 1,311,074.^{593}
	若手研究	— —	— —	17 5,030	18 5,116.^{274}	24 6,490.^{140}	**31** **9,754.^{576}**	90 26,390.^{990}
国際学術研究集会助成		30 60,263	［当プログラムは1980年度にて終了］					30 60,263
「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成	日本向け版	100 208,930	9 13,720	8 14,460	4 10,200	6 11,250	**11** **17,600**	138 276,160
	東南アジア・南アジア向け版	11 85,410	4 24,770	6 25,130	6 24,806.^{962}	4 25,256.^{210}	**12** **30,554.^{519}**	43 215,927.^{691}
	東南アジア・南アジア相互版	11 26,930	4 15,550	3 18,130	6 14,537.^{038}	6 20,084.^{900}	**5** **14,228.^{991}**	35 109,460.^{929}
東南アジア諸語辞書編纂出版助成		3 22,500	2 12,000	— —	— —	— —	— —	5 34,500
東南アジア研究英訳刊行助成		— —	— —	1 14,530	1 14,549.^{227}	1 13,963.^{360}	当プログラムは1989年度にて終了	3 43,042.^{587}
フェローシップ助成		10 235,000	［当プログラムは1984年にて終了］					10 235,000
計画助成		24 64,500	9 38,000	9 39,600	9 35,650	11 32,800	**12** **30,700**	74 241,250
特別助成ほか		5 42,500	1 1,500	2 21,150	4 5,600	— —	— —	12 70,750
成果発表助成		200 245,089.^{880}	27 36,260	19 31,880	22 29,650	17 30,270	**18** **29,580**	303 402,729.^{880}
合計		1,554 4,778,015.^{880}	196 514,120	238 526,120	222 507,038.^{912}	222 502,525.^{560}	**232** **475,769.^{318}**	2,664 7,303,589.^{670}

(注) 1．金額は各年度の理事会で決定されたものであり，その後の変更については含んでいない。
2．上段は件数を表す。
3．下段は金額（千円）を表す。
4．計画助成金には，以前のフォーラム助成，特別研究助成，民間助成活動促進助成を含む。
5．特別助成金他は10周年記念特別助成金，日タイ修好100周年記念特別助成金，その他の助成金を示す。

Ⅶ－1．1990(平成 2)年度 会計報告

1．収支計算書（自 1990 年 4 月 1 日～至 1991 年 3 月 31 日）

	項目	金額（円）
収入	財産運用収入	814,944,327
	寄附金収入	150,000,000
	雑収入	1,794,464
	当期収入合計（A)	966,738,791
	前期繰越収支差額	228,781,613
	収入合計　(B)	1,195,520,404
支出	事業費	646,428,693
	管理費	127,826,258
	固定資産取得支出	2,457,216
	特定資産支出	9,963,863
	助成金準備積立金繰入額	150,000,000
	当期支出合計（C)	936,676,030
	当期収支差額（A)－（C)	30,062,761
次期繰越収支差額*	(B)－（C)	258,844,374

＊次期繰越収支差額は，次年度収入予算繰入

2．貸借対照表（1991年3月31日現在）

借方 科目	金額（円）	貸方 科目	金額（円）
（資産の部）		（負債の部）	
現金・預金	40,082,404	未払金	246,744,586
		預り金	3,607,686
有価証券	12,311,405,728	退職給与引当金	51,988,020
		助成金準備金	400,000,000
前払金	3,468,361	（正味財産の部）	
		正味財産	11,707,768,117
立替金	6,228,173	（うち基本金）	(7,000,000,000)
		（うち準基本金）	(4,400,000,000)
固定資産	48,923,743	（うち当期正味財産増加額）	(31,768,777)
合　計	**12,410,108,409**	**合　計**	**12,410,108,409**

3. 財産推移表

年度末	基本財産（円）	運用財産（円）*	正味財産計（円）
1974（昭和49）年度	3,000,000,000	133,057,559	3,133,057,559
1975（昭和50）年度	3,000,000,000	2,157,688,541	5,157,688,541
1976（昭和51）年度	3,000,000,000	3,186,517,747	6,186,517,747
1977（昭和52）年度	3,000,000,000	5,287,322,930	8,287,322,930
1978（昭和53）年度	3,000,000,000	7,399,047,725	10,399,047,725
1979（昭和54）年度	3,000,000,000	7,861,285,758	10,861,285,758
1980（昭和55）年度	7,000,000,000	4,003,621,400	11,003,621,400
1981（昭和56）年度	7,000,000,000	4,149,064,517	11,149,064,517
1982（昭和57）年度	7,000,000,000	4,287,154,437	11,287,154,437
1983（昭和58）年度	7,000,000,000	4,516,076,037	11,516,076,037
1984（昭和59）年度	7,000,000,000	4,657,945,551	11,657,945,551
1985（昭和60）年度	7,000,000,000	4,790,109,445	11,790,109,445
1986（昭和61）年度	7,000,000,000	4,895,989,935	11,895,989,935
1987（昭和62）年度	7,000,000,000	4,897,677,802	11,897,677,802
1988（昭和63）年度	7,000,000,000	4,638,898,571	11,638,898,571
1989（平成元）年度	7,000,000,000	4,675,999,340	11,675,999,340
1990（平成2）年度	**7,000,000,000**	**4,707,768,117**	**11,707,768,117**

＊運用財産のなかには，その他の固定資産および次期繰越収支差額を含む。

4. 助成金変更および返納一覧　　(自 1990年4月1日～至 1991年3月31日)

	助成番号	助成代表者・団体名 助成金種別 事由	助成決定日	上段：決定金額（円） 中段：変更および返納金（円） 下段：最終助成額（円）
1	89-Y-07	ハルトヨ インドネシア若手研究者奨励研究助成 研究中止	1989.9.20	3,890,000* 328,308 —
2	89-Y-23	バスコロ・テジョ インドネシア若手研究者奨励研究助成 研究中止	1989.9.20	3,000,000* 202,416 —
3	89-B-04	曹洞宗ボランティア会 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	1989.9.20	2,160,000 235,200 1,924,800
4	89-Y-19	ヨハネス・ウィドド インドネシア若手研究者奨励研究助成 助成金残	1989.9.20	4,500,000* 105,076 —
5	89-Ⅰ-002	タン・トゥン 国際助成 助成金残	1989.9.20	2,780,000 58,674 2,721,326
6	88-B-01	段々社 翻訳出版促進助成 翻訳枚数減	1988.9.21	1,880,000 112,000 1,768,000
7	86-Ⅰ-042 87-Ⅰ-061 88-Ⅰ-056	ポーンペン H. 国際助成 助成金残	1986.10.2 1987.10.1 1988.9.21	13,330,000 750,000 12,580,000

(注) この表は，各年度の年次報告書記載の助成金額（理事会で決定した金額）を，後に助成対象者側において，計画変更，辞退等の理由で変更したものの一覧表です。
＊ 金額単位はルピア

VII–2. 1990(平成2)年度 事業日誌

1990年4月1日	研究助成，市民活動助成公募開始	
4月28日	トヨタ財団レポート No.52 発行	
5月15日	第27回研究報告会（東京）「アラスカ発　いのちへの問いかけ」	
5月31日	*Occasional Report* No.11 （英文）発行	
5月31日	研究助成公募の受付締切（742件）	
6月20日	市民活動助成（第1期）公募の受付締切（49件）	
6月20日	第55回理事会	
	1989（平成元）年度事業報告，収支決算の承認	
	計画助成，助成先決定	4件
	評議員の選任	
	アドバイザー，選考委員・専門委員の選任	
	成果発表助成，助成先報告	5件
	第15回評議員会	
	財団活動状況の報告	
7月1日	第56回理事会	
	理事長・常務理事の選任	
7月25日	トヨタ財団レポート No.53 発行	
8月10日	1989（平成元）年度年次報告（和文）発行	
10月12日	第57回理事会	
	研究助成，助成先決定	57件
	市民活動助成（第1期），助成先決定	10件
	国際助成，助成先決定	99件
	翻訳出版促進助成（日本向け），助成先決定	11件
	翻訳出版促進助成(東南アジア・南アジア向け)，助成先決定	12件
	翻訳出版促進助成(東南アジア・南アジア相互間)，助成先決定	5件
	計画助成，助成先決定	6件
	成果発表助成，助成先報告	5件
10月17日	第16回助成金贈呈式	
10月31日	トヨタ財団レポート No.54 発行	
11月16日～18日	国際助成研究報告会（タイ・バンコク）	

11月30日	*Occasional Report* No.12 （英文）発行	
11月30日	市民活動助成（第２期）公募の受付締切（41件）	
12月17日	第58回理事会	
	会長・理事長の選任	
	研究助成，助成取消し	1件
12月25日	1989（平成元）年度年次報告書（英文）発行	
1991年１月21日	トヨタ財団レポート No.55 発行	
３月16日	第28回報告会（東京）「自立と共生をめざして」	
３月19日	第59回理事会	
	評議員の選任	
	市民活動助成（第２期），助成先決定	9件
	第５回研究コンクール最優秀賞・優秀賞の決定	3件
	計画助成，助成先決定	2件
	1990年度収支決算見込みの説明・承認	
	1991年度事業計画，収支予算の承認	
	専門委員の任期について	
	成果発表助成，助成先報告	8件
３月25日	翻訳出版促進助成　刊行物紹介（11）（和文）発行	

事務局員

1991年３月31日現在

事務局長　山口日出夫（常務理事兼）
事務局次長　亀沢　直道
総務部　亀沢　直道（部長兼）
伊藤　勝義（課長）　渡辺　元（兼）
牧田　東一（兼）　松倉　康子（主任）
成田　真澄（主任）　土方かほる　有泉
志乃　大野由利子　村井　美奈
プログラム担当部　山岡　義典（部長）
研究助成部門　山岡　義典（プログラム・ディレクター）
久須美雅昭（プログラム・オフィサー）
渡辺　元（プログラム・オフィサー）
国際助成部門　若山　佳子（チーフ・プログラム・オフィサー）
牧田　東一（プログラム・オフィサー）
姫本由美子（アシスタント・プログラム・オフィサー）

1990（平成２）年度年次報告

発行者　財団法人　トヨタ財団
〒163 東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階・私書箱236
TEL.（03）3344-1701～3
発行日　1991年８月20日
制　作　童夢出版株式会社
印　刷　真友工芸株式会社